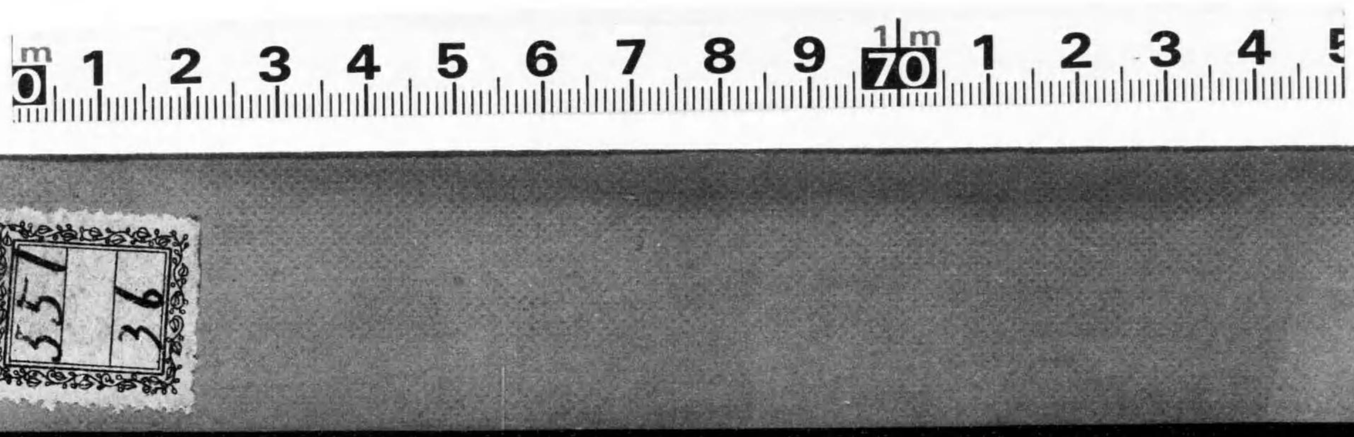
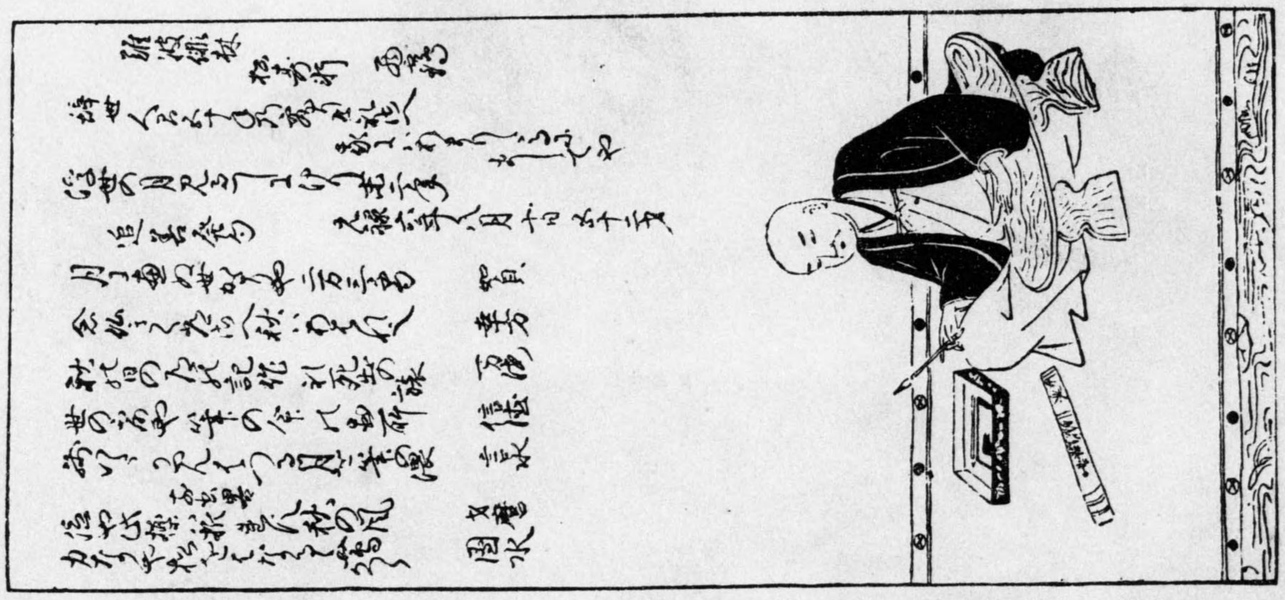

557
36

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4

西湖全集

大
15. 2. 5
內交



551-36

西鶴全集の刊行に就いて

一、本書は激職に從事してゐる私が、歸宅後人が酒を飲んだり、散歩をしたりする時間を利用して、西鶴物の研究に從事し、近頃漸く完成したので、親友石田彦三郎君の勸請に從ひ、過般發表した拙著近松全集の姉妹編として發表したものである。私は元來非常に讀書が好きで、夜は二時、三時まで起きてゐることが珍しくない。よく身體が續くものだと思ふことがある。併し何か仕事をして死に度いと思ふと、とても人のやうに安閑とし寢てゐられない。私は死後に墓場でゆつくり眠る積りだ、これが私の趣味であり、私の唯一の道樂だから仕方がないのだ。併し寢るといふことは誰に對しても誇りにはならないが、研究の結果を恁して一冊の單行本として出すといふ事は、無爲安眠を貪る者に對しては確に一種の誇りであり、また何となく自分でも一種の痛快さを感じるのだ。

二、本書に收めてある好色一代男、同二代男、同三代男、好色一代女、同五人女及び男色大鑑

は原作の儘を紹介することは到底許されないから、差支のない箇所だけを切拔して、これを發表することにした。西鶴物の特長は必ずしも猥褻な點にあるのではないから、强ひて危險を犯してまで猥褻な箇所を讀む必要はなかるべく、それよりもより以上緊要なことは、是等の諸名作を適當に修正して、その片影でもいゝからこれを永遠に傳へることであると思はれる。この意味に於て、本書に於ても以上の諸作に對しては既刊の西鶴物を參考として適當の修正を加へてあるから、隨て讀者は豫めその積りで讀まなければならぬ。

三、ある意味で私の知つてゐる者に田中といふ大馬鹿者がある。彼は自稱國語教科書の編纂者だが、その內容が頗るふるつてゐる。殊に彼の編纂した國語の中には八郎御曹子が九郎義經になり、吉原のことなどがあるから現代を超越して面白い。彼は高師出身だといふが、萬事がこの調子だから、彼の編纂した教科書には五十や百の誤謬などは朝飯前で、而も何事も大天狗で、文士を侮辱することは夥しく、現代文士の勞作を惡筆拙文だと罵倒し、一例を擧げると、本間久雄氏の作「社會化教育化」を「社會か教育か」と訂正して平氣でゐる。彼はこの調子で私に對しても盛に帝大卒業生の無能を漫罵し、「阿部某は役に立つ人間でない」とか、「沼波某は博士になる人ではない」とか、「岡田の漢文も知れたもんだ、校正に間違が多い」のと盛に攻擊をしてゐる。こんな馬鹿者の寢言は一々本氣になつて聞いてゐられないが、蔭で言はずに何故面と對つていはないのだ。私も彼の言葉に屢々興奮した結果本書を發表する氣にもなつたのだ。併し彼の拵へた教科書は少しも賣れないから仕舞には尻尾を出して夜逃するのも遠くはあるまい。

四、本書の世に出たのは全く中央出版社主石田君の好意によるもので、私はこの原稿料で太郎ちやんと照ちやんと君ちやんの供養をしてやり度いと思つてゐる。なほ私は是等の不幸な子供達のために、ゴルギーの「我が幼年時代」とハムスンの「夢みる人々」とハイネの書簡集「白孔雀」と「薔薇の花園」等を始め、私の最初の創作「中學時代」や「我が母」や「化粧品工場」などを近い將來にそれぞれ發表し、その原稿料で、不幸な子供達の小さな記念碑を建てゝもやり、同時に私の文壇へ乘出す第一歩にもし度いと思つてゐる。

大正十四年十二月八日

蘇武利三郎

伊原西鶴略傳

徳川時代の著名な浮世草子の作者で、談林の俳人としても名高い。寛永十九年（西暦一六四二年）大阪に生れた。松壽軒、鶴永、西鵬などと號した。初め西山宗因に就いて俳諧を學んだが、才藻富贍で、談林の鬼才と稱された。延寶二年、住吉社頭に二萬三千句の獨吟をなしてその名が漸く著はれた。因て二萬翁・二萬堂などの稱を得た。同五年、俳諧大矢數といふことを創め、一日に一千六百句を吐いて一世の視聽を驚嘆せしめた。同八年の夏、再び俳諧大矢數を興行した時には、句數が愈々多く、一日に四千句を吐き、殊に最後の一卷百句は捲線香二寸六分でなつたと傳へられる。これから達吟第一の名を博し、一時難波俳壇の點者として一世を俯視した。然しその句は名吟の傳はつてゐるものはなく、僅かに俳家奇人談に人口に膾炙した句として、「長持に春かくれゆく衣がへ」、「大みそか定めなき世の定めかな」の外三首を載せてあるに過ぎない。西鶴の眞の技倆は俳諧にはなかつたやうである。元和二年、始めて筆を小説に染め、好色一代男を著すに至り好評湧くが如く、その勢力は遠く江戸にまで及んで、貞享四年江戸で重版された。それから談林を退いて專ら小説を書いた。一代男は世に知られてゐる限りには、彼が初筆の小説で、浮世草子中の絶作と稱せられ、徳川時代の小説に一生面を開いたものであらう。一代男に次いで二代男、三代男・五人女・一代女等を出し、中にも一代女は名作と稱せられ、その筆もまた圓熟の域に達してゐるが、その評判は到底一代男に及ばなかつた。貞享三年に好色本禁止の令が出たので、豪放

な西鶴はこゝに一轉して武家物に筆を染め、貞享四年男色大鑑・武道傳來記等を著はして筆に自由の餘地あることを示した。然し武道に關する物語は元來西鶴が得意の壇場でなかつたから、形骸はこれを寫し得ても、その精神を傳へることは出來なかつた憾みがある。西鶴はまたよく自己の天分を知つて更に轉じて町人物に移り、日本永代藏・世間胸算用等を書いた。いはゆる町人物は京阪の町人の生活を描寫したもので、その觀察は極めて犀利を極め、彼の奇警な筆致と相俟つてその本領を發揮し、大いに讀者の喝采を博した。元祿六年八月十日歿、年五十二。寺町の誓願寺に葬つた。法名は仙喏西鶴居士。辭世は「浮世の月見過しにけり末二年。」といふ。江戸時代末期の大小說家瀧澤馬琴は輕々に人を許さなかつた人であるが、西鶴にだけは深く服してゐたといふ。西鶴の歿後百九年に、難波に遊んでその墓を弔し、徘徊躑躅して去ることが出來なかつたといふ。

尙ほ西鶴研究者のために、左にその著作年表を揭げて置かう。

書名	卷數	發行年代
○好色一代男	全八卷	天和二年版
○好色二代男	全八卷	貞享元年版
○諸國ばなし	全四卷	同二年版
○好色三代男	全五卷	同三年版
○好色五人女	全五卷	同年版
○好色一代女	全六卷	同年版
○本朝二十不孝	全五卷	同年版（この年好色本禁止令出づ）
○男色大鑑	全八卷	同年版
○武道傳來記	全八卷	同年版
○武家義理物語	全六卷	同年版
○日本永代藏	全六卷	貞享五年版
○新可笑記	全五卷	元祿元年版
○本朝櫻陰比事	全五卷	同二年版
○世間胸算用	全五卷	同五年版
○置土產	全五卷	同六年版（この年八月西鶴歿）
○織留	全六卷	同七年版（西鶴の歿後二年）
○俗づれ〻	全五卷	同八年版（西鶴の歿後三年）
○名殘の友	全五卷	同十二年版（西鶴の歿後七年）

この外に、俳句があるべきであるが、略傳にも述べてある通り、どういふ事情があつたものか西鶴の俳句で世に傳はつてゐるものは殆どないから、著作年表には載せないことにした。

西鶴全集

目次

一　好色一代男……一
二　好色二代男……二九
三　諸國はなし……五二
四　好色三代男……九九
五　好色五人女……一二七
六　本朝二十不孝……一三九
七　好色一代女……二〇九
八　美男大鑑（原名男色大鑑）……二四一
九　懐硯……二五七

目次

十　武家義理物語……三四二
○十一　日本永代藏……四三三
十二　新可笑記……五四九
○十三　胸算用……六四五
十四　西鶴置土產……七二九
十五　織留……八〇一
十六　名殘之友……九一五

好色一代男

一　わかれは當座拂

茶宇島のきれにてお物師が縫うてくれし前巾着に、こまかなる露を盜みためて、或夕暮小者あがりの若き者をまねぎ、同じ心の水のみなかみ、清水八坂にさし懸り、此あたりの事ではないか、日外物がたりせし歌よくうたうて酒飲んで然も憎からぬ女は、菊屋か、參河屋、蔦屋かと捜して、細道の萩垣を奥に入れば、梅に鶯の屏風、床には誰が彈き捨てし、樫の木の棹に一筋切れて、結ぶともなく、うるみ朱の煙草盆に、炭團の埋火絶えず、疊は何となく、打濕りて、心地よからず、思ひながら、例のとさん出て、祇園細工のあしつきに、杉板につけて燒たる魚、お定りの蛸、漬梅、色付の薑に、漆竹箸を、取そへ、をりふし春ふかく、藤色のりきん島に、譯知りだてなる、茶繻子の幅廣、挾み結びにして、朝鮮紗綾の二の物をほ

のかに、のべ紙に數齒枝をみせ懸け、髮は四つ折に、しどけなく束ねて、左の御手に、朱蓋の鉉を引提げ、立ち出づるより、淋しさうなる事かな、少酒など、是より給ましてといふもいやらしく、少時は、實のなき柏をあらしてありしが、無下に捨て難く、頂けば、濱燒の中程を、ふつゝかにはさみて、おさへまするといふ、はじめの程は、たまり兼ね、さらに又所を替へてと思ふ内に、忙しく銚子かへる事あり、ふと腰つきにえもいはれぬ所ありて、似卜が、やりくり合點か、二つ折の繪むしろに、木枕の音も又をかしく、最前のりきん島、うそ汚れたる淺黄のに替りて、鼻歌などにて、人待つけしき、今や、世之介十二より、聲も變りて、大人はづかしく、羞づるとはなくに、かく少時の事も、一世ならず觀さまの、お引合、末々馴染て、若又お腹に樣子が出來たらば、近所に幸ひ、子安の、お地藏は御ざり、大儀なれど百の餅舟は阿爺がするぞ、氣遣ひなしに帶とけ、と一つも、口を開かせず、わるごう有程盡して物しける、打解けて後、此女さしうつむいて、物をもいはず、泪ぐみてありしを、心もとなく尋ねければ、二三度はいはざりしが、しめやかなる物ごしゝて、われ今こそあれ、此跡の出替りまでは、さる宮樣がたにありしが、不慮におこゝろを、かけさせられ、末が末の我が住む許にしのび入らせ給ひ、むつましう語りし、其夜は忘れもやらず、雪のあさ〳〵と降りそめし十一月三日、かたじけなくも、御手づから、一トかたまりを、わがはだへは是ぢやと、ほゝに投入れさせ給ふ時の、御すがた、今かたさまにおもひ合せ、昔が思はるゝと語る。さては其宮樣に似たとは、どこが似たと戲るゝ、いづれを申べきや、ひとつとして、いきうつし、殊更風のはげしき朝、いかゞ暮すとて、白絖の着物給はり、又西陣に母を一人持候を不便とて、米味噌薪、家賃までを、十一歳にして、かしこくも、あそばしける、貴樣も、よろづに、氣のつきさうなるおかたさまと見えて、一としほお尤愛しう思ふなどゝ、はや其年に、思ふまゝの事共、其相手を見て、是ぞ、都の人たらしぞかし。

二　女は思はくの外

小鹽山の名木も、落花粮藉、今一トしほと惜まるゝ兼房といふ男達、其比は捕手居合はやりて、世の風俗も絲鬢にして刳りさげ、二すぢ懸の元結、上髭殘して、袖下九寸に足らず、染分の組帶、背鰄の長脇差、爰ぞと思ふ人大形は是、王城に住人の有樣、今に見比べて昔を捨つ

るぞかし、北野に詣でゝ梅を散らし、大谷に行きて藤をへし折り、烏部山の煙とは、五ふくつぎの煙草管筒、小者に瓢箪、毛巾着、鄙びたる事にぞありける、山つゞき岡崎といふ所に妙壽といへる比丘尼、草庵を結び、東南の明りを受けず、襖障子も假名文の反故張、上書を悉く破りしは、仔細らしく見えて、一間小闇くこしらへけるこそ、くせものなれ、爰はと友どちに聞けば洛中のくら宿なり、小川の絲屋者、室町の牙婆、其外しにく殿、爰にたよらぬといふ事なし、と云ひも果てぬに小づくりなる女、年の頃は片手を、四度計かぞふるころほひ、目のうちすゞしく、おもくさしげく見えて、どこともなう好もし、氷蒟蒻に海棠の花を折り添へ、妙壽に贈りて人々を羞らひ、今日は今熊野のあたりに、目藥あるをとゝのへとの、お使にまゐるのよし、事閙しく立出づるを、あはれと、妙壽に尋ねければ、あれは烏丸通、中せばおの〳〵御存じ、去御隱居の、めしつかひなりしが、同じおも屋の、内さばく人と申かはして、外の方へは、思ひもよらずと申程に、是はならずの森の柿の木、口へはひる物こそと、藥鑵たぎれば、茶碗みがきて、何がな、御馳走もがなと申侍る、晝も半時に傾むき、羽織も苦になり、重着もうたてかりしに、世之介頭巾はなさず、身をかためゝ、ありけるこそ、氣詰りに見えて、脱げといへども脱がず、其方は十六なれば、初冠して、出來業平と申侍る、ちと似合ひたるお貌を見むと、わるき者ありて頭巾とれば、左の鬢先掛けて、四寸あまり血ばしりて、正しく打たれたる疵あり、一座驚き、いかなる者にかかくは、致されけるぞ、男仲間に敗とらしては、何れも堪忍成難し、天狗の金兵衛、中六天の清八、花火屋の萬吉にてもあれ、我々有りながら、其仕返しなくては、と申せば、格別の儀也、すぐならぬ戀より、此仕合、かたれと申、いはねばならぬ義理になつて、さりとは各おもはるゝとは拔群の違ひ、我等が下屋敷、川原町に、小間物やの源助と申て、丹後宮津へ通ひ商するものあり、留守など賴むと申かはしける程に、折ふしは見舞ひて、火の用心申付しに、此女さはらき町の、去御方にありしよしにて、いとやさしき有樣を堪へ兼ねて、いろ〳〵道ならぬ事を、かきくどきて千束おくりけるに、返しもなくて、或時さしわたして、さなきだに思ひもよらざるに、二人の子も有る事を、さもしき御こゝろざしと、恥しむるをも顧みず、申かゝることこそ因果なれ、したがひ給はずば、劍の山を、目の前とくどけば、何とおもひけん、さ程におぼし召とは、聊存ぜず、さもあらば、今宵廿七日、月もなき夜こそ、人もしらまじ、し

のばせられよ、と申遺して、世上も靜まりて、門に立よれば、內よりくゞりをあけ懸け、是へ御入り候へと申もあへず、手ごろの割木にて、此ごとく眉間を討ちて、私兩夫に、見え候べきかと、戸をさしかためて入りける、世に又かゝる女もあるぞかし。

三　因果の關守

年八封の合ふ事、かならず疑ひたまふな、過ぎし極月の末に、安倍の外記といへる世界見通しの算置が申せしは、二十八の年は、出來心にて人の女に戀ひて一命浮雲く、片輪にも成る程の事有りぬべし、兼てつゝしめ、といへるを、何をか申事ぞ、胡散なる鳩の杖めと、なんでも無う聞き捨てしに、少もたがはず此身に成るこそ不思議なれと、剃落されしあたまを隱し、遠近人に遇ふも愧しく、信濃路に入りて、碓井峠を過ぎ、追分といふ所に、遊女と名付けて色のあさ黑きをみがき、木賊かる山家者を胼胝をなほさせ、さき織の肌馴しを、木曾の麻衣に着替へさせ、女郎に仕立ぬるこそあれ、都忘れて、是も爰にては面白し、折々は媚たる者の泊り合せて、習はしけるか、杯のまはりも覺え、あいするといふ事もしるぞすこしは慰にもなりて、まんざらの木男よりはまさるべし、旅寢の一夜をあかし、曙はやく道いそぐに、宿はづれの山陰に新關をすゑられ、手負を嚴しく改め、往來の笠はち卷をとらせけるに、世之介ありさまを咎めぬるこそ物憂し、此御吟味は何故ぞ、されば、此國の西にあたつて、かや原といふ里に、押入有りて、物を取るのみならず、人をあやめて逃げてゆく、主起合せ、あまた傷を負せぬ、夜の事なれば、面を見しらず、所々つまり〳〵に番をする、かゝる人改なるぞ、其方が片髮鬢、いかにしても合點のゆかぬ事ぞ、申わけあらば今也、さもなくば、此僉義の濟むまでは、爰を通さじ、と關守嚴しく申渡す、鹽竈にての女の首尾、殘らずかたれば、なほ胡散成者也、重而詮索すべしと、ひとやに入れられ、思ひの外なる難儀にあふ事、天罰たちまち身にあたりぬ、朝夕の暮しも公儀の飯とは悲しく、はじめの程は目もくらみ、泪にしづみ、前後もしらずありしに、奥より十人計の聲して、今入の小男、籠屋の作法にまかせ、胴を打たすと立かさなる、貌は色くろく、髮ながく、兩眼に光あつて、そのまゝ、世界の圖に見し牛鬼島のごとし、左右に取つき手玉につきて、上ぐる時、息はきれ、下さるゝ時、息つぎ、是でも死なれぬ命と起きあがるを、又、なれこ舞、何にても、藝をせ

よといぢる、是非なく立つて、花の都の、ぬめりぶし、長い刀に、長脇差を、ぼつこんで、おせさ、よいさと、うたへど、權輿もない顏して居る、これはと、樣子替へて、松原越えて と踊れば、一度に手をうつてよろこぶ、後は地獄にも近付と、枕をならべ薄緣に肌なれてかたる、我々は此度の盜人にはあらず、ふせやの森に居て、旅人をころし渡世にして、今長範と云はれしが、其科のがれず、終には捕へられて、此仕合とかたる、幕ての物憂さ、明けての淋しさ、塵紙にて、細工に、雙六の盤をこしらへ、二六、五三と乞目を打つ內にも、そこを切れといふ切の字、こゝろに、懸けるも笑し、戸口を閉めて、出さぬといふは猶嫌ふ事也、唐土にも此慰を、楊貴妃、虞子君の手にふれて、といひながら、明り取の狹間より隣をみれば、やさしき女有りける、あれはと、尋ねければ、連れそふ男憎みして、家出をせし其首尾惡き事ありとて、有のまゝを語る、是はおもしろき事かなと、天井の煤を齒枝に染めて、返す〳〵も書くどき、命ながらへたらばと、互に文取かはして、人の目をしのび、夜更けて格子に取つき、蚤しらみに咬れながら、到底成らぬ事を歎きける。

四　形見の水ぐし

御法事に付き諸國の籠拂ひ、有難や、あぶなき此身をのがれて彼女を負ひて、筑摩川わたりぬ、其夜は、大霰のふりける、くずやの軒に貫きしは、味噌玉か、何ぞと、人のひもじがる時、麓引捨てし柴積車の上に下し置て、其里に行きて椎の葉に、粟のめしを手もりに、茄子香の物を貰ひて、こゝろの急ぐ道の程、今二丁ばかりに成て、女の聲して、世之介樣と、泣くに驚き、近く走り着てみるに、あらけなき男四五人、竹の尖り槍、鹿おどしの弓、山拐、ふり上げて、大膽なる女め、命たすかりなば、宿にかへるべきを、親の方への道を替へて、何國へ如何なる奴が、連れゆくぞ、兄弟にもかゝる難儀、おもへば憎し、唯打ち殺せといふ、世之介取り付き詫びてもきかず、さては此男めと、立かさなりて打つほどに、荆、梔のぐろのもとに伏して、びり〳〵と身ぶるひして、出る息止まつて、入る息次第に尊い所へ參る計になりぬ、梢の雫自然に口に入りて、誠の氣を取直し、其女は遣らぬと起きあがれば、影も貌もなく、車はありし人の寢すがた、是非今宵は枕をはじめ、天にあらばお月さま、地に

あらば丸雪の玉の床と定め、おれがきる物を上に被せて、さうしてからと、思ひしに、悲しや互に心ばかりは通はし、肌がよいやら、悪いやら、それをもしらず、惜い事をしたと、邊を見れば、黄楊の水櫛落ちてけり、油臭きは女の手馴れし記念ぞ、是にて辻占を聞く事もがなと、岨づたひ、岩の陰道をゆくに、鐵砲に雉の雌鳥懸けて、ひとりごとに、さてももろき命かな、雄が歎かうといふ、身に引き當てゝ悲しく、其六七日も野を家となして尋ねけるに霜月二十九の夜、おのづと心の闇路をたどり、人家まれなる薄原に、篝火の影ほのかに、卒堵婆の數を見しは、いかなる人が世を去り、惜まるゝ身も有りぬべし、竹立てゝ、ちひさき石塔、なほあはれなり、さぞ此したには疱瘡の歎き、或は疳にてさきだち、母に思ひをさせしもと、棟の木陰より見るに、此所の百姓らしき者の二人して、埋みし棺桶を掘り返す心の程の凄くなりぬ、人の跫音を聞きて陰るゝ事の怪しく、それはと咎めて近よる、當惑して返事もせず、ありのまゝに此事語らずば後とは云はじと、反を返して怒れば、御ゆるし候へ、月日を送りかね、さま〳〵の心に成りて、今こゝに美しき女の土葬を掘り返し、黒髪、爪をはなつといふ、何のためにと聞けば、上方の傾城町へ毎年忍びて賣りにまかると語りぬ、求めてこれを何にするときけば、女郎の心中に、髪を切り爪をはなち、先方へ遣らせらるゝに本のは手くだの男につかはし、外の大臣へ五人も、七人も、きさまゆゑに切ると、文などに包み込みて送れば、もとより人に隱す事なれば、守袋などに入れて、深くかたじけながる事の笑しや、兎角目のまへにて切らし給へと申、今まで知らぬ事なり、さも有るべしと、死人を見れば、我が尋ぬる女、これはとしがみ付き、かゝる憂きめにあふ事、いかなる因果の廻りけるぞ、其時連れて退かずば、さもなきを、これ皆我が爲す業と、泪にくれて身もだえする、不思議や此女兩の眼を見ひらき、笑ひ顔して、間もなく又本のごとく成りぬ、二十九までの一期、何おもひ殘さじと、自害をするを、二人の者、色々押とゞめて歸る、分別所也。

五　夢の太刀風

世は五つの借物、取りに來た時、閻魔大王へ返さうまで、合せて三十年の夢、是からは何に成りともなれ、身の置所も定まらず、最上の寒河江といふ所に、我若年の時、衆道の念比せし人、住家もとめてありしを、今悲しさに、尋ね下りて逢ひぬ、十九年跡に別れし面影さす

が見忘れず、互に泪の際なく昔をかたるこそ、外の因とは異りて、替らぬしるしには、和州中澤の拜殿にて物せし時、慈覺大師の作の一寸八分の十一面、守本尊を贈りけるが、身をはなさず信心したまふこそうれし、此人も望みの奉公はかどらず、小者の一人も見えず、ちんからりに羽釜ひとつのたのしみ、明日の薪には風を待つて落葉かき集めて、里芋より外には味噌こしもあらず、壁に懸けたる物とては、蟹目、紙撚にて括りし扇、粘篦、唐がらし、鼻ねぢ、取縄、さりとてはあさましき世の暮し、何をか遊ばして、かく年月はと聞けば、今江戸にはやるとて蜋取蜘蛛を仕入れ、或時は壹文賣の長刀を削り、泣く子をたらし、天道、人をころしたまはず、けふまでは日をおくりぬ、はる〳〵爰にきて久しぶりなればせめて杯事をと、一腰の鍔をはづして、見せぬやうに德利を提げてゆくを、色々留めて、まづ此の程の足休めに今宵は寢て、殘る事共、明けてかたらんと、手もとに有りしあはせ砥を枕として臥しける、夜更け、主人は古き葛籠を明けて、嚊子はり弓、取出し、近の山陰に、狸の限りも無く暴れける、これを捕へて饗應にせまほしと、出てゆく、まだ身もぬくもらず、目もあはぬ内に、二階より梯の子をつたひて、頭は女、脚鳥のごとし、胴體は魚にまぎれず、浪の磯に寄る聲のして、世之介様、我を忘れ給ふか、石垣町の鯉屋の小まんが執心思ひしらせんといふ、枕わぎざしぬきうちに、手ごたへして失せぬ、うしろの方より、女、口ばしをならし、我は木挽の吉介が娘おはつが心魂也、ふたりが中は比翼というて、おもひ死をさした其恨みに、と飛で懸るを、是もたちまち斬りとめぬ、庭の片すみより、長二丈計の女、手足楓のやうに見えしが、凧ふき懸くる聲して、我は是高雄の紅葉見に、そゝのかされて、一期の男に毒を飼ひて、そなたに思ひ替へしに、はやくも見捨てたまひぬ、次郎吉が妻、見しつたか、と咬みつくを、組み伏せて討とめぬ、此時目もくらみ、氣勢も盡き果てつ、浮世の限りと思ふに、又空より十四五間も續きし大綱のさきに女の首ありて逆に舞ひさがり、我こそ上の醍醐あたりに身を法衣になし、後の世を大事と行ひすましてあるを、二たび髪をのばせ、程なく迷はし給ふ事、執着そこをさらせじと這ひ纏ひて、息をとめ、喉びに喰ひ着く所を、すかして刺殺し、もはや是までと、念佛申し、心の劍を捨てゝ西の方を拜み、危かりしに、彼浪人立歸りて見れば、其邊血しほに染めて、世之介前後をしらず、おどろき、耳近く呼返して、正氣の時、樣子を問へば、はじめをかたる、不思議と二階にあがれば、世之介四

人の女に書せたる起請、さん〳〵に切やぶりて有りける、されども神おろしの所々は殘り侍る、これおもふに、假にも書すまい物は是ぞかし。

六　ねがひの搔餅

三井の古寺、つかひ捨てるかねはあれど際なくて、終に柴屋町を見ぬ事新し、昔長柄の山の芋が鰻になるとや、さしも變つた事のあればなり、いざゆかん、心得たと、白川橋より大津へのもどり駕籠に、のつたりや勘六、是は俄にゆくも歸るも、はや八町に著けば、泊りぢや御ざらぬか、廣うてきれいな宿をとりて、何と女郎衆、今爰ではやるは誰ぢやと問へば、石山の觀音様が、はやりますといふ、さても人を見立てるやつかなと、其後亭主にあうて、傾城町の案内賴むと申せば、是は無用になされ、六欠や七欠ではたらぬといふ、勘六齒切をして腹を立て、忍べばこそ供をも連れず、風俗も野體にて出でしにと、滅多ぜきにせくを、世之介可笑がり、我に預けた金子出して見せいと笑うて居る、臺所には大聲をあげて、今夜は傾城買様の御泊ぢやなど、勘六を見ては指さして可笑がる、世之介も今は堪忍ならず、表に出れば、京より結構なるいせ參があるはと、門立ちさわぎ、練物をみるごとくぞかし、大阪の黑舟といふ乘懸馬、伏見の漣浪、淀のはんくわい、かれ是三疋揃へて七つ、蒲團を白縮緬にしめかけ、馬の沓にも唐絲をはかせ、何れも十二三なる娘の子、四替の大ふり袖、菅笠に紅裏うつて、なひまぜの紐を付け、其時は小室ぶしの最中、宿入にうたひて、馬子も兩口をとるぞかし、世之介を見るより、申々と抱おろされて、三人ながらしなだれて、お伊勢様べまゐります、かたさまは何として爰には御ざります、勘六は女郎狂ひの太鼓を持ちにきたが、あたまがいたい、うてとあれば、獨はかしら、ひとりは足、獨は御腰をひねる、しばらく我宿へはゆかず、其柴屋町を見せさんせ、下向してから、太夫様は咄のたねにもなります、見物したいといふ、されば連れてゆかんとて、三人さきに立てゝ、南の門に入れば、都に近き女郎の風俗も替りて、はし局に物いふ聲の高く、道ありくも大足にせはしく、著物も自墮落に帶ゆるく、化粧も目だつ程して、よしあし共に三味線をにぎり、頭をふつてうたひける、立まはる者は馬かた、丸太舟の水主共、浦邊の獵師、相撲取、鮨屋のむすこ、小問屋の若き者、戀も遠慮もむしやうやみに、見しりごしなる惡口、或は小尻とがめ、又は男だて、一町

に九所の喧嘩、ふむのたゝくの、頭巾を取るの、羽織が見えぬのと、只さわがしく、さばき髪して片肌ぬぎ、懐に鼻ねぢ、手に白刃取、此の所の色町を闘の場にするぞかし、命しらずの寄合、身を持ちたる者の夜ゆく所にあらず、しるべある揚屋に、兵作小太夫虎之介などあつめて、面白う遊びて、其あけの日は、禿共が立酒、さいはひ闕送りとて、隔子の女郎ひとりも殘さず一日買とふれをなし、御三寸過ぎし醉のまぎれに、三人の禿が何にても道中望にまかせてまゐらすべし、おもひ〳〵にこのめといふ、太夫様から萬に御こゝろ付させられ、ひとつも此上に願の事もなし、されば共乘懸あとさきに隔り、こゝろのまゝ咄のならぬ事氣の毒也、三人一緒に晝も寢ながら手づから搔餅を燒いて、それをなぐさみにしてゆく事ならばと申す、それこそ何よりやすき望なれと、即座に乘物二ちやうならべて、中のへだてを取はなち、釘鎌にてとぢ合せ、中に火鉢を仕懸、角に棚をつらせ、枕屏風手拭掛まで入れて、六尺十二人すぐりて、ちひさき家のありくがごとし、何事もなればなる物ぞかし。

七　喰さして袖のたちばな

情あつて、大氣に生れつき、風俗太夫職にそなはつて、衣裳よく著こなし、道中大抵に替り、すこしすしに見えて、幅のなき男は恐れて、あふ事稀也、取入つては好き事おほき人にして座配にぎやかに、床しめやかに、名譽、思ひを殘させ、別るゝよりはや重ねてあふ迄の日をいづれの敵にも待兼させ、召連れの者、駕籠までも、嵐ふく夜はわざとならぬ首尾に仕懸けて、さし捨ての杯、御こゝろざしは是でもつた、太鼓女郎にもおほかたなる譯は見ゆるし、宿の男などとの事は、末に名の立つを密にしめし、やり手が慾計の算用もきかず、いやしき物は手にもたず、禿が眠るをもしからず、夜更過る迄用の事ありてあのはずと、萬よしなに申なしては悦ばせ、太夫様の事ならばと、常々思はせて置き、點しき仔細ありける、世之介は其年より宿も定めず、權左衛門方にて三笠に逢ひそめ、何事も命ぎりと申あはせて、初の程はおもしろく、中程はをかしく、後は氣毒かさなり、宿よりは前廉の書出し、親方よりはせかるゝ、死なうならば今なれども、太夫がおもはくを見捨兼ね、自由にあはれぬ人目をしのび、今すこしさきに爰を通つたあとぞと、其道すぢを行きては歸り、もしもかゝるくら闇に、鬼の落した小判もがな、加賀殿のお言葉ひとつで、濟む事ぢやにと、おもうて甲斐なき

慾先だつて、まぼろしにも面影をみる事千度也、又いつもの時分とて、太夫しのび出て、今宵は中立賣の竹屋の七様の一座に、紀州の人、きちじよに、はじめて出合ひ、おもはしからず、きさまの事をあらため、是非に見きれとはつらし、是が見かぎらるる物かと、左の袖口より手をさし入れ、脇腹をいたくはつめらず、泪まじりの空、五月雨の比、忘れては盛かと見し蜜柑ひとつ、我口添へし跡ながら手から手に渡して、かた様は覺えてか、過ぎにし秋、自らが黒髪を拔かせられ、猿などして遊びし夜は、誰しのぶともなく騒きて按摩取の休齋が二階より落ちてと、はや口にかたるうちに、太夫様はと、聲々に尋ねけるこそ、身に答へて悲しく、あすの夜は人貌の見ゆるうちもくるしからずと、泣き別れしに、門をしめるとよばはる、或は主持、さはりある人、歸るにまぎれて、出口のあんどんうるさく横貌して走出、むかしはと口惜く、ぽんと町の、小宿にかへりぬ、かくれなき沙汰して太夫折檻すれども止めず、むごうあれれども、なほ聞かず、せんかたなく庭におろして、木綿の、ときあけ物をきせて、味噌こしを持たせ、豆腐より出でし細なる物を、買ひに遣はしけるに、是をも恥ぢず、おもふ人故なればと、其年の雪見月、はじめてふり積る、にくさもつもりて、丸裸にして、廣庭の柳に、くゝり付けて、重てあひ見る事是でも止めぬかと、責めても、逢ふまじきとはいはず、死ぬるをきはめ、五七日もしよくじをたつて、或日泪をこぼすを、妹女郎が、見る目も情なしと申せば、我身の成行を思ひし泪にはあらず、是程におもふとは、よもや敵様は、知らずやと申せし所へ、匂ひ油賣の太右衞門是を歎きぬ、此ものは世之介方へも、年比出入をおもひ合せ、此縄をときて給はれ、我身あしきを覺え侍ると、縄をとかして、白絵子の二布引さき、右の小指を喰ひきり、心のまゝ書つゞけて、賴むと太右衞門に渡して、もとのごとく成りて、今日をかぎりに舌かみきる所へ、世之介是を聞きもあへず、死出立にて駈こみしを、おの〳〵懸合せ、義理をつめ、至極にあつかひ、其後太夫を手に入れ侍る、かかる心底、又あるまじ、大阪屋のやつこ三笠と名をのこしぬ。

八　其姿は初むかし

石上ふるき高橋におもひ懸けざるはなし、太夫姿にそなはつて、顔にあいけう、目のはり强く、腰つきどうもいはれず、打解けてから、まだよい所ありと、さる譯知の語りぬ、さうな

うてから、髪の結ひぶり、物ごし利發、此太夫風義を、萬に付けて今に女郎の鏡にする事ぞかし、初雪の朝、俄に壺の口切りて、上林の太夫まじりに、世之介正客にして、喜右衛門方の二階座敷をかこうて、懸物には、白紙を表具しておかれけるは、深き心の有りさうにみえ侍る、茶菓子は、雛の行器に入れ、天目水鹿も、橘の紋付、つかひ捨の新しき道具も、所によりておもしろし、暫しありて、勝手より久次郎が、宇治から唯今歸りましたと申す、水こしの僉義あり、さては三の間の水を汲みにやられしと、一入うれしく、御客揃へば、高橋硯をならし、此雪其のまゝ眺め給ふ事はと、當座の望み、かの懸物にめい〳〵書の五句目迄、こと更に聞事也、中立あつてのおとづれに、獅子踊の三味線を彈るゝ、いづれもこゝろ玉にのつて、すこしうかれながら圍に入れば、竹の筒斗懸けられて、花のいらぬ事不思議に、此心を思ひ合ふに、けふは太夫様方のつき合、花は是にまさるべきやと、おぼしめさるゝ事にぞ有ける、高橋其日の裝束は、下に紅梅、上には白繻子に三番叟の縫紋、萌葱の薄衣に紅の唐房をつけ、尾長鳥のちらし形、髪ちご額にして、金の平元結を懸けて、其時の風情、天津乙女の妹などゝ、是をいふべし、手前のしをらしさ、千野利休も此人に生れ替られしかと疑れ侍る、ことすぎて、跡はやつして亂れ酒、いつにかはりてのなぐさみ、醉のまぎれに、世之介金錢銀錢紙入より打明けて、兩の手にすくひながら、太夫戴け、やらうといふ、此中では戴かれぬ所ぞかし、初心なる女郎は、脇からも赤面してゐられしに、高橋しとやかに打笑ひ、いかにも戴きますと、そばにありし丸盆に受けて、今目の前でいたゞくも、內證にて狀で戴くも同じ事と申して、禿を呼よせ、なうて叶はぬ物ぢや、取つておけと申されし、其見事さ、いつの世か又有べし、する程の事可笑く、女郎も客も、邯鄲の一日暮惜む所へ、丸屋方より、尾張のお客様先程から御出と、せはしき使かさなりぬ、初てなればもらひもならず、何の因果にけふの約束はしたぞと、高橋泪ながら、勤むる身の悲しさは、先まゐりて、斷り申して、今くるうち、世之介様のさびしさは皆様を賴むと、門口へ出さまに、二三度も小戻りして、わが居ぬうちは小杯で進ぜませいと、禿も殘して丸屋に行き、すぐに座敷へはゆかず、臺所についゐて、世之介方へのとゞけのかぎりもなく書く程に、亭主も內儀も色々わびて、先すこしの間奥へと申せど、それは耳にも聞入れぬ內、お膳が出まする、二階へ御出と太鼓持ども肝煎貌に申せば、おの〳〵は太鼓持ならば、爰の女郎のやうすも知らりやう事ぢ

や、それ程急な人にはあうて面白からずと、喜右衛門方に戻りぬ、七左方より呼立つれども歸らず、世之介も戀は互とおもひ、太夫をいさめ、是非行けと申せば、けふにかぎつて日本の神ぞ〳〵ゆかぬと申す、能々分別きはめ、よもやさきにも此まゝはおかじ、抓みにくる時、腰半分切つてやつて、かしら此方におくかと申す、いかにも覺悟と、世之介に彈せて、膝枕して、さても命はと投節、聞いてゐられぬ所ぞと、尾張の大臣刀ぬきながら切つて懸れども、目もやらず、まして聲もふるはせずうたひける、めい〳〵取付、さま〴〵あつかへども聞かず、兩揚屋町中袴着て、兩方のわび事入亂れて、親方かけ付、今日は、尾張のお客へも世之介殿へも賣らぬとて、高橋たぶさをとつて宿にかへる、それにもあかず、世之介樣さらばといふこそ、こゝろつよき女、此男にあやかり物ぞかし。

九　末社らくあそび

昔しの人の袖のかをるより、今の太夫優りて、上林の家の風をぞ吹かし侍る、殊には衣裳の物ずき、能事はよしと人はいふなりと、素仙法師の語りぬ、萬の花かづらも、秋こそまされど、白繻子の袷に、狩野の雪信に、秋の野を描かせ、是に寄せての本歌、公家衆八人の銘々書、世間の懸物にも稀なり、是れを心もなく着る事、いかに遊女なればとて、勿體なし、とは申ながら、京なればこそ、かをるなればこそ思ひ切つたる風俗と、ずゐぶん物に驚かぬ人も、見て來ての一つ咄しぞかし、世につれて次第に奢がつきて、人の見しる程の大臣は、肌着に隱し緋むく、上には卵色の縮緬に、思ひ入の數紋、帶は薄鼠のまがひ織、羽織はごろふくれん、黑きに島天鵞絨の裏をつけ、町人こしらへ、七所の大脇差、すこし反して、あい鮫を懸け、鐵の古鍔ちひさく、柄長く、金の四目貫うつて、鼠屋が藤色の絲、平印籠に色革の巾着、瑪瑙のふたつ玉、唐木細工の根付、扇も十二本祐善が浮世繪、こぎくの鼻紙、運齋織の袋足袋、中ぬきの細緒を穿き、大草履取に笠杖もたせて、名ある太鼓のつくこそ、くらがりにても、御女郎買としるぞかし、日野の洗濯着物、犢鼻褌のかき替もなき人ゆく所にあらずと、藤屋の市兵衛が申事を、尤と思はゞ始末をすべし、それも死なぬ身か、有らば遣へと、或日世之介風呂をとめて、もろ〳〵の末社をあつめ、今日樂あそびと定め、瞿麥の揃浴衣、みな披髮に成つて下帶をもかゝず、かれ是九人一筋にならびて、八文字屋の二階にあがりて

騒げば、一町のなりをやめて笑しがる事、京中のそげもの、寄合、さも有るべし、彌七棕櫚等に、四手切つて、むしこより、によつと出せば、丸屋の二階より大黒惠比須を指出す、是を見て柏屋の二階より、懸小鯛見せければ、庄左衛門は焙烙に釣髭を作り出せば、隣より、三社の託宣を拜ます、又むかひより鐵槌を出す、其時あうむは、懸灯蓋に火ともしてみせる、丸屋から佛に頭巾着せて出せば、柏屋より釣瓶取を出す、八文字屋より末那板みすれば、丸屋に牛蒡一把見せ懸ける、猫に大小指させて出せば、干鮭に齒枝くはへさせて見する、炭消しに注連縄はりて出せば、竹の先に醤油の、通ひを付けて出す、彌七烏帽子着て、あたま指出せば、むかひより十二文の包錢を投げる、北から摺粉木に綿ばうしまいて出せば、南から障子に上々吉子おろし藥あり、同く日やとひの取揚婆々もありと、書てみする、中の二階よりは旗天蓋葬禮の道具を出せば、泣くやら、大笑ひやら、揚屋町に其日出懸けたる女郎も男ものこらず表に出て、こゝろは空に成つて三所の三階を詠め暮して古今稀成る慰み是成るべしと、興に乘じて、まだ所望々々といふ程に、後は大道に出て、文作いづれか腰をよらざるはなし、外の遊山はいつとなく消えて面白からず、なほ立噪いで、休む事なし、これを今のまに鎭める程の事も、あるべきかといふ、忽聲をとめて見せむと、東側の中程の揚屋見世より太夫なぐさみに、金を拾はせて御目に懸けると、袱紗をあけて一歩山をうつして有りしを、小坊主に申付けて、雨のごとく表に蒔け共、誰取あぐる者もなく、只末社の藝盡しを見て居るこそ、流石都の人ごゝろや、金捨てながらしらけて、人に笑はれ、内に入れば、其跡にてはらひらき紙屑拾ひが集て、あまべに歸る。

十　諸分の日帳

うれしき物、其日の男早う去ぬ、その中戸で逢うての別れ、遣手煩うて居る内かさの高き文、かたじけなく詠入り〳〵は、木村屋の和州、一盛は吉野の花を見越し、全盛の春にぞありける、三月三十日の日帳を書きておくられける、是ぞ戀の山、出羽の國庄内といふ所へ下りて、米など調へて大阪への舟便もまはり遠く、此里の事なほゆかしきにと、封じ目切りて、あけそむるより、朝ごみの客は、中の島の鹽屋の宇右衛門手代にて、晝は隙なき身とて、高島屋にてあひ初め、宵の勤殘りて、紙筆を持ちながら、おのづと氣を盡しての手枕、かた様の御事、

まざ〳〵とよい夢見懸りしに、惜や隔子をたゝき起されて、其にくさいかばかり、暫し返事もせぬに、頻におとづるゝに寢ごい八千代さへ目覺めて、申し〳〵と、呼びつがるゝも是非なく、行水とれ、といふ聲を聞きて、男それまでは待たず、腹の立ちながら獨行くとみえしが、車屋の黑犬に咎められて、又西の横町へ廻るも笑し、おもはぬ男、是ほど違ひの有物かと、我が心のおそろしく、宿より使來て、行きて、朔日早々からの口舌、二日は川口屋にはじめて肥後の八代の衆、一座には八木屋の霧山、伏見屋の吉川、清水の利兵衞など參りて、淨瑠璃道行に成つて、東の空は其方ぞと、語出すより耳おどろかし、我も世之介樣を尋ね行かるゝ身ならばと、哀にもない所にて、泪をこぼすを脇より見ては、此戀ゆゑとはしるまじ、床迄もなく暮れて、其まゝ歸るさに、紋提灯の罹麥、今に替らぬかと、闇よりの惡口、聲聞き違へて、見もどれば、天滿の又樣、介樣のお歸りの程はと御尋に、是も越前殿とは譯あつて、二十日にあまつて、此里疎く成らせられ、南にて小ざらし憎からずと、毎日、是も替りたる御なぐさみぞかし、かた樣御弟ぶんの吉彌樣も、いよ〳〵美しく御入候、三日四日は、住吉屋長四郎方へ出候、唐津の庄介樣、是は去年の盆をしてもらひ候客也、晝の內は住吉の汐干に御行、櫻貝うつせ貝など、手づから拾ひて、あはぬさきから袖ぬらすと、しをらしき御人に候、五日は茨木屋にて、御存のいや男にあひ申候、勤の爲に心の外の誓紙一枚書き申候、卽あのかたよりの一札、此たび遣はし、かた樣に預け申候、六日灸すゆるとて隙をさいはひにいたし候、七日は茨木屋に有りしを、井筒屋にもらはれ、最上の衆にあひ申候、八日も同じ一座、九日は母人の十三年にあたり千日寺へ石塔を立て、心ざし仕申候、十日は八郎右衞門取持にて、鼎堀のお敵と、中なほり申候、十一日は折屋にて、播摩の網干衆に初て、之は八木屋と霧山樣に御あひ候が、わけあしからぬ退きやう、吟味の上あひ申候、十三日は宿に居申候、內々蒔繪屋の治介に、御申付あそばし候硯箱出來持たせ遣はし候、和歌の風景御物好、殊更布引の松、さも有りさうに、能筆を盡し候、八まん氣に入申候、けふつかひ初めて、此文を書きまゐらせ候、さてかた樣、御殘し置き候、獨笑ひの御肌着、十四日に、不圖、御事共思ひ出し、下に着て出申候を、庄介樣に、貰ひ懸られ、否とはいはれぬ首尾にて、こゝろよく進ぜ申候、何の仔細もなく候、一日二日過ぎて、ちよろけん一卷、有合ひて送るのよし、其中に一歩五十、此事は、何とも書かずに、人しれずたまはりけり、其まゝ明けて

も見ず、せはしく申せし呉服屋の左兵衛に遣し申候、只わが身の事、萬に付けて、かた様爰許に御入なきこそ、悲しき事共、積り申候と、こま〳〵と話氣書續けしを、泪にくれて讀む中に面影うしろに立添ひ、わたくしは、いよ〳〵京への談合極まり、大阪を情なく明後日のぼると、泣聲にて申けるは、此ほどすこし淋しきとて、京へはむごきしかたぞかし、我は京へのぼりたらば追付死ますといふ、それはと悲しく、見あぐれば四足五足あし音して味氣なく、跡見返りて消えぬ、是まぼろしなればとて此儘は捨難しと、二たび難波の色里にかへりぬ。

好色二代男

一　髪は島田の車僧

鮏藥師通御幸町のあたりに、門に繩簾を掛けて、せまき所をよく住なして、嬶もさのみ手あらき事をするとも見えず、茶釜まはりきよらに、階の子があれば内二階に、衣裳だんすあまたならべありける、爰に伴ひし人に亭主は何者ときけば、島原への卸早雲孫兵衛、と語りもあへぬ所へ、油屋の手代めきて二十四五なる男、布地の柿染に繩帶をして、花色の木綿ふんどし見えすきて、懐には塵紙さへかすかに、あたまつきは髪結次第に、その律義さ後生大事とかまへて、錢一文あだにつかひさうには見えぬに、人は知れぬ物ぞかし、内儀にむかつて、太夫が今朝おこしたる狀はといふ、封目に印判あつて、七月二十三日午の上刻と書付けしを切破りて、ろくに讀みもせず、こりや逢うてのつめひらき、今から行くぞ、とよごれたる手

を洗ふ間に、越後ちゞみの帷子に、生平の羽織、飛紗綾の下帶、替草履まで氣付けて、ありし姿は忽に本大臣となつて、疊よりすぐに三枚肩に乘りうつれば、立髪の小者榜葛刺島の風呂敷包に、竹のねぢ杖を持添へ、跡につづきてかけ出す、さても都の自山さ、駕籠一挺三匁五分、倩男一匁二分、文の使五分、當座拂に萬箇樣の分ぞかし、諸事卸が肝煎れば、五節句に一角宛、此外盆前に晒半疋と大晦日前に米の一俵も、手をよくとらせてよし、其上に家賃などの無心は、否な貌してもくるしからず、今の男は三五の二十五、追付合はぬ算用、請人やつかいと、人を笑ふ我身も我物を盗みて、内の首尾はない事でかため、女房どもに嗔恚をもやさせ、緣者の交りうとく、隱居の見舞も忘れ、明暮わけもなき事とは思ひながら、けふばかりはと忍駕籠、松原通をいそがせ、因幡堂の前にてかならず肩替ふる間もいらちて行くに、新町通の邊に、むかしから染手拭屋あり、そこの娘が五つばかりの時から、鼻筋さしとほつて、二皮目の形うるはしく、伊勢土産の笛をふきて門にあそびしを、あの子はと思ひしに、今見れば其姿はなくて髪かしらもをかしうなる物かな、車の早緒といふ物をたすきに掛けて、中拔の大根揃へる片手に、二つばかりの子の鼻涕たれて、あたまの辻ゆがうで、まだ泣きたいといふやつをすかして、尿やつて居る、あれをおもへば、年久しう此道を漑ふ事よ、大かた大宮の溝蓋の石を踏へらして、羽衣といへるかこひにあひ初めし時は、内から揚錢もりんと掛けて、其日拂ひにして歸り、四五日も胸さわぎして、その銀惜かりしに、今の奢にくらべて、其時の心を忘れ、うか〳〵と行けば、丹波口より見えわたる二町ばかりの野邊のおもしろさ、これから出口の門までに、成程短いうそをいくつ吐かるゝぞとあれば、小賢き太鼓心得ましたといふしでの、夜前は鬼と一緒に蕎麥切喰うて、それより達摩の雪隱へ行きて、紙燭の消えぬ間は愛宕樣と火渡して、其跡で頼朝殿の月代そつてやつて、明日は盆ぢやと宵から門松立てゝ、いそがしき中に、さる女郎樣から着おろしの袴肩衣くださる、其外内證は仕舞うたかと金子二十兩、能登鯖十さしもらうたと語る、これや鯖ばかりが本であらう、と笑へば笑うて、隨分早口に無い事二十七いふ間に門に入りて、揚屋町の北口より南の門までは、太夫ぬめり道中百九十六足の所なり、此間にて小煎餅四枚喰れぬといふ者あり、それはと、神樂の庄左衞門兩の手に持つてくひかゝる時、女郎どよみ作つて、をかしさも今一枚殘るを、門の鐶貫にあげて置き、是も一興過ぎて、丸屋七左衞門が見せにて飲掛引

掛、びいどろの與平次が下調子の小歌、男ばかりはをかしからず、太夫もらへといへば、けふの御客はまだ深き御なじみにあらねば成らぬよし、遣手めがさし心得ての返事にくし、其客はとせんさくする時、東側の中程から、最前の男ちらりと見ゆる、扨は油屋様のお逢ひなさるゝと、すこしせき心になれども、是を口說すれば太夫がひける、何者ぢやゝら知らぬが佛、明日は二十四日六地藏なれば、二十九日まで六日つゞけて申してやれば、かの油屋聞きもあへず、十二日つゞけて爰に置くと募る、兎角は太夫が仕合、とてもかぎりのある男、急に埒明いたもましと料簡して、あれも女郎に思付かせたき仕掛ぞかし、人の親類は、何國いかなる者にもあるべきに、現在の伯母姉小路の針屋はかくして、念佛講仲間に酒屋兩替屋の有るを、近き一門に申做して、爰に來ての世間氣皆これなり、只何事もすくばけがよしといへば、鳥居幾度か越えて、背のはげたる末社が申すは、人にそだてられて大はづいふ程のおきては、十に一つも物になるぞかし、宿の夫婦をも結構にあしらひ、薪の買旬、味噌突込の時を沙汰する人は、人かたの義理はかけてもかまはず、いやな所に大節季を二十日より內に知るゝ事、一つのとりえなり、世は何に付けても銀せんぎをして、あたら夜の更行かぬうちに、かはりを取れと、太夫よりの指圖に任せ、末の女郎三人取寄せ、是でも酒は飲れず、殊にふしようらしき顏つき、彌七が意見して、勤は泣くと笑ふとが第一といふ、三人ながら笑れ付きて笑ふ事がきらひと申す、こりや少し笑はして見ようと、かけずくにして、笑うたれば、三人の女郎丸盆を持ちて、出口の茶屋まで行く筈、笑はす事がならねば、末社殘らず大臣も丸裸になつて、日中に此里くるりとあるくに定め、大事の勝負爰なり、三人上座に直し置き、思ひ〳〵の仕出し廣がり源太は、下帶に猫をつなぎて猿廻し、なぐら三左衞門は、天狗の面を掛けて楊枝をくはへ、太郎坊様はまだ見えさんせんかというてをる、長柄の次兵衞は、惠美須になつて鯛には浪といふ禿を左のわきに挾み、釣つた所とわめく、雁金屋の利右衞門は、下駄はいて碓をいたゞき、お茶をひかしやれぬまじなひといふ、勘七笠に書付をして、ぬけ參のまね、此外の太鼓つゞみをならし、一時あまりもさわげど、さりとてはをかしからず、女郎は三人心を合せ、身あがりの悲しさ、寂しき時の親方の顏つき思出して居れば、笑ひはせいで泪ぐむこそ不思議なれ、京中のをかし中間の集り、をかしがらぬのば口惜し、負に極めていづれも裸になる時、三人口を揃へて、笑はんしても見さんせいといふ、其時待

ちたまへと、彌七分別して、小石を紙につゝみ、袖に入れて、耳近くよつてさゝやくは、九月の節句も遠いやうでから今の事ぢや、跡も先も仕手があるぞ、先是でせはしういふ拂をしやれと、一包なげ出せば、につこりと、異な事にて笑ひぬ。

二　情懸けしは春日野の釜

戯女の袖ふきかへすと詠みしも、木辻の古歌の姿なるべし、東北のつきぬけを鳴川といへり、むかし横萩右大將の息女に中將姫の誕生ます跡とて、三棟といふ、爰に藁の屋かすかに、ともし火の消えがてに、誰すむともしれぬ所、此里の化けたる人にそゝのかされて行くに、色有る女、人も待つ程こそあれと、すこしは恨顔にて、太子の御傳記をつい讀みて居る面影見るに、大阪にて杯の間を賴みし事もありつる女也、爰に名を替へて橋姫といふ、其儘鬼にして、かみころされたくもありて、其夜は闇を幸に、よねまじりに揚屋さがし、妙庵かたには井筒、さほ野、此處の出來物、難波に何かおとるべき、此里はなべてかこひに定め置きぬれば、能い分は損ぞかし、井筒屋横手の權之丞まで眺めまはりて、一人も殘さず呼ぶに、十九人より外なし、むかしに變り物のさびける、さる人の大屋敷に集めて、どれに心をよするともなく騷ぎて、風呂たかせて、男女の亂れ入、戀の夜なればこそ、晝はおもしろ過ぎてあるべし、明の日は、末の秋の中の二日、洞の紅葉も今と、色町よりすぐにさそはれ行くに、かすり井も朽葉に埋もれ、袖垣の森のあたりは櫟狩の折ふし、所の人の手馴れし振梢を打掛け、ばらりと落つるは、袖に時雨の音のみ、若草山も名を替へて、枯葉のひがし原に氈敷かせて、是は又高尾牛瀧も中紅なるべし、夕日のさし所もなくて眺暮れなむ、酒の後亂れ一番はやされしに、秋鹿の近く集り、果つればさま〳〵に立ちのく、笛はなかりしに、鼓にもよるやとやさしくおもはる、一つは上手のしるしなるべし、又梅もどき荒する小鳥を、宗益といふ人の吹矢にて、一羽もとまらぬといふ事なし、鴨は申すまでもなく、鴈も吹矢にて留める事、又あるまじき名人なり、歸るさは春日野に入りて、尾花かたよせ、萩ばかりの野に行けば此前きさが爰にて茶湯をせし所、それよ〳〵唐鳶のかゝりし岩を目覺えにたづねければ、石の割目に其時うつて、竹花入掛けし折釘殘りて、むかしを今にやれなつかしや、其女是なる桃より鎖をおろし、釜掛けて、そこに袋棚、爰に懸物は、大阪よりことつかりて、宵にわ

たせし男の文を、其まゝ一夜に表具して、手拭かけの竹こそ枯れつれ、蒔石は人もくづさず、爰が腰掛の跡、其日も忘れず神無月のはじめの四日、霜は日かげに消えず、奈良草履のはきかへもいかゞと思ひしに、挾箱より大杉原を取出し、何束か假の飛石にならべて客を通せし事、世に聞きふれて大和屋が狂言の種ともなりぬ、かゝる所に惜しき女にてありつる、その あけの年の二月に、森五が七日の能を見にまかりし時、古里にて高間にあひしきのふ別れをけふ忘れて、幾佐におもひつき、七兵衛が小座敷し、櫻なき山に榎の木を見るとおもへば、素人書の襖に石竹は長う、柳はみじかく、鷺の足に水掻あるもおもしろく、床に入りての手だれ、互に位取つて、日をつゞけて五つ、情名殘もなく物の見事にふれども、仕かたにくからず、十四日の薪を見果て、明日は大阪にかへる、夜居て去ぬ男に是がなる物かと、黒髪跡は見ぐるしき程切つて、俄になづみ、身はまかせながら、それでも帶はとかず、泪こぼすばかり語りて、あけの日留めて、若紫といふ野懸あそびに品替へて、幕十張二町程の間に所所の仕出し、女郎十八人大鳥居を忍駕籠、それより木地の平笠に紙緒を付けて、上着をつぼ折り、皆竹杖もじやれて、晝までの酒かぎり知られず、又都にてもなるまじき旅おくりにあひてかへる、業平も是にはよもや。

三　死なば諸共の木刀

今日あつて明日は露も消ゆるに間のあり、稻妻石火、たばこ呑む間も女郎の命程はかなき物はなし、それぢやとて先は見えぬ世の中、一日增りの馴染めば、人ほど可愛らしき物はなし、半留といふ男、三浦四郎左衞門抱の太夫若山に年久しくあひなれ、勤の程も今二とせに足らず、何國にても出前の女郎寂しくなるものぞかし、若山かしこき太夫にして、お敵の氣を取る事を得て、ぜい昔にかはらず、是ひとつは半留心のまゝ、役目の外勤めてやらるゝゆゑ也、一日あはねば太夫も思ひにしづみ、半留も通はぬ日はなし、有時申かはして、頓てに請出し、本妻にしてから不足なき女也、若山萬に此上は無き心ざしを、半留まだ疑ひて、よき中を絶えて、十日に餘り行かざりしに、其内の文書き盡して、後は泪といふ字ばかりも百も二百も筆つゞく程封じ籠て遣はしけるに、態と返事もせず、ある日作り文して持せやるに、太夫その日は蔦屋の市左衞門方に、一谷のざる御方に出合ひ、一座に花夕、刈藻、つれ引つれ歌、

古今めいよの上手、梁の埃も落ちぬるばかり、人皆心をうつしけるに、太夫は只思ふに逼る胸をさすらせ、今日も又見えぬかと、人しれぬ泪の袖口へ、禿が狀ひとつさし込む、心は先へ飛んで、箱階子の下りさまあらけなく、小座敷に入りて、明くる間もおそく讀初むるより、常とは替る浮世や、かりそめにせまじき夜あそびに身代殘らずうち込み、孤をかぶるより外はなし、日頃互に申せる事も、勤のさはりにもなればなり、今よりは我事忘れたまへ、更に恨におもはずと、眞言をつくして書送る、若山おどろき、其夜に男着物一重仕立させて、あけの日はやく金子十四兩添へて送り、兎角は逢ひまして申あげたし、ふびんにおぼしめさば夢もはやくま見えたまはれと、くれ〳〵申傳へける、半留其衣裳を着て、忍び姿に小者をも連れず、柵迄便り、貌見合せ、一度に泣出して、是にて語るもよしなし、太郎右衞門方へ行きて、若山申すは、さて〳〵氣の弱き御事なり、たとひ身を捨て命を掛けても、逢ひませいでは置くまじ、御身はすたらず御家の捨たる事、さのみ御なげきは口惜し、いかにもなるまじき御事にあらずと諫めて、先お杯と心よく飲かはして後申すは、今まで此町にて名は先立ちしに、人に指さゝるゝも無念ねがはくば一所に死なば、世に何をか思ひ殘さじといふ、何がさて兼てより任せ置く身なれば、只今と、胸もとあくるを押留め、爰にては、目掛けし揚屋も跡の迷惑なるぞ、中二日過ぎて十三日は賴みし佛の日なれば、谷中に參りて、それより必ずまゐるべしと、かたく約束して歸る、是迄にて殘る所なき心底見しに、世にはきびしき男も有るものかな、是でも疑ひをやめず、其日晝にかたむく影法師も長く短く待ちて、局の金彌に退かせて、兩人入つて跡をさし籠め、互に上着をぬげば死出立、半留申すは、まことと定り事とは申ながら、かくなるべき事はしれぬ身の上、書置にても有るかといふ、御申出しより三日過ぎければ、親里へも人を遣はし、七日に當る時に、文を見られて歎かるべし、萬事に付けて物思ふ身は、最期急ぎたしと、臨終慥に二念は無かりき、かへす〳〵我ゆゑ憂目見するも、前世の定り事、もはや今なり、低う念佛と申し、我は題目となへ、さあ是迄と取付く時、大夫おもはずも、かなしや聲をあげければ、内より大勢かけ込み、此有樣を見て、先捉へて詮議をする、半留騷ぐ氣色もなく、是には樣子有るぞと内に入る、親方いづれも聞きも分けず、人を殺しに參りける者、只はおかじ、番所へ御斷申すとひしめく時、一腰ぬいて見するに、箔置の木脇指也、扨樣子は、あの太夫兼て女房に持つべき申合せ然れども女郎

の奥のしれぬものなれば、かく心をためして、我心に叶ひなば、是非一年の所を申請くる覺悟、諸事六百三十兩では埒も明くと申せし程に、二百三十兩の借金迄持つてまゐつたと、供の者共よびて、挾箱あくれば、其に違ひはなし、おの〳〵感じけゝ、太夫もさら〳〵身を捨つるは、鍔ぎはになつて少しも惜まぬに、いとしき男を殺すと思へば、自然と聲をあげぬ、命が惜きものかと、剃刀持つをおの〳〵押留むる、男も是に至極して、此上は我にたまはれと請出して、存寄る仔細有り、先親の許へと、其日すぐに本國に、馬乘物を拵へておくりて、其足ですぐに、宿は太郎右衞門方にて、立出し伊左衞門抱の明石におもひつく、女郎の分はさにあらず、殊更若山様の跡なればと申す、若山手前の義理は、はや此里を離れ常の女也、年比よしみゆゑ、身を自山なして遣はしける、大事の時の一言氣にあはねば、重ねて逢ふ事は絶えたり、まだも女郎は貴樣を見立て、常々の心ざしも有り、外には望もあらじ、色あそびを一代やめぶん、我おつかなくおぼしめさずば、あうてたまはれと、咨の次郎、そゝりの仁兵衞、其比三野のしやれ者なり、かれらを戀の橋掛けて申やる、わたり違へる男どもにあらず、さま〳〵明石に勸めて、おあひなされば、此町の通ひ男、あたら名物獨ないものにいたしますとなげく、そこはともあれ、智慧自慢をして、我おそろしくばとて憎や、さらばあうてしこなして見せばやと、はじめから風替に持つてまゐつて、兩方ともに上手、人も見習ふ程の事ぞかし。

一　夜の契は何ぢややら

一切の人も也、殊に遊女は人を謾る事なかれ、むかしは玉花金殿の眠も夢に替りて、今松門に霜露をしのぎ、高名埋まれし御かたあり、ましてや末々、きのふは天秤をなやみ、けふは仍一本にもなりぬ、長崎の町はなれに一村の乞食住める、此所の色ふかき丸山しんちう町に行きて、太夫金山に思初め、つねにも身はいやしからず持ちて、忍び〳〵に衣服を拵へ、三とせがうちに心掛ければ、たよるべき金子たまりて、有時人の見しらぬ供まはりを、男もすぐりて、其身もよろしき扮立、然も夜に入りて仕かけぬれば、神も見分はたまふまじ、丸山の案内するもの丶方へ尋ねて、我は中國の方より此島はじめての祝儀とて、先嬶が手元へ二兩なげ丶れば、俄に笑機嫌、これでなければ何國にても埒あかず、さて主持の身なれば、人

も知らぬくめんに、金山さまとやらを國方にて承りおよびしに、御心よく逢ひたまふやうにと賴む、成程請合ひ、萬事よしなに申なして、其夜首尾させける、床の分は知りがたし、人よりはやく別れて、又日やめず約束して、はや我は宵よりの酒に亂れて、後は臺所まで出て、あまたの女郎を手に入れ、心のまゝなる折ふし、此里の目かしこき人の參り合せ、身ぶり見るより、乞食の四郎めや、是は合點がゆかぬと、供べやに二人つれし者を見れば、あんの如く中間者也、さては正しくそれぞと、聲高に、おのれは飯もらひの分として慮外者としかれば、あらはれ渡る瀬々の立浪の羽織そこ〳〵に着て、大小も手に持ちながら逃げて行く、其夜に此事沙汰して、太夫一分捨たる時、夜中に着物こしらへ、その散し形に、缺五器、竹箸、めんつう、其ものゝ持ちぬる道具を、品々切附して、世間晴れてわが戀人をしらすべし、人間に何が違ひ有るべきと申せば、是なるまじき事也、女郎はかくありたきものと、やさしく申なして、すぎにし時よりは一しほにはやりけるは、深き才覺ぞかし、さま〴〵惡く申すも、世になき事さへうたへば、此事是非もなし、其座に花鳥といふ女郎有合せ、申されけるは、我身も同じ流れなり、しるべ有る人のつれなりせば、あふまじき事にはあらず又戀ならばいかなるものにも情を懸けてこそなれ、勤の人さまにとやかく思ひつくす事は、おろかなる人ごゝろ也、是皆世渡のため、唐土人にもいやなる枕をかはす、それもなじめば、出船をかなしみ、松浦さよ姫が思ひをなす、兎角閒夫せぬ女は物の哀もしらず、おもしろき事かつて有るまじ、都の吉野は鐵職にまみえ、江戸の尾崎は病難人に身を任す、大阪の夕霧は座頭も一度は、これらこそまことの傾城ぞかし、名山樣も此人をよもや見捨てたまふまじと、日數をふりて、秋舟も入れば、此津絲にしきの山をなし、唐人寺にして菩薩祭もよほして、種々の鳴物心をすましぬ、毎年見馴れてかばらぬ事も又をかし、金山一家引つれて見物に出る道中にて、かの乞食書置はふり付けて、行方しらずなりぬ、世の人も見てかくれもなき事なれば、捨てずひらけば、そも〳〵の戀より、皆金山が情に書きつゞけて、われゆゑに御名の立つ事をくやみ、國所を去るとかや、金山も今は實の心になつて、我まことははまりしに、其難をすくひ、かく迄思ひはこばるゝは、たとひ手足のなき人なりとも、耳さへあらば、一度此斷を語りたしと、しばし泪にしづむ事、又あるまじき心底、日本は申すにおよばず、唐へもかたり句になるべし。

好色二代男

五　釜まで琢く心底

平城の袖鑑に、能衆、分限者、銀持とて、是にみつのわかち有り、俗言に、能衆といふは、代々家職もなく、名物の道具傳へて、雪に茶の湯、花に歌學、朝夕世の事業をしらぬなるべし、又分限といふは、所に人もゆるして、商賣はやめず、其家の風を手代にさばかせ、其身は諸事をかまはぬなるべし、金持といふは、近代の仕合せ、米のあがりを請け、萬の買置、又は銀貸、自身に帳面も改むるなるべし、十千貫目あればとて、是等を歴々の中に入れてまじはる事なし、其頃菊屋とて引込入道、二千貫目の家徳は有りながら、能衆仲間の太鼓持して、あなたこなたに日を暮しぬ、或時島原の大阪屋に内證あそび、此人々を申入るに、稀之助、夢松、畫太夫と替名呼びて、皆六十餘の法師也、外に江戸の客、明石三ぶとて、小歌の上手、秋も末の菊のませ垣といふ二ふし、是はうなつて、いやはやどうもならぬと、亂れ酒になつて、不斷の座敷にかはつた、女郎なしに禿計を二十五人、是も又おもしろし、勝手を見れば、ひとつに三人入の水風呂所々にならべ、どうもいはれぬ裸身、釋迦になりとも見せて見たし、衆生の迷ふは斷申して覗く事いやと申す、又さわぐうちに四つ門うつとて觸るれば、名殘惜きは親にかゝり、母計にしてと、思ふも叶はぬ世也、宵より若やぎて別れに年をよらしぬ、爰に浦島といふ男、かくれなきしやれものにて、人よりさまに萬の事好む、大阪屋のあけの日すぐに、揚屋にて申請る、菊屋の入道見まうて、獻立を聞くに、いまだ都の人の口に入らぬ物一種ありといふ、歸りて此自慢申せば、よばれながら、いづれも腹立して、何にてもあれ、世に見え渡らば、喰はで置くべきか、浦島が今の初物推量せよと、思ひ〳〵に申出す、何の事もなし、きのふより見し初鮭なるべし、さらば亭主にいやがらすべしと、才覺者に申付けて、にしき上の棚に鮭の有程買求めて、金子二兩づゝにして、八本より外には、繪にかくべきもなし、膳出し前に、魚賣四人に手分して、其門を殊更奥にも聞ゆる程に賣れば、ひそかに呼込み、直段を聞くに錢二百づゝと申す、浦島驚き、燒物替へて出しける、よき時分見合せ、菊入聲高に御馳走の珍魚はと申せば、鍋蓋をあけて悔しきと、浦島は臺所に逃込む、是も一興也、此仲間の大ていなる事、江戸にかへりて明石が語りぬ、此男も丹州にのぼりつめ、三野の道筋我ひとりして踏へらし、明暮かよふ程に、なほ女郎は外の勤は捨

てゝの手くだ、親方數度の意見にもやめず、後は惡み深く庭に追おろして、下女のごとくにして使へども、思ひまうけてかなしまず、常より機嫌物毎をして、妹女郎にも樣付けてしたがひ、其後は襷前垂の姿をも恥ぢず、門に出で、三ぶが面影に立添ひ、是を憂きとは語らず、あはぬ日は懷紙に思ひをのべ、消炭に書つゞけて、禿がよしみに出口の茶屋迄かいやりて置くに、あらましは消えて、せめては讀めぬ間も憂をわすれて、思ふ甲斐なき身の程を恨み、丹州が心根も哀世に、憂きめ見たり見せたり、大かたならぬ因果、是迄と思ひ極め、けふの返事は待つべし、死ねば形見となる文を、硯があればとて、あれも不自由なるすさみ、我も文と、指よぬしぼりてそめ〳〵と書置して、今はと一腰ぬく時、ふと紙入に氣が付き、跡にて人の見ば、おろかなる書捨もと、一つ〳〵引さきてあだになせるに、日外の別れさまに書きつる我宿の普請のもくろみ、綿棚をこがまくに居間より奥の間廣く、寢道具入の押込、緣からすぐに湯殿雪隱のかよひ、庭には熊笹一色といへば、手水鉢の置所ちかいと物好みして、窓を高うして、我を人の見ぬやうにと、先はしれぬ事を申せし女心の哀れやと、是もかみしだく時、禿の角彌足は地をうきてはしり來て、よろこばんせ、あゝ嬉しや、本に嬉しや、水がひとつ飲みたい、物がいはれぬといふ、聞きたし、何事ぢやと申せば、淺草のお寺樣のござんして、お吸物を据ゑまして、先聞かしませに參りましたと、云捨に立歸るを呼もどせば、酒持ちて出ますがと、跡をも見ずに申す、悲しき中にもをかしく、是には子細の有るべしと、物思ひするに、下男の久兵衞が來て、只今旦那坊の詫言、親方聞分け、殊には丹州樣此程の仕かた、内儀も泪流し、今日より昔に替らず御出あそばす也、はや年も二としたらすなれば、つねさへ女郎のはやらぬ時分に、此度のわけなれば、人もうるさくあふ事も有るまじ、成次第に勤めて、ふびん思ふ男にも、折ふしは其まゝにしておけと、遣手のかつに申渡されし、おぼしめしのまゝ晩から自由と申す、さてはと明石ほの〳〵と夢覺したる心して、清十郎方にて世間晴れてあひける、其明の日より、心中感じ、我も人もおもひ入り、一日隙はなく、すぎにし時よりはやり出で、二度名をあげける、世には哀をしるにや、揚げて床なしの夜の友、後には三ぶも一座になる事稀ならず、丹州が物のさばき、女は優れもせずして、只かしこく物靜也、さる時鹿島の震りあまり、此里に地震きびしく、然も五月の比闇なるに、男も女郎も二階立さわぎて、さま〳〵の疵を求むる事有り、丹州は三の絲つぎかゝりしが、調子

迄合はせ、我世の中にあらん限りは、と神歌を唱ひたまひし有様は、閑人柱に倚りて雷公を笑ふと申さるゝに同じ、かかる遊女もろこしにも有るまじ、一年勤めて後、此明石が願ひになりける。

六　反故尋て思の中宿

命を釣替とは、太夫に生れつく女ぞかし、むかしは其身に懸合せ、銀にて渡すさへ稀に申せしに、近年千五百兩に請出す女郎も、十二貫目有るまじ、これを九十貫目に、高い物とおもふは、ちひさき目から也、歩にかゝる家よりは安し、揚づめにして算用すれば、二年半には美くしき女只になるぞかし、江戸町助左衛門抱への大和泉、ひさしくわづらひの後、よろこび事とて、京橋の金槌といふお敵、五日つゞきて大寄、上野の藤を髪にうつして、作花屋内匠が俄に咲して、揚屋の臺所迄風もいとはぬ花棚、心ある人手折りてかざし、見ぬ人のためといはれしもやさし、春は暮行く名殘、豊の客はかへりて、なじみの男は、夜こそ深き情もあれ、立別因幡が近江ぶしの淨瑠璃、隅町萬字屋の庄兵衛門抱への淺妻常盤つれ歌、一座春の夜の夢心になりて、十八日の月も朧に、霞に雁雲に、かすかなるを眺めしに、明方より晴れて、初蝶も寢覺めて飛ぶ、春色隣家に有るかと覗けば、蔦屋の二階から、井筒床ばなれの白小袖、軒端に帶をおろす、子細らしく見るに、あんのごとく其はしに文結び付る男は、江戸町の甚左衛門忍び姿を見付け、ぱつと沙汰せられてなほやめず、勤もおのづとすたれば、親方伊左衛門にもらひて、戀も自由になりて、世におもひ殘す事もなきに、井筒嫉妬ふかく、後はきのどく重なれども、今更見捨てがたく、其年も又の年暮れて、十月十四日の夜、淺草の寺町へ參るのよし、宿を出でゝ、それよりすぐに法體して、宗知とあらため、本石町の横手に、世は捨てゝも世わたりのために八百屋棚を出して、其身は深く忍びて、月日をおくりぬ、井筒此男をこがれしに、出家のありさま傳へければ、我も其身にと、黒髪剃おとし、三野を出て、一とせあまり關所をかぎりに尋ね、さては國遠と恨をなし、七面の明神に百日の參詣して、めぐりあはせたまはずば、忽火龍の形となり、是なる御池に身をしづめんと、針百本を毎日指の血トしぼりて、道芝を染めていのる、其しるしもなく、江戸中に住替へて、有時、白かね町に身を立てし時の遺手の梅が我世を持ちてありける、髪にたよりて、むかし

のよしみとて、十日あまりも程ふりて、宵は雪、あけては時雨もいたく音づれて、物の寂しくとふ人もなき日とて、井筒道心をもてなしに、茶事の花餅などして、娘に胡麻を買ひに遣はしけるに、彼青物屋に行きて調へてかへる、包紙を見るに、縁はつきぬ印にや、井筒が書捨の新古今の反故也、是は不思議と彼宿に入れば、甚左衛門姿を替へて、根白草を手にしてそろへるに取付き、此時のうらみ、三丁目の撞鐘も湯となるべし、色々諫めて、又かたらひの枕も次第におそろしく、魂消入る事夜の内に幾度か、そもそも戀を取むすびし時の事を思へば、勤の男さへそねみ、片時見ぬも聲きかぬも、こがれ死のやうに思ひしに、かほど迄いやなる事、大かたならぬ因果なり、此女悪心にもあらず、形のあしきにもあらず、世間の人にもほめられ、萬事かしこく、敷島の道迄も心ざしふかく、ひとつとして不足なきに、我を大事に思ひ過ぎ、夏夜もすがら夢はむすばず、枕近く居て團扇の風を絶さず、貴は稀なる白髪をなげきて抜き、宿を出づれば歸る迄門に待佗び、現にも我を見ぬ間を怨む、是は皆淺からぬ心からなるに、ふつと飽初めて、貌見る事うたてし、かゝる事も有るもの哉、世上に子の有る中の女房去るも、こんな事なるべし、井筒坊主かはいがる程いや風になり、又石町も

忍び出で、駿河の國安部川にするゑの親類たよりに尋行く、三野のむかし此國より江戸に引けると也、其ゆかりぞかし、折ふしは十二月九日、けしからず高砂を吹あげ、浮島が原も松さわがしく、木枯の森の邊は五色の雲立ちかさね、名山も推量に眺めしに、海原の朝日紅の浪を分けて、空も靜に山もほのかに、煙を見付けし時、井筒情姿にて、面は雪をあらそひ、我を見つめし眼ざし、是はと心も消入り、觀念してしばし程過ぎて見るに、其面影は無がり、是に付けても浮世と定め、宇津の山の東原に、八本の榎の木の陰に柴の戸をむすび、鞠子川を見おろし、佛名を唱ふ、比しも、昔日此山に連歌師の住みましまして、炭二俵薪三束年の暮かな、と詠まれし事もおもひ出でしは、我もよしみの人より、春の朝をしらせて、花平といふ餅などおくる、飾の松は峯にそのまゝ、うら白草は谷に、若水岩根の溜をたのしみ、老の浪の寄くるをかなしむ事もなく、大年の夜はじめて此庵に住みけるに、生壁の窓さむく、枕もさだかならず、夢にも人にあはぬ身と思ひしに、井筒が形まざ〳〵とあらはれ、物いはぬばかり、夜ともに惱まし、明れば影消えて、又夜はかよひ、二月の末迄人にはかたらずおもひなして、後は痩せ衰へて、おのづからかぎりも知るゝ時、家に木の葉埋み、火宅は今と

燒けうせにける、武藏にありし井筒も、其日其刻に眠るがごとく身まかりけるとなり。

諸國はなし 序

世間の廣き事、國々を見巡りて、咄の種を求めぬ、熊野の奥には、湯の中に鰭振る魚あり、筑前の國には、一つをさし荷ひの大蕪あり、豐後の大竹は手桶となり、若狹の國に、二百餘歳の白比丘尼、近江の國堅田に、七尺五寸の大女房もあり、丹波に、一丈二尺のから鮭の宮あり、松前に、百間續の荒和布あり、阿波の鳴戸に、龍女のかけ硯あり、加賀の白山に、閻魔王の巾著もあり、信濃の寢覺の床に沛島が火打筥あり、鎌倉に、賴朝の小遺帳あり、都の嵯峨に、四十一まで大振袖の女あり、是を想ふに、人は妖物世に無いものはなし。

難波　西鶴

卷一

一　公事は破らずに勝つ　智惠之段

奈良の寺中にありし事

大職冠、讃岐の國房崎の浦にて、龍宮へ取られし珠を取返さんために、都の伶人を呼下し給ひて、管絃ありし唐太鼓、一つは南都東大寺に納め、又一つは西大寺の寶物となりぬ、此の太鼓何時の比か西本願寺に渡りて、今に二六時中を勤めける、昔日に革張替ふる時此の中を見るに、西大寺の豊心丹の方組を細字にて書附けありけるなり、外は木をあらはし、中には諸々の羅漢を彩色金銀の置上、日本比類なき名筒なり、毎年の興福寺の法事にいる事ありて、東大寺の太鼓を借りて勤められしに、一年東大寺より太鼓をかさずして事を缺きける、衆徒神主の言葉を當年ばかりはと添へられ、やう〳〵借りて佛事を濟しぬ、其の後東大寺より使を立つれども太鼓を戻さず、興福寺の寺中集つて評判する、數年かし來つて今此の時に到り憎き仕方なり、唯は返さじ打破つてといふものあれば、それも手緩し、飛火野にて燒けと、あまたの若僧惡僧勇みて方丈に聲響渡りて鎮らず、其の中に學頭の老法師の進出でて、今朝より聞くに何もの中分皆國土の費なり、某が存ずるには、太鼓を其の儘當寺のものにせる分別ありと、筒の中に東大寺と先年よりの書付を削り、新しき墨にて元の如く東大寺と書記し、此の事沙汰せず東大寺に戻せば、悦び寶藏に入れ置き重ねて出す事なし、明の年また興福寺の法事前に使僧を遣し、例年のとほり、預置き候太鼓を取りに參つたと申せば、腹立して使の坊主を打擲して歸しける、此の事奉行所へ申上ぐれば、御詮議になつて太鼓を改めたまふに、名筒を削りて東大寺との書付、譬へ興福寺からの仕業にても、越度は古代の書付知れ難し、自今興福寺の太鼓にきはめ、先例のとほり置所は東大寺に預け、年々いる時を打ちけるとなむ。

諸國はなし

二　見せぬ所は女大工

不思議之段

京の一條にありし事

道具箱には錐鉋墨壺曲尺、顔も三寸の見直し、中びくなる女房手足逞しき、大工の上手にて世を渡り、一條戻橋に住みけるとなり、都は廣く男の細工人もあるに、何とて女を雇ひけるぞ、されば御所方の奥局忍返の損ね、または窓の竹打替へるなど、少しの事に男は吟味もむつかしく、これに仰付けられけるとなり、折節は秋も末の、女蔦達案内して彼の大工を紅葉の庭に召され、御寢間の袋棚惠比須大黑殿まで急いで打放せと申渡せば、いまだ新しき御座敷を毀ち申す事はと尋ね奉れば、不思議を立つるも道理なり、過ぎにし名月の夜、更けゆくまで、奥にも御機嫌好くおはしまし、御轉寢の枕近く、右丸左丸といふ二人の腰本どもに琴の連彈、此の面白さ、座中睡を覺して四邊を見れば、天井より四手の女、顔は乙御前の黑きが如し、腰うすびらたく腹這にして、奥様のあたりへ寄ると見えしが、悲しき御聲を揚げさせられ、守刀を持ちて參れと仰せけるに、御傍にありし藏之助、取りに立つ間に其の面影消えて、御夢物語の恐し、我が背後骨と想ふ所に、大釘を打込むと思召すより、魂消ゆるが如くならせられしが、されども御身には何の仔細も無く、疊に血を流してありしを、祇園に安部の左近といふ卜占召してみせたまふに、此の家内に業なす驗のあるべしと申すによつて、殘らず改むるなり、用捨無く其處等も打放せと、三方の壁ばかりになして、なほ明障子まで放しても何の事も無し、心に懸るものはこれならではと、叡山より御祈念の札板おろせば、暫時動くを見て何も驚き、一枚宛離して見るに、上より七枚下に長九寸ばかりの屋守、胴骨を金釘に閉ぢられ、紙ほど薄くなりても活きて動きしを、其のまゝ煙になして其の後は何の咎も無し。

三　大晦日は合はぬ算用

義理之段

江戸の品川にありし事

榧乾栗神の松やま草の賣聲も忙しく、餅搗宿の隣に煤をも拂はず、二十八日まで髭も剃らず、朱鞘の反をかへして、春まで待てといふに、是非に待たぬかと米屋の若い者を睨みつけて、

直なる今の世を横に渡る男あり、名は原田内助と申して、品川の藤茶屋の邊に店借りて、朝の薪に事を缺き夕の油火をも見ず、是は悲しき年の暮に、女房の兄半井清庵と申して、神田の明神の横町に藥師あり、此の許へ無心の狀を遣しけるに、度々迷惑ながら見捨て難く、金子十兩包みて、上書に貧病の妙藥金用丸萬に吉と記して内儀の方へ送られける、内助喜び、日比別して語る浪人夥間へ、酒一つ盛らんと呼びに遣し、幸雪の夜の面白さ、今までは崩れ次第の柴の戸を開けて、さあこれへといふ、以上七人の客何も紙子の袖を連ね、時ならぬ一重羽織どこやら昔を忘れず、常の禮儀過ぎてから亭主罷出でて、私仕合の合力を請けておもひのまゝの正月を仕ると申せば、各それはあやかりものといふ、其につき上書に一作ありと件の小判を出せば、さても輕口なる御事と見てまはせば、盃も數重りて、良い年忘殊に長坐と千秋樂を謳出し、燗鍋鹽辛壺を手繰にしてあげさせ、小判も先御仕舞ひ候へと集むるに、拾兩ありしうち一兩足らず、座中居直り袖などふるひ、前後を見れどもいよ〳〵無いに極りける、主人の申すは、其の内一兩はさる方へ拂ひしに拙者の覺違といふ、唯今までたしか拾兩見えしに面妖の事ぞかし、兎角は銘々の身晴と上座から帶を解けば、其の次も改めける、三人めにありし男十面造つてものをも謂はざりしが膝立直し、浮世には斯る難儀もあるものかな、某は身振ふまでも無し、金子一兩持合すこそ因果なれ、想ひも寄らぬ事に一命を棄つると思切つて申せば、一座口を揃へて、こなたに限らずあさましき身なればとて、小判一兩持つまじきものにあらずと申す、如何にも此の金子の出所は、私持ちきたりたる德乘の小柄、唐物屋十左衛門方へ、一兩二歩に昨日賣る事紛はなけれども、析節惡し、常々語合せたる好誼には、生害に及びし跡にて御尋ね遊し、尸の恥をせめては賴むと由しもあへず革柄に手を懸くる時、小判はこれにありと丸行燈の蔭より投出せば、扨はと事を鎭め、ものには念を入れたるが良いといふ時、内證より内儀聲を立て、小判は此方へ參つたと、重箱の蓋に著けて座敷へ出されける、これは宵の山の芋の煮染物を入れて出されしが、其の湯氣にて取著きけるかさもあるべし、これでは、小判拾一兩になりける、いづれも申されしは、此の金子ひたもの數多くなる事目出度しといふ、亭主申すは、九兩の小判十兩の詮議するに拾一兩になる事、座中金子を持合せられ、最前の難儀を救はんために御出しありしは疑無し、此の一兩我が方に納むべきやうなし、御主へ返したしと聞くに、誰返事のしてもなく、一座異な

ものになりて、夜更け鷄も鳴く時なれども、各立兼ねられしに、此の上は亭主が所存のとほりに遊されてたまはれと願ひしに、兎角主人の心隨にと申されければ、彼の小判を一升桝に入れて庭の手水鉢の上に置き、誰方にても此の金子の主取らせられて、御歸りたまはれと、御客一人宛立しまして、一度々々に戸をさし籠めて七人を七度に出して、其の後内助は手燭ともして見るに、誰とも知れず取つて歸りぬ、主人即座の分別座馴れたる客のしこなし、彼是武士のつきあひ各別ぞかし。

四　傘の御託宣

慈悲之段

紀州の掛作にありし事

慈悲の世の中とて、諸人のために好き事をして置くは、紀州掛作の觀音のかし傘二十本なり、昔より或人寄進して、毎年張替とて此の時まで掛け置くなり、如何なる人も此の邊にて雨雪の降懸れば斷なしにさして歸り、日和の時律義に返して、一本にても足らぬといふ事無し、慶安二年の春、藤代の里人此の傘を借りて、和歌吹上に差懸りしに、玉津島の方より神風どつと此傘取つて行方も知らずなるを、惜しやと思ふかひもなし、吹行くほどに肥後の國の奥山穴里といふ所に落ちける、此の里は昔より外を知らず住續けて、無佛の世界は廣し傘といふものを見た事の無ければ驚き、法體老人集り、此の年まで聞傳へたる例も無しと申せば、其の中に小賢しき男出でて、此の竹の數をよむに正しく四十本なり、紙も常のとは各別なり、忝くもこれは名に聞きし日の神内宮の御神體、矣に飛せ給ふぞと申せば、恐をなし俄に鹽水を打ち、荒菰の上に直し里中山入をして、宮木を引き萱を刈り、ほどなう伊勢移して崇めるに從ひ、此の傘に性根入り、五月雨の時分社壇頻に鳴出でて休む事なし、御託宣を聞くに、此の夏中竈の前をじだらくにして油虫を湧し内陣まで汚はし、向後國中に一疋も置くまじ、又一つの望は美しき娘をおくら子に備ふべし、然もなくば七日が中に車軸をさして人種の無いやうに降殺さんとの御事、各怖やと談合して指折の娘どもを集め、それかこれかと穿鑿する、いまだ白齒の女泪を流し嫌がるを聞けば、我々が命とてもあるべきかと、傘の神の姿の異な所に氣を著けて歎きしに、此の里に色よき後家のありしが、神の御事なれば若い人達の身代に立つべしと、宮所に通夜待つに何の情もなしとて、腹立して御殿に駈入り彼の傘を、

想へば身體たふし奴と引破りて棄てける。

五　不思議の足音　　音曲之段

伏見の問屋町にありし事

唐土の公冶長は諸鳥の聲を聞分け、本朝の安部の師泰は人の五音を聞く事を得給へり、此の流とや申すべし、爰に伏見の豊後橋の片陰に笹垣を結び、心を行く水の如くにして世を暮しぬる盲人あり、捨てし身の昔殘りて常人とは見えず、常に一節切吹きて萬の調子を聞きたまふに、違ふ事稀なり、或時に問屋町の北國屋の二階座敷にて、九月二十三夜の月を待つ事ありて、宵より此の所の若い者の集りて、御酒機嫌の小唄淨瑠璃、日待月待何國も同じ騒ぞかし、旦那山伏の多聞院、めでたき事どもを語れば、主人嬉しさのあまりに、何に因らず御遊興を御好次第、客方より一節切を聞く事ならばとの望、亭主知己とて頓て呼寄せける、先吉野の山を所望して吹く時、茶の通する小坊主箱階子を上るを聞きて、油溢すよと申されける、大事にかけて油注子持ちしに、放し置きたる杉戸轉懸り想はぬ怪我をいたしける、各々これ

はと横手を打つて、唯今大道を行く者は何人ぞと申せば、足音の調子聞合し、これは老女の手を引き、男は物思して行く顔色足取の忙しき取揚婆なるべし、それかと人をつけて聞かすに、彼の男が申すは、しきりが參つたら腰は我等でも抱きますが、とてもの事に息子を產めば仕合と申す、大笑して又其の次に通る者を聞くに、二人じやが一人の足音と見せに遣れば、下女小娘を負うて行く、其の後に通る者を何と聞くに、これは正しく鳥類なるが已が身を大事がるといふ、又見に行くに、行人鳥の高足駄を穿きて道を靜に歩行く、さても〳〵爭はれぬ事どもなり、とても慰に今一度聞きたまへと、いづれも虫籠を開けて待つに、道筋も見え兼ね初夜の鐘の鳴る時、旅人の下舟に乘遲れじと急ぐ風情、二階の灯火に映りて見るに、一人は刀脇差をさして黑き羽織に菅笠を被き、今一人は挾箱に酒樽を附けてあとにつゞきて行く、彼を問へば二人連なり、一人は女一人は男といふ、宵からの中に是ばかりが違ひぬ、我我見留めて、なるほど大小までさして侍衆じやと申す、いな事や女にてあるべし、各々の目違はなきかと申せば、又人を遣し樣子を聞かせけるに、樽持ちたる下人に低語くは、夜舟にて其の樽心懸けよ、酒にはあらず皆銀なり、夜道の用心に斯く男の風俗して大阪へ買物に

行くと申す、よく〳〵聞けば五條のおかた米屋とかや。

卷二

一　雲中の腕押

長生之段

箱根山熊谷にありし事

元和年中に大雪降つて、箱根山の玉笹を埋みて往來の絶えて、十日ばかりも馬も通無し、爰に烏さへ通はぬ峰に庵を結び、短齋坊といふ木食ありしが、佛棚も世を夢の如く暮して百餘歳になりぬ、常に十六むさしを慰にさゝれけるに、或時奥山に年重ねたる法師の來つて、むさしの相手になつて遊びける、其の有様を見るに、木の葉を貫き肩に懸け、腰には藤蔓を絡ひ、黑き顔より眼光り、人間とは想はれず、松の葉を拐り食物として、ものいふ事稀にして、これほど好き友は無し、或夕暮に燒火に事を缺きしに、彼の老人腰より革巾著を取出し、是

は鞍馬の名石にて、火の出づる事早しと、判官殿に貰うたとまさ〳〵しう語る、短齋驚き、そなたは如何なる人ぞ、其の時は久しき事といへば、我こそ常陸坊海尊、昔に替る有様といふ、是を思ひあはすに、此の人の最後の知れぬ事を申傳へしが、扨は不思議と、過ぎにし辨慶は色黑く背高く、繪にさへ恐しく見ゆると尋ねければ、それは大に違うた、また無き美僧と語る、義經こそ丸顔にして鼻低う、向齒拔けて藪にらみにて、縮頭に横肥つて、男振は一つも取柄無し、唯志が大將で、其の外は片岡が萬に吝い事、忠信は大酒啖、伊勢の三郎は買掛を濟さぬ奴、尼崎渡邊福島の船賃、侍顔して一度も遣らず、熊井太郎は一年中比丘尼好、源八兵衛はぬけ風の俳諧して埒のあかぬもの、駿河二郎は面妖な事の夏冬なしに褌嫌、龜井は何をさしても小刀細工が利いた、鈴木次信は棒組にて一生飛子買うて暮す、兼房は淨土宗にて後世願、此の外一人もろぐな者は無かつたと語る、さてまた靜は今に申すほどの美人かと問へば、否々十人並に少し勝れた女房を、其の時は判官世盛にて、借錢は無し唐織鹿子の法度も無く、明暮京の水で磨きぬれば美しい、今でも大名衆の妾ものども、御關所の改に見るに、其の時よりは風俗が好いと申して、まだ咄したい事もあれども、皆嘘のやうにおも

やろ、誰ぞ證據人欲しやといふ折節、柴の網戸を音信れ、正しくこれに海尊のお聲がします る、少御目に懸りたしと内に入る、やれ懐しや懐しや、命ながらへて又逢ふ事の嬉し、先御亭坊へ引きあはしましよ、是は猪俣の小平六とて昔の好誼なるが、今は備中の深山に住まれますが、此の度は奇特の尋ねなり、自今以後は顔見識られて互にと申して、通夜古の軍物語昨日今日の如く、今に平六力のほどはといへば、さのみ替らじと片肌脱ぐ、常陸坊も腕まくりして、龜割坂にて枕引せし事憶出して、さらば腕押と兩人負けず劣らず三時あまりも揉みあへば、短齋も中に立ち兩方へ力を付けて、懸聲雲中に響渡つて、三人ながら姿を失ひて、此の勝負知つた人もなし。

二　狐四天王

恨之段

播州姫路にありし事

諸國の女の髪を切り、家々の焙烙を破らせ、萬民を煩せたる、大和の源九郎狐がためには姉なり、年久しく播磨の姫路に住馴れて、其の身は人間の如く八百八疋の眷屬を使ひ、世間の眉毛思ふ隨に讀みて人をなぶる事自由なり、爰に本町筋に米屋して門兵衛といふ人、里ばなれの山陰を通るに、白き小狐の集りしに何心も無く礫打懸けしに、自然あたり所惡しくそのまゝ空しくなりぬ、不便とばかり思うて歸る、其の夜門兵衛が屋敷の棟に何百人か女の聲して、御姫様たま〳〵野遊びましますを、命を取りしものそのまゝは置かじと石を擲つ事雨の如し、白壁窓蓋迄で打破れども其の礫一つも無し、家内驚く、明の日の晝前に旅の出家の來つて、お茶一服給はれと申されけるに、下女に申しつけて參らせけるに、間も無く同心らしき大男二三十人亂入りて、御尋ねの出家を何とてかくし置きけるぞと、其の斷聞入れず、亭主内儀を押へて坊主になして後、彼の出家もともに尾のある姿を露して遁歸る、是非もなき仕合なり、ヲ門兵衛が娌、息子の門右衛門、北國に行きて留主の内とて里に歸りてありしに彼の門右衛門になりて、四五人連にて走込み、女房を捉へ、我他國の跡にて、密男露顯れたり、命は赦してと申しもあへず天窓を剃られ、身に覺の無き事ぞと年月の恨をいうて歎きぬ、おのれ證據を見せんと、女を引立て遙の山中に行きて、五人立並び一人々々名乗りける、これは二階堂の媒助、鳥居越の中三郎、隱笠の金丸、鷄喰の闇太郎、野あらしの鼻長とて、於

佐賀部殿の四天王一人武者これなりと、形を變へてぞ失せける、此の事門兵衛に行き、深く歎くにかひ無し、又其の次の日午の刻に大なる葬禮を拵へて、引導の長老旗天蓋をさしかけ、玉の輿光をなし孫に位牌を持せ、一門白衣の袖を絞り、田衆は袴肩衣にて野墓の送り氣色、門兵衛親里五六里離れしが、けはしく人遣し、夜前頓死いたされ候、御歎あるべしと、少しも遲く御知せ申すなり、直に墓へ御越あれと、此のありさま哀に煙となし、親類ばかり跡に殘り、さても〳〵夢の世や、若いを先に立て、おもしろき事もあるまじ、これにて法體ましませと、俄坊主になし姫路に歸れば、門兵衛内儀も姿を替へてありし樣子聞きて悔めども、髮は生へずしてをかし。

三　姿の飛乘物

津の國池田にありし事　　因果之段

寛永二年冬のはじめに、津の國池田の里の東吳服の宮山、衣懸松の下に新しき女乘物、誰かは棄置きける、柴刈る童子の見つけて町の人に語れば、大勢集りて戸閉を開けて見るに、都めきたる女郎の二十二三なるが、美人といふはこれなるべし、黑髮を亂して右を金の平元結を懸け、肌著は白く上には菊梧の地無の小袖を襲ね、帶は小鶴の唐織に練の薄物を被き、前に時代蒔繪の硯箱の蓋に秋の野を寫せしが、此の中に御所落雁煮樫樣々の菓子積みて、剃刀かたし見えける、御方は何國いかなる事にて斯くお獨はましますぞ、仔細を御物語あるべし、故郷へ送歸して參らすべしと、いろ〳〵尋ねけれども言葉のかへしもなし、唯さし俯向きてましまします、日つきも恐しくて我先にと家に歸りぬ、今宵そのまゝ置きなば狼が憂目を見すべし、里におろして一夜は番して、翌朝は御代官へ御斷を申すべきと、又山に上れば、彼の乘物は一里南の瀨川といふ宿の砂濱に行きぬ、既に日も暮れて松の風凄じく往來の人も絶えて、所の馬方四五人此の女郎を忍び行きて、浮世の事どもを語盡して、情といへど取合へずましませば、荒男の無理に手をさして惱める時、左右へ蛇の頭を出し、男どもに喰付きて身を痛める事大方ならず、いづれも眩眩み氣を失ひ、命を不思議に免れ、其の年中は難病に合へり、其の後は乘物芥川にありといへり、または松の尾の神前にも見え、次の日は丹波の山近く行き、片時も定め難し、後には美しき禿に變り、または八十餘歳の翁となり、或は顏ふ

たつになし、目鼻の無い姥ともなり、見る人毎に同形にはあらず、これに恐れて夜に入り里の通もなく、世の妨となりぬ、此の事知らぬ旅人夜道を行くに、思ひも寄らぬ乗物の棒肩を離れず、奇異の想をなしける、されども少しも重からずして一町ばかりも過ぐると、俄に草臥出でて容易く足も起たず、難儀にあへる、陸縄手の飛乗物と申傳へしはこれなり、慶安年中まではありしが、いつとなく絶えて、橋本狐川の渡に見馴れぬ玉火の出でしと、里人の語りし。

四　十二人の俄坊主

遊興之段

紀伊國あは島にありし事

泳習は瓢箪に身を任せて、浮き次第に水練の上手となつて、自然の時の心懸深し、折節夏海の靜に、加田の浦遊とて御船を寄せられしに、御臺所船より御膳の通、浪の上を行くに腰より下ばかりを濡して、自由する畳の上にかはらずして、月代をする人もあれば中將棊をさすもあり、あふむ盃を交し曲飲するも可笑し、曲舞にのせて小鼓をうち、または瓜の曲剝、これさへ奇妙に詠めしに、四五人してすぐりにらを何程か手毎に抱へて、海中に入りて出でぬ事二時に餘りて、仁王の形を造りて手足の力身までを細縄がらみの細工、是ぞ佛師も及び難し、様々御遊興の折から、御船端に闘口の何某豊に遠見して居られしに、小姓衆に仰付けられ、御意と言葉を懸けて小波の中へ突落しけるに、遙の舟にあがりぬ、いかなる手者もだますにはと、大笑すれども少しも驚かず、めし舟に乗移れば、何とて手も無く一人は沈みけるぞと仰せける、少人にあやまりもあればと存じ、左の袂にしるしを附け置くのよし申上ぐる、彼の者めして御覽あるに、麻袴より帷子まで二三寸突通し、其のかすり脇腹かけて茨がきの如く細き筋のつきしに、御前はじめて各々横手を打ちぬ、落ちさまに差添抜きてあてしに、其の人さへ覺えねばまして他よりは眼にとまらず、早き事日本一の御機嫌、御舟は浦々巡れば、家中の舟は磯にさしつけ、阿波島の神垣の邊までも荒し、若き人々酒興せしに、俄に高波となり、黒雲立累り長十丈餘の大蛇の出でて、鱗は風車の如し、左右の角枯木と見えて火焔吹立て、山更に動くと見て何も騒ぎけるに、間近く來りしに、御長刀にて拂ひたまへば恐れて跡に歸る、大畝して小船は天地覆して懐みぬ、沖より十二人乗りし、小早横切に押

すと見えしが、大蛇一息に飲込み、身悶せしが、間もなく跡へぬけて汀に流著きしを見るに殘らず夢中になつて、頭髪一筋も無く十二人造坊主となれり。

五　水筋の抜道　報之段

若狭の小濱にありし事

若狭の國小濱といふ所に、獵師の使ふ網の糸を商賣して有德に世を渡る人あり、越後屋の傳助とて此の湊に隱無し、年切の女に名を久と呼びて、其の姿北國者には優しく、心を懸けし人あまたの中にも、京屋の庄吉とて都より通商せしが、馴染めば片里も住家となりて年を重ねてありしが、未定る妻も無し、彼の久を忍び馴れて末々までの事を申交せしに、親方の女房見咎め、あらけなく折檻して、兎角は形人並なるがゆゑにいたづらをするなれば、目の前に思知らせんと、火箸を赤めて左の脇顔にさしつけけるに、皮爛なる所燒縮みて、女の身にしては此の悲しさ大力亂氣になつて、年月手馴し鏡臺に向へば、顔をかしくなるを身悶して歎き世にながらへても、詮なしと思極め、心にある事書置して、小濱の海に身を投げけるに、其の夜は沖浪荒く死骸も行方知れず、不便とばかり申果てける、其の比は正保元年二月九日の事なるに、大和の國秋志野の里に、田畠の用水のために百姓集りて、古き寺地の跡を切りならして池を堀りけるに、世間より深く土をあぐれども水筋にあたらぬ事を悔み、鋤鍬の暇無く三日三夜穿るほどに、水の蓋と聞えて車何百輛か引く音して、片隅に穴明きてそれより青波立昇り、俄に阿波の鳴戸の如く渦のまく事二時餘、池より水餘りて國中大雨の思をなし轟く事限無し、明の日水靜になつて見れば、十八九なる者身を投げしが岸の茨に寄添ひしを哀と引上げ見るに、此の里々の女とも見えず、殊更十日も以前に身捨てしありさま最不思議と申す折節、二月堂の行に參詣せし旅人暫時目をとめて、世には肖たる面影もあるものかな、遠き國里を隔てしに、越後屋の下女に其のまゝなるはと、前に廻りて改めるに、木綿著物に鹿子の散し紋、帶は常々見つけし横島の黄色にして胸に守袋、これを明けて見るに善光寺如來の御影、檀得の淨土珠數書殘せしものをあらまし、讀むに、疑無く若狭の事なり、これを想ふに、奈良の都へ若狭より水の通ありと傳へしが、古より今の世まで例も無きぞと、身體は其の里に埋みてさまゞ〳〵弔ひ、各右の品々を持ちて國許に歸りしに、何も

横手を打つて此の物語に哀増して、庄吉萬事棄てゝ其の身を墨染になして、秋志野の里に行きて、塚の印の笹蔭に昔の事ども申盡し、おのづからの草枕まだ夢も結ばぬうちに、火燃え車に女二人取乘りて飛來るを見るに、正しく傳助が女房なり、これをおさへて燒金あつるは、我が馴れし久が姿の替る事なし、今ぞおもひを晴しけるぞといふ聲ばかりして消えぬ、三月十一日の事なるに日も時も違はず、若狹にて一聲叫びて空しくなりけるとなり。

卷三

一　殘るものこて金の鍋　仙人之段

大和の國生駒にありし事

俄に時雨て生駒の山も見えず日は暮に及び、平野の里へ歸る木綿買道を急ぎ、昔業平の高安通の息つぎの水といふ所までやう〳〵走りつきしに、跡より八十餘の老人來つて頼むは、近來の無心なれども老足の山道、さりとては難儀なり、暫く負うてたまはれといふ、易き事ながら斯る重荷の折ふしなれば叶はじと申す、勞の志あらば重くは懸らじと、鳥の如く飛乘りて行くに、一里ばかりも過ぎて、松原の蔭にて日和もあがれば、老人ひらりと下りて、草臥のほども思ひやられたり、せめては酒一つ盛るべし、これへと見え渡りて吸筒も無く、不思議ながら近う寄れば、吹出す息につれて、美麗き手樽一つ顯れける、何ぞ肴もと黄金の小鍋幾個か出しける、これさへ合點のゆかぬに、とてもの馳走に酒の相手をと吹けば、十四五の美女琵琶琴出してこれを搔鳴し、後には一つけざしさま〳〵、我を覺えず醉出でければ、冷し物とて時ならぬ瓜を出しぬ、此の自由極樂の心地して樂みけるに、彼の老人女の膝枕をして鼾出でし時、女小聲になつて申すは、自これなる御方の手懸者なるが、明暮附添ひて氣盡休む事なし、御目のあかぬうちの樂に、隱夫にあふ事見許してたまはれと申す、言葉の下よりこれも息吹けば、十五六なる若衆を出し、最前申せしは此の方と手を引合ひ、そのあたりをつれ歌唄うて歩行きしが、後には久しく行方の知れず、老人目覺めたらばと、寢返の度々に彼の女を待兼ねつるに、何時となく立歸り、若衆を女呑込みければ、老人目覺して此の女

を呑込み、はじめ出せし道具を片端から呑みしまひ、黄金の小鍋を一つ殘して、これを商人に取らし、兩方ともにどれになつて、仕々の物語盡きて既に日も那古の海に入れば、相生の松風謠立つに、老人は住吉の方へ飛去りぬ、商人は暫時枕して夢見しに、花が散れば餅を搗き、蚊帳を疊めば月が出で、門松もあれば大踊あり、盆も正月も一度に、晝とも夜とも知れず、すこしの間に好い慰をして、殘るものとて鍋一つ、里に歸りて此の事を語れば、生馬仙人といふもの、毎日住吉より生駒に通ふと申傳へし、それなるべし。

二　夢路の風車

隱里之段

飛驒の國の奥山にありし事

世には面妖なる事あり、飛驒の國の奥山に昔より隱里のありしを、所の人も知らず、或時山人の道も無き草木を分入るを、奉行見付けて後を慕ひ行くに、鳥も通はぬ峰を越し、谷あひ三里ほども過ぎて、恐しき岩穴あり、彼の山人これに入りける、覗けば唯闇うして下には清水の流蒼し、目馴れし金魚多し、我これまで來て此の中見屆けずに歸るも、侍の道にはあらずと思ひ定め、四五丁來ると思ひしが、唐門階五色の玉をまきすて、喜見城とは今こそ見れ是なるべし、折節は冬山を分けのぼり、落葉の霜を踏みて來りしに、麥の景色は春なれや、鶯雲雀の囀りて、生烏賊魚駿寶る聲自のどやかに、暫時詠めけるうちに眠出でて、これなる草枕して前後も知らず假寢する、其の夢心に女の商人二人來て、あとや枕に立寄り我を賴みて申すは、恥しながら斯る面影を見え申すなり、自は此の都の傍に島絹を織りて世を渡りしに、何に不足なる事も無かりしに、つれたる人風邪の心地とて假初の煩休む事なく、最後の形見に織りためし絹二千疋たまはり、子も無いものゝ事なれば、これを賣りて年月を送りて、末々は出家にもなれとの名殘の言葉にまかせ、此處彼處の市に立ちて渡世とす、いまだ一年も經たざりしに、我に執心の文を遣しける、思ひも寄らぬ事なり、其の男は谷鐵と申して此の國に住みし大力なり、其の後文のかへしをせぬ事を恨み、或夜忍入り二人のものを切殺し、貯へ置きし絹紬を取りて歸り、死骸は野末に埋みける、此の事穿穿遊しけるに知れずして、今に谷鐵を浮世に置くことの口惜しや、殊に執心と申せしは僞なり、唯絹を取るべき謀事なり、あはれ國王へ申上げられ、讐を取つてたまはれと、女の首兩方より袖に縋り

て歎く、それこそ易き事なれども、何をかしるべに申上ぐべき便も無しと申せば、それにこそ諦據あれと懇に語る、これより南に當つて廣野あり、常は木も草も無き所なり、我等を堀埋めし後に、二岐の玉柳の生へしなり、これしるしに賴むとの言葉もつひ絶えて夢は覺めける、不思議と思ひ彼の野に行けば、其の里人集り今までは見馴れぬ柳と駭く、扨はと此の事國王へ申上ぐれば、あまたの人を遣し彼の地を穿らせ見給ふに、夢に違はず女二人昔姿者らず首落してありける、あらまし奏聞仕れば、谷鐵が住家に大勢亂入りて搦取り、おのれが身より出でぬる錆なればと、鐵の串さしにして衢にさらしたまへり、其の後彼の侍には御褒美とて目馴れぬ唐綾の島絹數々賜りて、汝此の國にては命短し、急いで故郷に歸れと、紅の風車に乘せられ、浮雲取卷きて目ふる間に住馴れし國に歸り、ありのまゝに申せば、其の所を搜出せと、數百人山入して谷峰たづね見れども今に知れ難し。

三　男地藏　　現遊之段

都北野の片町にありし事

北野の片脇に、合羽のこはぜをして其の日を送り、一生夢の如く草庵に獨住む男あり、都なれば萬の慰事もあるに、此の男は西東をも知らぬほどの娘の子を集め、好けるもの持遊びものを拵へ、これに打交りて何の罪も無く明暮樂むに、後には新塞の川原と名付けて、五町三町の子ども爰に集り、父母をも尋ねず遊べば、親ども喜び佛のやうにぞ申しける、其の後此の男夜に入り月影を忍び、京中に行きて美しき娘を盜みて、二三日も愛してはまた返しぬ、これを不思議の沙汰して、暮より用心して幼き娘を門に出さず、都の騷動大方ならず、昨日は六條の數珠屋の兒が見えぬとて歎き、今日は新町の椀屋の子を尋ね悲むぞかし、比は軒端に菖蒲葺く五月の節句の色めける、室町通の菊屋の何某の一人娘、今七歳にて其のさま勝れて生れつきしに、乳母腰元がつきて入日を除ける傘さしかけて、行くを見すまし、横取にして抱きて逃るを、それ〳〵と聲を立つるに、追懸くる人も早姿を見失ひける、此の男の足の疾き事、京より伊勢へ一日に下向するなれば、跡に續くべき事及び難し、其の面影を見し人のいふは、先菅笠を著て耳の長き女と見るもあり、否顏の黑き眼の一つあるものと、とりどりに、姿を見かへめ、彼の娘の親いろ〳〵歎き洛中を搜しけるに、自然と聞出し彼の子を取返

し、此の事を言上申せば、召寄せられて思ふ所を御聞き遊しけるに、唯何となく幼き娘を見ては、其のまゝに欲しき心の出來、今まで何百人か盗みて歸り、五日三日は愛して又親元へ歸し申すのよし、他の仔細も無し、斯る事のありしに今まで世間に知れぬはさすが都のおほやうなる事思ひ知られける。

四　神鳴の病中　欲心之段

信濃の國淺間にありし事

欲には一門兄弟の中も見棄つる事世に習ぞかし、信濃の國淺間の麓に、松田藤五郎と申して、所久しき里人のありしが、今年八十八歳にして浮世に何をか思ひ殘す事も無く、末期の近づく時、藤六藤七二人の子を枕に、我相果てゝの後摺糠の灰までも二つに分けて取るべし、扨又此の刀はめいよの命を助り、此の年まで世に住む事の目出度く、此の家の寶物となれば、譬牛は賣るともこれを放つ事なかれと、懇に申置かれて、つひに佛の國へ參られけるに、いまだ七日も經つや經たずに早跡式を爭ひ、諸道具兩方へ分取る、件の刀をば兄も弟も心懸けて論ずる事の見苦しさに、親類立會ひ兎角領なれば、此の一腰は藤六に渡せと、いろ〳〵仁申せど弟は更に合點をせず、兄は是非に取らねば聞かず、何もあつかひに日を暮しぬ、藤六申すは、二つに分けたる家を皆藤七に取らすべしと申せば、やう〳〵あつかひ濟みて、藤六は刀ばかり取つて家を出で、向後百姓を廢ると、それより遙々の都に上り、目利へ行きてこれを見するに、奈良ものにして然も燒刃もかつてなければ、重ねて人手にも取らねば、また故郷に歸り母親の方に行きて、刀の樣子を尋ねけるに、老母語りけるは、其の昔國中百日の日照、ふけ田も干潟となつて、村々水論のありし時、隣里の男を親仁斬付けられしに、しぶり皮も剝けず危き命を助かられしなり、其の時此の刀の斬れぬを悦び、命の親とて一代家の寶物とは申されける、いしのより無銘の何の役にも立たざるものとは隱もなきに、其ノが萬に換へても欲しがる事の不思議なり、然も水論は正保年中六月はじめつ方の事なるに、兩村の大勢千貫樋に群り、庄屋年寄一命を捨てゝ爭して、今ぞ危き折節日の照る最中に、一つの太鼓鳴り黑雲舞下つて、赤褌襠を搔きたる火神鳴の來て里人に申すは、先靜つて聞きたまへ、久しく雨を降さずして斯く里々の難儀は、我々仲間の業なり、このほどは水神鳴ども若

氣にて夜這星に戯れ、可惜水を減して思ひながらの日照なり、各手作の牛蒡を送られたらば、追付雨を請合ふと申す、それこそ易き事なれと、あまた遣しけるに、龍の駒に一駄付けて天上して、其の翌の日より旱驗を見せて、ばらり〳〵と痳病げなる雨を降しけるとぞ。

五　蚤の籠ぬけ

武勇之段

駿河の國府中にありし事

富士颪の騒しく、府中の町も用心時の年の暮になりぬ、世を渡る萬の事も不足なく、武道具も昔を棄てず、歴々の浪人津河隼人と申せしが、いかなる思入にや下人なしに唯一人少の板廂を借りて住みけるに、十二月十八日の夜半に盗人大勢忍入りしに、夢覺め枕刀を抜合せ、四五人も斬立て追散し、何にても物は取られず沙汰なしにして、近所も起さず濟しぬ、其の夜また同町はづれの紺屋に夜盗入りて、家を荒し染絹かけ硯を取りて行くに、亭主鎗の鞘はづして出合ひけるに、七八人も取卷き主人を斬りこかし、思ふまゝ諸道具まで取つて行く、夜明けての御詮議に下々の申すは、皆髭男の大小をさしてまゐつたといふ、斯る折ふし彼の浪人の門に、血の流れたる世間より申立て、様々の申譯其の證據も無ければ是非なく籠舎してありける、昔は如何なるものぞと御尋あるに、此の身になつて名は無しと打笑つて申す、何ともむつかしき詮議にて年月を重ね七年過ぎて、駿河の籠者殘らず京都の牢に引かるゝ事あり、又此の中に交り都の憂住居武運の盡なり、あまた人はあれども其の身に科を覺えて、今更公儀を恨みず命を惜まず、ある雨中に鐵の窓より幽なる光明を受け、蛤の貝にて髭を抜くもあり、塵紙にて佛を造るもあり、色々藝盡一人も鈍なるものは無し、其の中に髪白く卷上り、宛然仙人の如くなるが、薄縁の糸にて細工に蟲籠を拵へ、此の中に十三年になる頭、九年の蚤なるこれを愛して、食物には我が太股を喰はしけるほどに、勝れて大になり、優しくも懐きて、其の者の聲に頭は獅々踊をする、蚤は籠抜する、悲しき中にも可笑さ増りぬ、後は石川五右衛門より傳授の書盗の大事、または高名咄になつて、ちよろりの新吉といふ男に、片耳の無い子細を聞く人に語るは、我けはしき事に出合ひしは四十三度一度も手を負はざりしに、或時に駿河にて浪人方へ押込みしに、手ばしかく斬立て、皆々命をやう〳〵拾ふ、一代にこれほどすかぬめに逢ひつる事は無し、それにも懲りず其の夜染物屋へ入りて、

主人を斬殺してとありのまゝに語るを聞きて、我こそ其の浪人の隼人と申す者ぞ、其方どもの仕業我が鄰儀となるなり、斯る身となりてさら〳〵命を惜むにはあらず、侍の惡名取つて相果つるの事口惜し、何とぞ此の難晴るゝやうにと申しければ、盜人聞分け我々はそれのみならず、此の度は女を殺しての科彼是のがるゝ事なし、御身の事御訴訟申さんと、牢番を賴み兩人あらましを申上げゝれば、久しく濟まざる事の埒明き、浪人を召され、永々の難儀の段思召し、何にても望を叶へ下さるべき仰なり、浪人有難く存じ、然らば此の二人が命を申請けたし、最前は彼等ゆゑの難に逢ひ候へども、此の度の申譯にて武士の名を埋まぬ事の嬉しさ、かさね〴〵言上申し助けゝるとなり。

六　面影の燒殘

無常之段

京上長者町にありし事

東山の花に暮し、廣澤の月に明し、浮世の悲しき事を知らず、上長者町に酒造込み、春夏は隙なるたのし屋あり、久しく子を願ひしに、娘一人設けて乳母を取りて育てしに、今十四歳になりしが、いづれを難いふべき事も無き美女なれば、諸人思入も深かるべし、母の親の才覺にて晩からぬ事を取急ぎ、緣付の手道具までも殘る所も無く拵へ、彼方此方の言入も合點せず、都の花をと聟見競べし折節、風邪の心地と惱みけるに、京中の藥師に掛けて樣々看病すれども効なく、惜しや眠るが如く世を去りける、二親の歎限も無し、其の日も暮れて潛に野邊の送をして、千本の三つ鐘に無常覺めて煙を懸くる時、下々の女までも同火に飛入るばかりの思をなして歸るに、春の閨さへ辛きに、雨の降出て殊に哀を殘す、其の夜の明方七つの時取をして灰寄に行くに、乳參らせたる乳母が夫、我が宿より直に人よりも早く墓原に行くに、道すがら人も見えず、三月二十七日の空宵の氣色よりなほ物凄く、燒場に行けば何とも見分け難き形足許へ躓みあて、これはと驚き燃えさしを上げて見れば、死人は疑無し、如何なる亡者ぞと念佛申し、さて娘御の火葬を見るに、早桶薪木の外へ轉けて出でけるに氣を附け、彼の死人を見れば髮頭は燒けても風情は替らず、未幽に息づかひのあれば、木の葉の雫を口に注ぎ、我が單衣を脱ぎて著せ參らせ、跡へ餘所の白骨を入れ置きて、それより負ひ奉り土手町の借屋敷に行きて、年來目を懸けし者を叩起し、忍びて養生をする病人と申し、

一室なる所へ閉込み夜明けて見るに、總身黑木の如し、再人間には成り難きありさまなれども、脈に頼あれば不斷の醫者を呼びに遣し、はじめを語りてしのび〳〵に藥を盛れば、次第に眼を開き足手を動し、自然に見苦しき事もやみぬ、半年も過ぎて樣子を聞け共、かつてものを言はねば現の人に逢へる如し、是は醫師も合點ゆかず、占はしても見たまへと、安部の何某をよびて八卦を見るに、此の人何ほど藥を盡したまふともきく事更にあるまじ、子細は親類中に淨世に亡き人の弔事をしたまふゆゑぞと、見通す樣にぞ申しける、今は秘して叶はじと、長者町に行きて二親に段々此の事を語れば、夢の覺めたる心地して、譬ひ姿はともあれ命さへ世にあらば嬉しさ是ぞと、俄に佛壇の位牌を碎き佛事を廢めて、精進を魚類に引換へて、祝言にいさめをなせば、忽其の日よりものを言出し、此の程の恥を悲み親達の歎を思遣り、萬の志常に違ふ事無し、我無事末々は出家になしてと、一筋に思定め、其の後は親にも一門にも逢はず、斯くて三年も過ぎて昔に替らず美女となりて、常々願の通り十七の十月より身を墨染の衣になし、嵐山の近なる里に一庵を結び後の世を願ひける、また例も無き蘇生ぞかし。

卷四

一　お霜月の作髭

馬鹿之段

大坂玉造にありし事

大上戸の同行四人、いつとても諸白二斗切に呑干しける、此の御寄坊主はじめの程は雫も嫌はれしが、人々に薦められて諸々の小盃を振捨てゝ、阿波の大鳴門小鳴門と名付けて渇まく酒を喜ぶ、何も子どもに世を渡し、年齢に不足も無ければ、何か思殘する事も無し、樂は呑死と定め、折節十月二十八日、今宵御取越とて殊勝に御文を頂き、難有き御談合に泪を流し、跡は例の大酒になつて、前後を知らず小唄交に慰みける、其の次の間に近所の若い者ども、親父達の噪可笑がり、これを聞寢入にして居る中に、其の夜更けてから沙汰無しに聟入をする男ありしが、嬉し顏に内にも入られず、爰に其の時分を待合すを、彼の法師の見付けて、

此の男めは今晩聟入をすると豫て聞いたり、先の娘の美しさ、昔の淨瑠璃御前も及ぶまじ、憎や彼奴めが御曹司様に髪月代を仕濟して、よばぬ先から女房自慢なる顔色に、然らば祝うて釣髭と、墨磨り筆に染めて、物の見事に作りければ、年寄ども其の筆を奪合ひて、我も我もと作るほどに、顔一つ手習の如く書汚しける、其の後けはしく宿に歸り、袴著るまでも人の氣も付かず、其の姿にて聟入せしに、先にて興を覺し、差添を提げて駈出すを、舅留めて中すは、此の上は〻〻堪忍遊しても我等きかず、最早百年目と死出立になりて行くを、兩町聞付けさま〴〵にあつかへど　聞かざれば、やう〳〵四人に作髭をさせ、頭に引裂紙を付け上下を著し目中の詫言、よい年齢をして孫のあるものども面目無けれど、死なれぬ命なれば是非も無き事なり、中にもすぐれて可笑きは御坊の上髭ぞかし。

行末の寶船　無分別之段

諏訪の湖にありし事

人間ほどものゝ危き事をかまはぬもの無し、信濃の國諏訪の湖に、毎年氷の桴懸つて狐の渡初めて、其の後は人馬ともに自由に通をする事ぞかし、春また狐の渡歸ると其のまゝ、氷解けて往來を止めけるに、此の里のあばれもの根引の勘内といふ馬士、廻れば遠しと人の留むるにもかまはず、我が心一つに渡りけるに、眞中過ほどになりて、俄に風暖に吹きて、跡先より氷消えて浪の下にぞ沈みける、此の事かくれも無く哀と申すべし、同年の七月七日の暮に、星を祭るとて梶の葉に歌を書きて湖に流し遊ぶ時、沖の方より光り輝く船に、見馴れぬ人あまた取乘りける、其の中に勘内高き玉座に居て、其の山々しさ昔に引替へ、皆々見違へける、船より心靜にあがり、前につかはれし親方の許に行けば、何も驚き樣子聞くに、某唯今は龍の中宮に流れ行きて、大王の買物使者になりて金銀我隨に仕ると、金錢二貫くれける、さてこゝもとより米もやすし、鳥肴は手捕にする、女房は撰取、旅芝居の若衆も來る、時花唄を唄ひあかして、寒いとも空腹とも知らず、正月も盆もこゝと少しも違うた事無し、十四日から灯籠も出して、こゝと替つた事は借錢乞といふものを知らぬと申す、此の七月は我はじめての盆なれば、ひとしほ馳走　ために、國中の色よき娘、十四より二十五まで、未男を持たぬをすぐりて、大踊のこしらへ、それはそれはまたあるまじき事なり、其の用意の

買物に參つたと申す、召連れし者ども、何とやら磯臭く頭魚の尾なるもあり、螺のやうなるもあり、萬の買物を持たせ出行く時、彼の國のいたづらを皆々見せましたい事じやといふ、それはなる事かと言へば、某の隨意なり、十日ばかりの際入にして御越あれ、白銀錢を船にいつぱい積みて參らせんと申せば、我は常々の好誼、人よりは懇したと行く事を爭ひける、親方をはじめ其の中にて七人伴ひける、取殘されし人これを歎きしに、耳にも聞入れず、件の玉船に乘りさまに、一人分別して、命に替へるほどの用のありとて行かず、さらばさらば頓てといふ間も無く舟は浪間に沈み、それより十年餘も過行けど音信も無く、踊を見にと唄にばかり唄うて果てぬ、此の六人の後家の歎、又一人行かぬ人も今に命の長く、日安書して世を渡りけるとなり。

三　八疊敷の蓮の葉

名僧之段

吉野の奥山にありし事

五月雨の降續き、吉野川も渡絶えて、常さへ山家はものゝ淋しやと、昔西行の住みたまひし苔清水の跡を掬び、殊勝なる道心者のましますが、所の人此の所に集りて、煎じ茶に日を暮しぬるに、雨頻に俄に山も見えぬ折ふし、板縁の片隅に古茶碓のありしが、其のしん木の穴より長七寸ばかりの細蛇の一筋出でゝ、間も無く花柚の枝に飛返りて上ると見えしが、雲に隱れて行方知らず、麓の里より人大勢駈付けて、唯今此の庭から十丈餘の龍が天上したと申す、此の聲に驚き外に出でて見るに、門前の大木の榎のありしが、一の枝引裂け、其の下にほれて池の如くなりぬ、さても〳〵大きなる事やと、人々の騷ぐを法師打笑つて、各々廣き世界をしぬゆゑなり、我筑前に有りし時、さし荷の大蕪菜あり、又雲州の松江川に横巾一尺二寸宛の鮒あり、近江の長柄山より九間ある山の芋穿出せし事もあり、松前に一里半續きたる昆布あり、對馬の島山に髭一丈伸したる老人あり、遠國を見ねば合點のゆかぬものぞかし、昔嵯峨の策彦和尚に入唐遊ばして後、信長公の御前にて、物語に、靈鷲山の御池の蓮葉は、凡一枚が二間四方ほど開きて、此の薫る風心好く、此の葉の上に畳寢して納涼む人ありと語りたまへば、信長笑はせたまへば、和尚お次の間に立ちたまひ、泪を流し衣の袖を絞りたまふを見て、唯今殿の御笑ひ遊ばしけるを口惜しく思召されけるかと尋ね給へば、和尚

のたまひしは、信長公天下を御知り遊ばすほどの御心入には、小き事のおもはれ、泪を溢すとのたまひけるとぞ。

四　因果の拔穴八　敵討之段

但馬の國片里にありし事

鎗持乘馬を引連れて、家中また無き使者男、大河半右衞門が風俗世に見習へといはれしに、武士の身ほど定め難きものは無し、昨日故郷豊後の國より文遣しけるを、女聟心許なく明けて見るに、兄娌が書越しける、判兵衞殿事此の十七日の夜、妙福寺の碁會に、少の助言より言ひあがりて、寺田彌平次討つて早所を立退き申候、子も無き人の御事なれば、各々様ならで誰か外にはたよりも無し、女の身の是非もなき仕合と哀に申遣しける、思案に及ばず俄に御暇申請け、一子の判八ばかり連れて武州を立出づる、此の彌平次は殿より御取寄ものなれば、深く秘してなか〳〵手にはまはるまじ、常々傳聞きしは、但馬の國に里人に親類ありとや、定めてこれへ退くべし、我々も此の所へ行きて心掛くべしと、急ぎ但馬に下りて忍び〳〵に尋ねけるに、案の如く百姓の門造に二重垣をして、浪人あまたかくまひ用心のナまで何疋か、世は油斷なく拍子木を鳴し、間もなう眼を覺しける、一夜は風烈しく然も闇なれば、燒飯拵へ先犬どもに近寄り、樋手の塀を切拔き、又内なる壁に道つけて廣庭に忍入りしが、彌平次聞付け何者かといふ、親子ともに板の切を銜へ、魚の骨の如くにもてなし、犬の眞似いたせしに、これを聞きて犬には天窓が高い、皆起合へと呼はるほどに、豫ての者どもをめき渡れど、まだ氣遣をして彌平次は出でず、けはしくなれば先此の度は退けと、出さまに鍋釜を提げて表に捨て置き、はじめの拔道に出づるに、老人の不自由さは、潜る時隙いる所を跡より大勢兩足に取著き、少しも身の動ならず、判八立歸りて親の首を切り、其の首提げて遁延びけるに、あとにて詮議さまざまに、鍋釜の樣子を見て盜人には疑なしと、其の通に濟しける、其の後判八は我が手に懸けし親の首を持ちて、入佐山の奥深く秋萩の下葉を分けて、世に斯る憂目もある事かな、敵は討たで如何なる因果ぞかし、江戸にまします母の聞きたまはゞ、我をふがひなく御歎も深かるべし、然れども一念懸けし彌平次を討たでは置くまじ、御心安かれと御首に物を語りて、さて木の根をかへし埋所の穴をほりしに、下より曝

首一つ出でける、是も如何なる人の昔ぞと、知らぬ哀並べて埋め、露草を折りて水を手向け、其の日もまだ暮に遠ければ、人の目を忍び夜に入り里に歸らん、塚を枕に暫時まどろむうちに、彼の曝首告げて語るは、我は判右衛門があさましき形なり、我がためとて敵を討來て、汝が手に懸る事はこれ定る道理あり、前世にて彌平次が一門、故なき事に八人まで失ひければ、天此の科を免したまはぬを、今此の身になりて覺ゆる、其方とてもこれを免れ難し、武勇の本意を廢めて墨染の身となりて、先立ちし二人が跡を能く〳〵弔ふべし、此の言葉の證據には我が形めるまじ、再堀つて見るべしと告げて失せける、彼の塚を堀るに、いじめの暇首なき事不思議ながら、よもや討たで置くべきかと、心を盡せしかひ無く、判八もまた返討にあひぬ。

五　形は畫の眞似　執心之段

大阪の芝居にありし事

淨瑠璃の太夫に井上播磨とて、様々の節を語出して諸人に口眞似させける、有時の正月芝居に、一の谷の逆落の合戰を五段に作り、人形も一つ〳〵細工人心を盡して拵へ、役者も銘々の魂入りて、源平西東に立別れ、大戰の所をつかひけるほどに、大阪中うつして、これ見物事とて久しく時花りける、其の比は二月の末の事なるに、明暮春雨の降續き、萬の濱芝居まで休みて物の淋しき夜半に、千日寺の鉦の聲蛙の鳴くより外は聞く事も無く、樂屋番の小兵衛左右衛門木枕をならべ、灯火幽にして咄寢入に前後も知らぬ時、人の足音に眼覺し、二人ともに夜着の下より天窓を上げて見るに、つかひ捨てたる人形ども、ものこそいはね其のまま人間の如く、立合ひ暫時叩合ひ喰付き血煙立つて恐し、其の後に西の方より、越中の二郎兵衛と名付けし出來坊ゆたかに出でければ、東の方からも佐藤次信出でて、これは半時ばかりも切結びしが、疲れて相引にして次信は腰をうつて休む、二郎兵衛は徐々庭に下りて、天目柄杓を取つて、呼吸つぎの水呑むありさま、舌の音して人に少しも替る事無し、其の後は敦盛の若衆人形に取付き、または女郎人形にしなだれ、いろ〳〵の事ども宵のことはさやみて可笑くなりぬ、通夜二郎兵衛の人形駈廻りけるが、拂曉に鳴を止めける、樂屋番の二人驚き太夫本にてこれを語る、皆々横手打つ中に、四藏といふ故き道化のありしが、少しも騒がず、

昔より同じ人形ども喰合ふ事は例多し、如何にしても水を呑みし事不思議なりと、翌の日木戸番札賣ども大勢かけて、かつて見るに、年經し狸ども床の下より飛出でて、今宮の松原へ失せにける、恐しきともなかく。

六　忍び扇の長歌　　戀之段

江戸土器町にありし事

館住居氣詰りも上野の花に忘れて、諸人の心だま浮立つ春のありさま、衣裝幕の内には小唄交の女中姿、ほんの櫻よりは詠ぞかし、日も暮に近き折節、大名の奥様めきて、先に長刀二つ挾箱持たせて、高蒔繪の乘物續きて、跡より二十歳餘の面影、窓の簾の隙より見えけるに其の美しさ和國美人揃の中にも見えず、うかく〳〵と附いて廻りける、此の男やう〳〵中小姓ぐらゐの風俗、女の好かぬ男なり、思ふにノばぬ御方を戀初め、跡より行く中間に尋ねしに、さる御大名の姪御様と、あらまし様子を語樂て行く、さてはと其の所を知りて、奥方への御奉公を稼ぎしに、好き傳ありて相濟み、二歳ばかり勤めしうち、彼方此方への御供申せし折

ふし、思入りし御乘物に目を着けるに、緣は不思議なり、彼方にもいつともなう思召し入れられ、末々の女に仰付けられ、長屋の窓より黑骨の扇を投入れける、若い者中間より見付けて、彼の半女と心のあるやうに申すを、沙汰無しに酒など買うて口を塞ぎぬ、其の夜御扇披き見るに、筆のあゆみ、ただ人の文柄にもあらず、思召す事ども長歌に遊ばしける、よく讀みて見るに、我を思はば今宵のうちに連れて立退くべし、男に様替へて切戸を忍び命を限との御事、此の忝さ身を碎きてもと思定め、其の時を待つに御知せ違はず、小者姿にして御出で遊ばしけるを、御門を紛出で早其の夜に、土器町といふ所に好のものあり、これに忍び少しの裏店を借りて人知れず住みけるに、何の心も無く出で給へば、世を渡るべき種も無ければ、御守脇差を繩の質に置きて、月日を送らるゝうちにまた悲しく、男は夜々切疵の膏藥を賣れども捗取らず、後には詮方盡きぬれば、手馴れたまはぬ濯洗濯見る眼もいたはしく、近所も不思議を立てける、屋敷よりは毎日五十人宛御行方を尋ねに、半年餘過ぎて搜し出し、大勢とりかけ彼の男は繩を懸けて、其の夜に成敗にあひける、其の後姫は一間なる方に押籠め、自害遊ばすやうに仕掛け置きても、なかく其の志も無く、時節移れば、如

何に女なればとて後れたり、最期を急がせと大殿より仰せければ、姫の御力に參りて、世のさだまり事とて、御いたはしくは候へども、不義遊ばし候へば、御最期と申上ぐれば、我命惜むにはあらねども、身の上に不義は無し、人間と生を受けて、女の男只一人持つ事是作法なり、あの者下々を思ふはこれ縁の道なり、各々世の不義といふ事を知らずや、夫ある女の外に男を思ひ、または死別れて、後夫を求むるこそ不義とは申すべし、男無き女の一生に一人の男を不義とは申されまじ、又下々を取上げ縁を組みし事は昔より例あり、我少しも不義にはあらず、其の男は殺すまじきものをと泪を流したまひ、此の男のあと弔ふ爲なりと、自髪をおろしたまふとなり。

好色三代男

戀も夢無常も夢、情もきのふの夢にくれて、思ひしもかはゆきも美もおもはくも皆夢ぞかしと思ふから、名さへ夢助と呼ばれて、十三の春より初學に入て、六十の頃は日本の遊君一代男とおなじく猶浮世の淵瀬をさがす、誠に賢は裏借屋の吟味火用心を正し、又は薪の買出し手刻の德損を考へ、或は袴に羽織して、世間男といはるゝも名利ながら子孫の爲ぞかし、是を思へば我ながら我恥しく、時は水無月御手洗の御祓手の神わざ、我心も祈らばやと詣ず、峰の木ずゑのと讀し蟬宮樹に鳴いて、夏なき納涼の地にはうかふりして眞瓜賣あり、笹に團子蒲の穂の耳に入て聾になるといふも嘘らしく、鰻の燒賣り、鯉の水作酒に飯かへる事なし、都は自由のわざとかしと、指を折て藥見世伽羅の油是もなくて叶はぬものと、目を配り心をとらかしける程に、覺えず夕日の端山に傾くに驚き歸さ求めむと、小笹原編笠に分れば、何時しかもとのかたにはあらで、一の細き道にいたる、怪しみながら猶辿るに、小河の流淸々

と水の面湯煙だちて、芬々たる薫忍冬酒に等し、手にすくひて呑むに其味たぐふべきなし、都の花橘は名にこそのめれ、阿波もり葡萄酒などいふにたらず、思ふに此川上に上戸の神のまして斯く酒の泉川を流し給ふにこそと、醉心地にわたるべく覺へけれど、淺からぬ川の瀬いかゞと詠め居るに、遙の南にむさしの〻なりしく大きなる盃をうかべり、是に打乘りて向に越せば、秋の葉白く赤く交へたる麓山に、柴の戸踈にかまへたるあり、瀧津なげふしを吟じ、松風三味を調べて、此けいさいふ計なく、庵に入れば佛壇あり去折しも一人の僧ありて夢介に語り、汝學業にふけること多年の、世に一代男二代男と呼ばれしも親のいさめ世のそしりをも顧ず、此外に未だ眞實のある事を知らず、今汝三代男といはれて此道を知らずばあるべからず、いざ此方へと手を引て一間に入り、東西南の障子を開けば目の前に現はる〻今は昔の物語筆に任せて書とゞむ。

一　情を包む紙袋

人こそ學びの最中なりけれ、廣い宮古の自由さ、仕事を拵へてうる里、猫に化て徒つくすごろつき、朝はよばひ星の歸さ頃より矢倉太鼓に胸とゞろき、心を空になして更にあたる所を知らず、よせ太鼓三番三禮一枚の價で舞ふ木戸番の息子かはゆし、今こそはあれ行先は能い若衆方とならん、長命して見たしと脇狂言より二番、三番つゞきのやりくりしらずの女房などには誠に能い手本ぞかし、口上いひの男出て、是皆様へ御暇といふより、舞臺躍のふりも可笑しく、茶屋のたばこ盆取て歸れば、菓子賣る夫が傍より立騒いで木戸口へ出るを見れば、百人の内六十人は女、其外は寺の同宿役なし親仁、田舍の長次紺屋の弟子らしきが鼠小紋の布子に西陣奥島の帶、此結び様をかしく、猶跡より四十計の女髪を中ばらひに惣傳茶の無地紅うらほの床かしく憎からぬ下女つれて足ばやに行く、何やらん懷より落ちけれど知らでや大勢の中に隔り行くを跡より是がといへど行衛も知れず、取りて歸りひそかに見れば鼻紙袋、裏は金襴の緞子いはれぬ薫此ゆかしき、白きふくさの紅裏にちらし書きたるに、種々の番付したる耳かき一つ包みそへたる、此をかしさも猶底迄取出し見れば、水晶の珠數過去帳是は殊勝な煩惱即菩提と開けば、淨土の八祖を始め、先祖の佛ならべて書いて奥に現在帳といふあり、こは珍しと見れば、朔日より晦日までの諸拂の覺帳、くり返せば皆拂先の名もあらは

に書きたるを、それと計り我ひとり合點して讀捨て指を折れば、酒屋六人坊主二人手代髪結ひ其外を數ふれば十といひて八つ、凡そ此道をたて太夫天神と呼ばれて時めくさへ、月々に拂ひをするはまれの世の中、是浮世の正直者なるべし。

二　思ひを燈す夜半

人は盛にふり袖をのみ見る物かは、若き人はまだ、男は恐ろしきものと計思ひて、いとなしきといふ實を知らず、只人のみをかしき物は非じと、去文かきたる男いつの間にか、化野の露となり、何左衞門と呼びし名も新華臺と位牌に殘れば、やるかたなく悲しさ髪を切てきる物も無地に帶も日野の細きに、手は珠數口には佛語、朝の思ひ夕の涙袂にかはく暇なく、獨寢のもけうとく、戸棚の鑰を帶して、暫時はいとかしこき樣ながら、去ものは疎くなりゆきて鳴たつ澤と讀し秋の夕暮にはあらねど、何となく萬物淋しく、心きいたる若い者に折ふしの痞を擦らせなど、是より心空に一向男數寄の身となりゆく事ぞかし、江戸難波都と呼ばれ昔語りとなりし、實に折節のうつりかはるを思へば、やるせなき心地ぞせる、榧かち栗齒朶ほだはらと賣りしも、程なく初鯖蓮の葉になり、よい春や若やがしやりてと、老の波よりくる顏に皺の思はん此恥しさ、壽いひまはりしもちよろり暮て、なき靈祭于蘭盆會門々の挑燈手づまきりなり、細工燈籠種々の品をつくせば、送り火の跡もかすかに町々の躍見、姿顏も夜こそといひけん、又なく跡につひて去竪なる町南へ行く、中程に大きなる躍の戯あぞべと聞ゆ、是にうかれて立寄れば、名にしあふ音頭物眞似口をつくせば人頭計にこぞる、御免といふて押入ば、痛やといふて振歸るを見れば、大みつちやのひがら目、こりやならずの宮の時鳥、今一目も見られず逃て傍へ行けば、大勢の中に髪切姿の女、兵部卿源氏油の薫ゆかしく、ものをもいはず顏に袖あてゝおしうつぶきたる其後より唐樣を書く、居合おどりの肱があたつてこらゑぬ男堪忍ならぬと、一尺八寸弓拔くかけに躍はくづれて、風に隨ふ一葉のちり〳〵になりゆきぬ。

三　松に幻や戀の未來記

皮里の一番向目玉の左助其まつりとてやさしく子持も戯姿夫と泣く小坊主前にかことといふ

娘の四つになるを抱え、寢てさへ樂し是もおなじ事ぞと、夫よりも直ぐ起に相方の男と、念佛講の掛銀がよらぬ奈良茶がこわふる蒟蒻がうすふてと、辰巳あがりの咄聲して猪熊を下りて四條を北に見捨て行けば、或家の内へ祖母と小童の走行く、こは小夜更てと立聞ば、先おやすうてめでたやと、ほぎやの聲がするに、是も人のあつまりと大笑して通れば、番太が鼾もすごく、かたへに犬のわけたつるも可笑し、是さへ浮世と猶南に行ば、晴渡りたる有明の月雲に隱れ雪に雨しきりに、跡より酒しさき風吹て一曲輪のかたより、一村の早駕籠辨慶松にたなびく、是はふしぎと見居たれば、二枚肩三枚肩の足音雲中にじた〳〵と挑提いなびかるかげに駕籠より下る人を見れば、八丈の着物に黑き羽織きて床脇に座し句のさし合を聞し面影、其儘に草といふ書を懷せり、一人の男自慢黑縮緬紅裏四ツ目結の買紋、今は此世になき人法師とふて此頃珍しき說はなしやと、されればよしのは早や身請し、後の吉野は及ばず其中間の女郎朝のつとめ夕のなさけ家の手本を學ぶといへど、今諸大盡衰へ詮方波の磯ぜこりすれば、物日とても出るは稀に正月買盆ならで其里めけるともなし、今人の心賢くやき手を知り、追ひ日をぬけて節句前より田舍へ下りの返事猶是より末御茶挽女郎多く借金の淵に入て浮みあがること非じと、行末の事を語るを聞けば、江戸のお七が戀に身をやき、都のお三が双の上に情を殘し、難波の女郎はうはきに浮名を流すとぞ。

四　夜目に知れぬ菅笠の闇

皆日頃の朝寢卯月より時鳥は皆聞はづして晝の勤もうか〳〵と、月を摺ながら見世へ出れば愛宕山代參り、今日は幾日二十四日、千日參り夕より朝迄の道こそをかしきわざなれど、入日の影ほそき頃より手松明煙草烟管はやみち忘れなと心付て、三條を西へ、はなれ野になりて南を見れば一構の里、燒印の編笠に餘情太鼓つれて、物々しき男が木平に高宮の單羽織編笠も内から着て千本筋の細道旦那强氣に行く、遠目には芥子人形の如く詠め過て、あだし野の煙人間の見る物ではないと唾して行けば、昔高の師直鹽冶が命と思ひし女房に無理な事言ひかけゝれど、笑ひ物にしけるを、大きに腹立て繩をかまへ夫婦ともに刄に死す、師直も哀にや絶けむ一寺を造り其跡を弔ひし、眞如寺を北に見捨て行けば日つゐ暮て人顏のさだかならねど十七計の女姿あかしちゞみの裾短くかゝへ帶して、かゞ笠の内どうもいはれず、母親

らしきが花色ふの帷子着たる其跡に卷物屋の手代めきたる、半ざれ縞、りうもんの黒帶さめさや長く持て川原町から木を持て來ましたが裏の漏いでようござろなど高咄して行く。

五　戀の姿揃へ

筆とれば物かゝん事を思ふとの文にかきたる萬鏡は皆うつりやすく物數奇も等しからず、年寄の面白くそなはりたるは鼻にもつくかと思へば、内儀の爲め隱居火動し美しき女房を置てよこひらたに、たけ短く大きなる尻の女あり、是をみれば兎角浮世は何も柳の馬場の魚釣針を仕込で編笠に畫めし、命限りに覗けば三十計の親父むすこに異見して何事も捨て後の世の事計願もせいで、いはれぬ罪作り朝から晩迄の仕合よふて王分が灸はとれまいにといへば、是も心のむくやうが樂介と早や、是はまだるしと大網ひかせ小鮎鮠山の如く、ある座敷に上りて鯉屋に鹽大根の昔を思ひ鞠にかゝりて餘念なきも面白からずと、楊弓かたよせ、座敷あないちかくれん坊に、小笑より大笑と、よみ作りて此醉の紛に、違駄天の姥多賀の姑など走行きて半時計に、次の間に麥繕ひしてつめかけたり、去程に大臣座敷について、二人の婦を呼寄せて曷ねけり、先一番に鼠うすぎぬ紅裏の色を表へうつして菊の折枝ちいさ紋京六の帶しどけなく、どうもいはれぬ靨顏の其ゆかしさ、此跡江戸の大臣に、小指の先を參らせ、心中人と呼れ、おも草のおもわくらしや、さりとは、此君こそ扇小歌の名を高き剛染てからの其情、たとへ命は草の露ともわざくれの、其やつこさ谷の鶯のきの花を忘れ園のと讀み續く其下にて、いはでも御名は知るゝなり、左の臂の入ぼくろ深い樣の有わけを白地には申さぬなり、此上ともにいとしがつてやらしやんせ、其跡に玉子縮緬紅裏猩々を縫の紋、としは二十五六にて、昔御所風の帶、つまはづれより物いひもしほらしや、此君は連俳に又なく歳旦の三つ物に知る人はそれと知ろしめす、殊に手跡のかくれなく、過し年の秋の末播州の大臣へ、一寸四方行成紙に慕戀といふ題にて五十首讀し細字書、其人樣のかたしけあり、どうもいはれぬぞかし、水に面にと五文字の其次に御名を推し給ふべし、四番に黒羽二重紅裏撫子の白紋わざとかまはぬ生れつき、うす假粧かね黑く、是は姿は十人なみ、すぐれて藝はなけれども、若い御樂の異名して泣六といふ君なり、其次にかゞの淺黃のうそ汚れたる中紅裏のうす水茶偖も見にくひ此内のおちなるべし、あれは六條のこさとて姿はわるくはりもなく、

大酒計ずは〳〵を金ほしがりつゝ、此年迄かはらぬものは振袖のかゝる大寄なればこそ、こうした座敷へ出る事、三年歳になるてう桃の如く、哀とおもへ山櫻鼻のひくさを御覺んぜよと腹をかゝへて笑ひけり、偖其外は誓文の娘あざ女ちゞみ姿、以上十人皆名を書いてふり闇一度にばつと取てみれば、否なあり嬉しきあり悲しきあり損なるあり徳なるあり、南無天道と目ふさいで各あて見て、互に顔を見合せ是はといふて大笑ひ、七ツの鐘に起別れゆく、うつゝなの醉心や。

六　戀の堀出す古道具店

戀の山いくのゝ道の諸分踏出して見れば、うれしさ、可笑さ、あほうさ哀れさ悲しさ虚さ、折節は誠さも稀に、皆何事も此やうなる見盡し聞盡し尋つくし濡盡して、ある夕ざれ、古道具ある見世南へ過し年都の名筆集に入たる男、伽羅の額堀出したるを思へば、あるまじき物でもなしと、茶入古筆に目を配れば、奥の方に爪音しめやかに第一第二の絃は、ぞく〳〵として立とゞまる第三第四の絃は、男思ひげに、みすの内にうとふに、やゝ見いれたれば振袖の細眉、其里にかはり、はでも少し華車めきてふとり姿なるが、尻目つかひいはれず、古きの硯箱の値段をとへば銀五枚、銅火鉢は六十匁、こちらの古藥鑪はといへば六十匁といふ、扨もこかしの濱のあだ波、齒のたつ事にも非す歸らんとすれば、婦が聲して是見知りましてござすこなたへといふ、覺束なくも入て見れば、曾てそれとも白玉の誰ぞと、言はまほしきが、能々思へば少し覺えたる顔、偖も久しきいぜい以來と戯れて上れば、煎じ茶ふつゝかに汲みて十四五の小野郎が持て來る、偖も住居の奇麗さ能くすみなしてといへば、爰こそ葬なれ、二階には少し物數奇も、是へちと御あがりなされませいといふに、いな船の否ともいはれず行て見れば、備後の裏かへし疊床に尊圓流の手して天智天皇秋の田のといふ歌書いたる此古風さ、水なき竹の筒に作り花煤おもげに、かたには古長持十人前の椀箱たくさん三味糸も切れ撥はかけて、此をかしさも捻りまはせば、娘出て跡より婦、男模様の古衣着て、暫くも娘の傍をはなれず、此美しさ、初ちらと見しは物かは、大なづみになつて肝煎なしに召抱へ、捨金うれしがるほど渡して、是からは此方のものじやといへば、日もはや暮かゝりて、とまり烏がすみが求めて向方の松に、呼ぶ聲常よりはをかしく、近き内に下屋敷の主人となして、

腰元禿、出入びくに歌舞妓と遊山に酒浸し、夫も婦をも鐘木枝で樂さして置てと、よい事計いひつごくる頃、しの〻め白く何をつくさに啼はじめけれと讀しばらく鳥に別れ起して、二日酔さや覺ぬらん。

七　付盃は百里近し

十八番に六角堂我が思ふ心の内はむつのかどと、田舍聲のつれぶし、南紀大和路札うちて、都へのぼる頃は、初の秋の半、商人折を待て見世を構へ店を飾り、是おやかたと呼かけ、馬具はいらぬか葛籠うらふといふ聲喧しく、木綿の金入を出して錦をかやれ、判木に押たる名號をば法然の御手じやの袋甲の筆じやといへば、それにして唯下直物を專と求む、或は本願寺の庭砂を戴いて瘧をおとし、誓願寺の茶湯を呑みて腹の下りのとまるも、皆正直の心から後に西國六十六所順禮同行何人と書いたる此殊勝なる中に、十八計なる女の今樣染のはでを盡して顏容風俗、都にさへかゝる姿はと目を驚す、まねて田舍人には如何なる方なればとゆかしく、連の順禮の手を引て、彼の美しき女順禮はと、ゆへを問ふに、凡そ此順禮は國所によりて變る習もおはすべけれど、我國には六十六所の數多くしてうるものを以て、座の上につく事にして、姿よく情ありても、此勤せぬ者は宜しきもの、嫁にも取らず、婚にもせねば、若きは戀のためと名利、年寄たるものは後の世の種に、年々かくは詣づ。

八　聞殘したる北國女

いとおしき子に旅衣きてみねばしれぬ世間ぞかし、情ある里、貌も姿も心も同じ心から、我に等しきひとしなく、さだめなきこそ浮世なれと、唄ひて今は昔加州の山中に湯治せし、都をばまだ明けやらぬからび聲の鳥と共に出づ、近江路も昨日にこそ越の巷打過行く、時は彌生の始、まだ消えはてぬ雪をわけ寒歸る風をいたく、ある宿にいたる、日もまだ半の過なるにはしなき聲して泊らしやれ是とまうしやれりと、所言葉の此可笑さかいやりてもゆかず、ある茶店の婆々にわけをとへば、此所に名高きしやうには、幾世花月玉川萬作など、指折てかたるを聞けば、都にての人を所からとてかくは呼ぶとかや、難波のあし伊勢の濱荻の類と合點して猶先の道をとへば、まごやくし湯尾峠とて、難所から舌つづみうつて行けば、又一

つの宿上手つふてはづせば、あらけなく破れたるふすま一枚跡先かまはず、明日は夜に御立かと計いひ捨て行く、其隣の方に調子たかく手拍子忙しく唄ふ聲、都にはよふ變りて可笑し、過るに夜もいねず、朝立にし剪刀毛抜の名所金津とかや、人の情もおなじやうなるを詠め越て、其又の日は加賀路大正寺人の心もいぶり橋といふを過ぎて、脇道にかゝり山中に着きぬ、二まはりの程に身の勞も癒へぬ、是より北國のさかい金澤を見ばやと、本道に出で千代のためしの小松につきぬ、是なん加賀絹の在所にて家毎の女糸機の業、一人としてにくきはなく、越前男加賀女とかや、去人　いひし思ひ合せて、手取川かしわの松任野の市を過ぎて、金澤にたる時しもこそあれ、明日は衣がへ、初の日此所の神わざ上下足を空になして、淺野川觀音堂にまふず、誠や都にて聞し、白鮒黒鮒のぶたひ躍も此所ならんと詠め行くに、朔日二日は神の御能とて、老若男女袖を列ぬる事上方にもおさ〳〵おとらぬ事と見盡して、子安堂にやすらう頃、いはれぬ美しき女姿三四人、袖かほりゆかしく風儀京はづかし、吹風にひるがへる紅裏さながらにくからず、跡より女の童の風呂敷包持たるもよしありげに詠め、過て、去道行く若人に此美しき姿はといへば、是は此所に名高き人、いつの頃にかふかぢ都女郎雛波女にもすぐれたるとこそ申せとかたる。

九　情のかくれ庵

福者二代なし、寶さかりて入物は又さかりて出づ、親は一生くるしみて面白い目にも逢はず、口に厚味を知らず肌には布子木綿帶、足袋もつま切の可笑きに、利勘とかねまふけに心をつめて銀高六百貫目うれしやと思ふ内に足元より日が暮れてとい所へ參る、其跡獨息子が丸取に五つ六つの頃は、はや分限なり過たる衣服、つき〳〵の男女にもてはやされて、算盤をはじくやら、天秤はどうかけるやら、只酒と色とにあたら月日を送るのみか、後にはなまなかの戀しりとなりて、腹の内は、びいどろの如くみえすき、内證迄をさがし見れば、皆哀なると金の入る事計、日頃の藏の内はからりちんの手拍子此時に至てあはず、暫し一門の情手代のめぐみに朝夕を送れば、また昔の袖萬更切れ過て諸事まだるくよいわ侘と、なまゝ賢者ぶりて一錢の貯もせねば新わんかへといふべく是よりこそ頼む蔭とて立寄る大木もなく、墨染の衣あじろ笠珠數つまぐりても、心は元のひやうきん山醉狂庵といふ柴の戸結びて、

我計すいせられしと夕暮のゆづりのかねは殘るともなし

とよみつゞけ、思へば伊勢へ月參も古し、鹿島のとふれもをかしからずと、小きたゝき鉦首にかけて、夜念佛申す音聲は殊勝に、ある町を南へ行けば、去家よりかはゆらしき聲して、見やりましよといふを月影にさしのぞけば、腰元の美しき白き手をさしのべたるを、じつとしめれば、のふ徒の坊主や、久三ゐやらぬかといふ音に棒ひつさげてはしり出る、鐘木と鉦を片手にかゝへ、其所を逃のびゆけば、夜も漸う更て番太がいびき猫のけんくわ、あはう鳥が月を忘れて、かあ〳〵心すごく、向よりあやしの姿あゆみくる、人の軒にうづくまり見れば美しき女姿、髪をさばきて白き浴衣高足駄、頭に點す火かげいふ計りなくおそろしき、是なん聞及びたる牛の時參りならんさめ〴〵歎くを見て、此坊主、して御方はいかなる事にかかる姿ととはれて、恥かしながらかう〳〵の御方樣に、又なく思ひそめおもへど、很方へ傳へんと言ひし人、過し頃はかなくなりて、去人の申せしかゝる姿して七日北野の天神樣へ詣でよと、此嬉しさも、其夜半の夢もむすばず、是より詣で初て、今宵七日にみつる夜、法師樣にまみえまいらせて此願は空しくも浮世はうものと御緣日を恨みしも、逢ひにきたのゝ庵こそ、後に語りて笑ひ草。

十　妻戀ふ音の鹿に結かゝ

玉ほこの道草鞋より竹の杖にのりかけをねふりて越の國の去商人、荷物は何時もさきにつけて、國むきの買物それ〴〵に、朝から晩まで何處にても身過ほど世に悲しき物はなし、金銀親より貴く、主君より猶大切にすべしと新分限者經に書たる、去事に合點はすれど老たるも若きも今も昔も末の世も同じ事ぞと、うたゝねの二階座敷に故鄕思ひて、暫し枕すれば、折から初雁の聲最懷かしく、便あらばと五文字ひねりまはし、打つぶやく頃、御淋しうござんすかと、菓子盆持て來るを見れば、召使のさつといふ、かくつたなき內にも大和歌の道を心がけ琴三味もつたなからず染物のかのこども注文に添へて誂ふれば、始ての御出と盃もちて出で、銚子は自ら取て打笑みたるにうつゝぬかれて算盤も手にうとく、萬身にそまねば便もとめて又の歳の彌生には必ずと契り、白きふくさの千鳥かきたるに、

たび衣立行く波の友千鳥鳴音もよはる今日の暮かな

かたみの品とりかはし血の涙を流しながら別れ下る。

好色五人女

くけ帶よりあらはるゝ文

やれ今の事ぢやは、外科よ氣付よと立ち騷ぐ程に、何事ぞといへば皆川自害と皆々歎きぬ、まだどうぞといふうちに脈があるとや、さても是非無き世や、十日あまり此事を隱せば、清十郎死に後れて、つれなき人の命、母人の申越されし一言に、惜からぬ身をながらへ、永興院に忍び出で、同國姫路に親好あれば竊に立ち退き、爰に尋ね行きしに昔を思ひ出でて惡くは當らず、日數經りける中に、但馬屋九右衛門といへるかたに、見世を任する手代を尋ねられしに、後々はよろしき事にもと賴みにせし宿の肝煎られて、初めて奉公の身とは成りける、人たるものゝ育ち卑しからず、こゝろざし優しく、勝れて賢こく、人の氣に入るべき風俗なり、殊に女の好ける男振、いつとなく身を捨て、戀に倦果て、明暮律義にかまへ勤めけるほ

どに、亭主も萬事を任せ、金銀の溜まるを嬉しく、清十郎を末々頼みにせしに、九右衛門妹におなつといへるありける、其年十六迄男の色好いて、いまに定まる緣もなし、されば此女、田舍にはいかにして、都にも素人女には見たる事なし、此以前島原に揚羽の蝶の紋所に付け太夫ありしが、それに見增す程なる美形と京の人の語りける、一つ〳〵いふ迄もなし、是になぞらへて思ふべし、情の程もさぞあるべし、或時清十郎綾紋の不斷帶、中居のかめといへる女に頼みて、此の幅の廣きをうたてし、よき程に紵け直してと頼みしに、そこ〳〵に解きければ、昔の文名殘ありて取り亂し讀み續けゝるに、紙數十四五枚ありしに、宛名皆清さまとありてうら書は違ひて、花鳥、うきふね、小太夫、明石、卯の葉、筑前、千壽、長州、市の丞、こよし、松山、小左衞門、出羽、みよし、皆々室君の名ぞかし、いづれを見ても皆女郎のかたより深くなづみて、氣を運び、命をとられ、勤のつやらしき事は無くて、誠を籠めし筆の歩み、是なれば傾域とても惡からぬものぞかし、又此男の身にしては、浮世狂ひせし甲斐こそあれ、さて內證に仕こなしよき事もありや、女のあまねく思ひ付くこそ床しけれと、いつとなくおなつ清十郎に思ひつき、それより明暮心を盡し、魂身のうちを離れ、清十郎が懷に入つて、我は現が物いふ如く、春の花を圍となし、秋の月を畫となし、雪の曙も白くは見えず、夕されの時鳥も耳に入らず、盆も正月も辨へず、後は我を覺えずして、羞かしさは目よりあらはれ、いたづらは言葉に知れ、世に無き事にもあらねば、此首尾何とぞと、次々の女も哀にいたましく思ふうちにも、銘々に清十郎を戀ひ侘び、お物師は針にて血を搾り、心の程を書き遣はしける、中居は人頼みして男の手にて文を調へ袂へ投込み、腰元は運ばでも苦しからざりき茶を店頭に運び、抱姥は若子さまに事よせて近寄り、お子を清十郎に抱かせ、膝へ小便しかけさせ、こなたも追付肖かり給へ、私も美しき子を產んでから、お家へ姥に出ました、其男は役に立たずとて、今は肥後の熊本に行きて奉公せしとや、世帶破る時分暇の狀は取つて置く、男無しぢやに、本におれは稟賦こそ横太り、口小く髮も少しは縮みしにと、したゝるき獨言いふこそをかしけれ、下女は又それ〳〵に、金杓子片手に目黑のぜんば煮を盛る時、骨かしらを選りて、清十郎にと氣を付くるもうたてし、彼方此方の心入れ、清十郎身にしては嬉し悲しく、內かたの勤は外になりて、諸分の返事に際無く、後には是もうたてしと、夢に目を明く風情なるに、猶おなつ便を求めて數々の通はせ文、清十郎も

もや〳〵となりて、御心には從ひながら、人目忙しき宿なれば、甘い事は成り難く、嗔恚を互に燃し、兩方戀にせめられ、次第痩にあたら姿の替り行く月日のうちこそ是非もなく、やう〳〵聲を聞き合ひけるを樂みに、命は物種、此戀草のいつぞは靡き合へる事もと、心の通ひ路に兄嫁の關を居ゑ、毎夜の事を油斷無く、中戸をさし、火用心めしあはせの車の音、雷よりは恐ろし。

二　戀に泣輪の井戸替

身はかぎりあり、戀はつきせず、無常は我が手細工の棺桶に覺え、世をわたる業とて、錐鋸のせはしく、鉋屑の煙みじかく、難波のあしの屋をかりて、天滿といふ所から住みなす男あり、女も同じ片里の者にはすぐれて、耳の根白く足も土氣はなれて、十四の大晦日に親里の御年貢三分一銀にさしつまりて、棟たかき町家に腰もとづかへして、月日をかさねしに、自然と才覺に生れつき、御隱居への心づかひ、奥さまの氣を取る事、それよりすゑ〳〵の人に迄あしからず思はれ、其後は内藏の出し入をまかされ、此家におせんといふ女無うてはと、諸人に思ひつかれしは、其身かしこきゆゑぞかし、されども情の道をわきまへず、一生枕一つにてあたら夜を明しぬ、かりそめにたはふれ、袖つま引くにも、遠慮なく聲高にして、其男無首尾をかなしみ、後は此女に物いふ人もなかりき、是をぞしれど、人たる人の小女はかくありたき物なり、折ふしは秋のはじめの七日、織女に貸小袖とて、いまだ仕立てゝより一度も召しもせぬを、色々七つ牝鶏羽にかさね、梶の葉に有りふれたる歌をあそばし、祭り給へば、下々もそれ〳〵に唐瓜枝柿かざる事のをかし、横町裏借屋迄竈役にかゝつて、お家主殿の井戸替、けふ殊に珍らし、濁水大かたかすりて、眞砂のあがるにまじり、日外見えぬとて人うたがひし薄双も出、昆布に針さしたるもあらはれしが、是は何事にか致しけるぞや、なほさがし見るに、駒引錢、目鼻なしの裸人形、くだり手のかたし目貫、つぎ〳〵の涎掛、さま〳〵の物こそあがれ、蓋なしの外井戸、心もとなき事なり、次第に涌水ちかく根輪の時、むかしの合釘はなれてつぶれければ、彼樽屋を呼寄せて、輪竹の新しくなしぬ、爰に流れ行くさゞれ水をせきとめて、みづはくむ姿の老女、生ける蟲をあいしけるを、樽屋何ぞと尋ねしに、是は唯今汲上げし井守といへるものなり、そなたは知らずや、此蟲竹の筒に籠めて煙

となし、戀ふる人の黑髮にふりかくれば、あなたより思付く事ぞと、さも有のまゝに語りぬ、此女もとは夫婦池のこさんとて子おろしなりしが、此身すぎ世にあらためられて、今は其のむごき事をやめて、素麵の碓など引いて一日暮しの命のうちに、寺町の入相の鐘も耳にうとく、淺まし、いやしく身に覺えての因果、なほ行末の心ながくおそろしき事を咄しけるに、それは一つも聞きも入れずして、井守を燒きて戀のたよりになる事をふかく問ふに、おのづと哀さもまさりて、人にはもらさじ、其思ひ人はいかなる御方樣ぞといへば、樽屋我をわすれて、こがるゝ人は忘れず、口の有るにまかせて、樽の底を叩きてかたりしは、其君遠きにあらず、内かたのお腰元、おせんが〳〵百度の文のかへしもなきと涙に語れば、彼女うなづきて、それは井守もいらず、我堀川の橋かけて、此戀手に入れて、間もなく思ひを晴らさせんと、かりそめに請合ひければ、樽屋おどろき、時分ながらの世の中、金銀の入る事ならば、思ひながら成りがたし、有らば何か惜かるべき、正月に木綿着物、染樣は好み次第、盆に奈良ざらしの中位なるを一つ、内證はこんな事で埒の明くやうにとたのめば、それは慾にひかるゝ戀ぞかし、我が賴まるゝは其分にはあらず、思ひつかする仕掛に大事有り、此年月數千人の肝煎、つひに分のあしきといふ事なし、菊の節句より前に逢はせ申べしといへば、樽屋いとゞかし燃ゆる胸に燒付け、かゝ樣一代の茶の薪は我等の續けまゐらすべしと、人は長生のしれぬうき世に、戀路とて大ぶんの事をうけあふはをかし。

三　踊はくづれ桶夜更けて化物

天滿に七つの化物有り、大鏡寺の前の傘火、神明の手なし兒、曾根崎の逆女、十一丁目のくびしめ繩、川崎の泣坊主、池田町のわらひ猫、うぐひす塚の燃唐臼、是皆年をかさねし狐狸の業ぞかし、世におそろしきは人間、ばけて命を取れり、心はおのづからの闇なれや、七月廿八日の夜更けて、軒端を照せし燈籠も影なく、けふあすばかりに名殘に聲をからしぬる馬鹿踊も、ひとつ〳〵已が家々に入りて、四辻の犬さへ夢を見る時、彼樽屋に賴まれしいたづら嬶、母屋門口のいまだ明掛けてありしを見合ひ、戸ざしせはしく内にかけ込み、廣敷に臥しまろび、やれ〳〵すさまじや、水が飲みたいといふ聲絶えて、かぎりの樣に見えしが、されども息のかよふを賴みにして呼活けけるに、何の仔細もなく正氣になりぬ、内儀嬶居の

かみさまをはじめて、何事か目に見えてかくは恐れけるぞ、我事年寄のいはれざる夜ありきながら、宵より寢ても目のあはぬあまりに、踊見にまゐりしほどに、鍋島殿屋敷のまへに、京の音頭道念仁共衛が口うつし、山くどき、松づくししばらく耳に飽かず、あまたの男の中を押分け、團扇かざして眺めけるに、闇にても人はかしこく、老いたる姿をかつがず白き帷子に黑き帶のむすびめを、當風にあぢはやれども、かりそめに我尻つめる人もなく、女は若きうちの物ぞと、すこしは昔のおもはれ、口惜くて歸るに、此門ちかくなりて、年の頃二十四五の美男、我にとりつき、戀にせめられ、今思死、ひと日二日を浮世のかぎり、腰元のおせんつれなし、此執心外へは行くまじ、此家内を七日が内に一人ものこさせ執殺さんといふ聲の下より、鼻高く貌赤く眼光り、住吉の御祓の先へ渡る形のごとく、それに魂とられ、只物すごく内かたへ駈け入るのよし語れば、いづれもおどろく中に、隱居泪を流し給ひ、戀忍ぶ事世になきならひにはあらず、せんも緣付ごろなれば、其男身すぎをわきまへ、博奕後家ぐるひもせず、たまかならば取らすべきに、いかなる者とも知れず、其男ふびんやと、しばし物いふ人もなし、此嬶が仕懸、さても〳〵戀にうとからず、夜半なりておの〳〵に手をひかれ、小家にもどり、此上の首尾をたくむうちに、東窓よりあかりさし、鄰に火打石の音、赤子泣出し、紙帳もりて夜もすがら喰はれし蚊を恨みて追拂ひ、二布の蚤とる片手に佛棚よりはした錢を取出し、つまみ菜買ふなど、物のせはしき世渡りの中にも、夫婦のかたらひを樂み、南枕に寢筵しどけなくなりしは、過ぎつる夜きのえ子をもかまはず何事をかし侍る、やう〳〵朝日かゞやき、秋の風身にはしまざる程吹きしに、かゝは鉢卷して枕おもげにもてなし、岡島道齋といへるを賴み、藥代の當所もなく、手づから藥鑵にて頭煎じのあがる時、おせん裏道より見舞來て、お氣合はいかゞとやさしく尋ね、左の袂より奈良漬瓜を片舟、蓮の葉に包みて、たばね薪の上に置き、醬油のたまりをまゐらばと云捨てゝ返るを、かゝ引留めて、我ははやそなたゆゑに思ひをよらざる命を捨つるなり、みづから娘とても持たざれば、なき跡にて弔ひても給はれとふるき浮桶の底より紅の織紐付きし紫の革たび一足、つぎ〳〵の珠數袋、此中にさられた時の暇の狀ありしを、是は取て捨て、此二色をおせんに形見とて渡せば、女心のはかなく、是を誠に泣出し、我に心有る人、さもあらば何とて其道知れるこなた樣を賴みたまぬぞ、おもはく知らせ給はゞ、それをいたづらにはなさじと云ふ、嬶よ

き折ふしと、はじめを語り、今は何をかかくすべき、かねゞ〳〵我をたのまれし其心ざしの深き事、哀とも不便とも又いふに足らず、此を男見捨て給はば、みづからが執着とても脇へはゆかじと、年比の口上手にて言續けゝれば、おせんも自然となびき心になりて、もだ〳〵と上氣して、いつにても其の御方にあはせ給へと、いふにうれしく、約束をかため、一段の出合所を分別せしと囁きて、八月十一日立に抜參を、此道すがら契をこめ、行末迄互にいとしさかはゆさの枕物語、しみゞ〳〵と憎かるまじき、而も男ぶりぢやと、おもひつくやうに申せば、おせんも逢はぬさきより其男をこがれ、物も書きやりますか、あたまは後さがりで御座るか、職人ならば腰はかゞみませぬか、爰出た日は守口か牧方に畫から宿りまして、ふとんをかりて早う寢ましよと、取まぜて談合するうちに、中居の久米が聲して、おせんどのお呼びなされますといへば、いよ〳〵十一日の事と申殘して歸りける。

四　小判しらぬ休茶屋

丹波越の身となりて、道なき方の草分衣、茂右衞門お三の手を引きて、やう〳〵峰高くのぼりて、跡おそろしく、おもへば、生きながら死んだ分になるこそ、心からうたてけれ、なほ行さき柴人の足形も見えず、踏迷ふ身の哀もと、女のはかなくたどりかねて、此の苦しさ、息も限りと見えて、貌色變りて悲しく、岩もる雫を木の葉にそゝぎ、さまざま養生すれども、次第にたより少く、脈も沈みて今に極まりける、藥にすべき物とてもなく、命の終るを待居る時、耳ちかく寄せて、今すこし先へ行けばしるべある里ちかく、さもあらば此憂きを忘れて、おもひのまゝに枕定めて語らんものとなげゝば、此事おさん耳に通じ、うれしや命にかへての男ぢやものと、氣を取直しける、さては魂に戀慕入替り、外なき其身いたましく、又負うて行く程に、わづかなる里の垣根に着きけり、爰なん京への街道といへり、馬も行違ふ程の岨に道もありける、藁葺ける軒に杉折掛けて、上々諸白あり、餅も幾日になりぬ、ほこりをかづきて白き色なし、片見世に茶筌、土人形、かぶり夫鼓、少しは目馴れし都めきて、是に力を得、しばし休みて、此うれしさにあるじの老人に金子一兩とらせけるに、猫に傘見せたるごとくいやな顔つきして、茶の錢置き給へといふ、さても京より此處十五里はなかりしに、小判見しらぬ里もあるよとをかしくなりぬ、それより柏原といふ所に行きて、ひさし

く音信絶えて、無事をもしらぬ姨のもとへ尋入りて昔を語れば、流石よしみとてむごからず、親の茂介殿の事のみ言出して、泪片手に夜すがら咄し、明ればうるはしき女厲に不思議を立ていかなる御方ぞとたづね給ふに、是さしあたりての迷惑、此事までは分別もせずして、是はわたくしの妹なるが、年久しく御所方にみやづかへせしが、心地なやみて都の物がきた住ひを嫌ひ、物しづかなるかゝる山家に似合の縁もがな、身を引下げて里の仕業の庭働き望にて伴ひまかりける、敷銀も二百兩ばかり貯有りと、何心もなく當座さばきに語りける、何國もあれ欲の世中なれば、此姨是におもひつき、それは幸の事こそあれ、我が一子いまだ定まる妻とてもなし、そなたものかぬ中なれば、是に、と申かけられ、さても氣毒まさりける、おさんしのびて泪を流し、此の行末いかゞあるべきと物おもふ處へ、彼の男夜更けてかへり し、其樣すさまじや、すぐれてせい高く、頭は唐獅子のごとくちゞみあがりて、髭は熊にまぎれて、眼赤筋立ちて光つよく、足手共まゝ松木にひとしく、身には割織を着て、藤繩の組帶して、鐵砲に切火繩、かますに兎狸を取入れ、是を渡世すと見えける、其名をきけば岩飛の是太郎とて、此里にかくれもなき惡人、都衆と緣組の事を母親語りければ、むくつけるなる男もこれをよろこび、善はいそぎ、今宵の内にと、鬢鏡取出して面を見るこそやさしけれ、母は杯の用意とて、鹽目黑に口の虧けたる酒德利を取まはし、筵屏風にて二枚敷ほど闕ひて、木枕二つ、薄緣二枚、横縞のふとの一つ、火鉢に割松もやして、此夕一しほに勇みける、おさん悲しさ、茂右衞門迷惑、かりそめの事を申出して、是ぞ因果とおもひ定め、此口惜さ、又も憂きめに近江の海にて死ぬべき命をながらへしとても、天我をのがさずと、脇差取つて立つをおさん押し留めて、さりとは短し、さま〳〵分別こそあれ、夜明けて髮を立のくべし、萬事は我にまかせ給へと、氣をしづめて其夜は心よく祝言の杯取かはし、我は世の人の嫌ひ給ふひのえ午なると語れば、是太郎聞きて、たとへばひのえ猫にてもひのえ狼にても其にはかまはず、それがしは好みて青蜥蜴を喰うてさへ死なぬ命、今年廿八迄蟲ばら一度おこらず、茂右衞門殿も是にはあやかり給へ、女房共は上方そだちにして、物にやはらかなるが氣には入らねども、親類のふしやうなりと、膝枕してゆたかに臥しける、かなしき中にもをかしくなつて寢入るを待かね、又髮を立のき、なほ奥丹波に身をかくしける、やう〳〵日數ふりて丹後路に入りて、切戸の文珠堂に通夜してまどろみしに、夜半とおもふ時あらたに靈夢あり、

汝等世になきいたづらして、何國までか其難のがれがたし、されども返らぬむかしなり、向後浮世の姿をやめて、惜きとおもふ黒髪を切り、出家となり、二人別れ別れに住みて、悪心去つて菩提の道に入らば、人も命をたすくべしと、ありがたき夢心に、すゑ〳〵は何になりうともかまはしやるな、こちや是が好きにて身に替へての脇心、文珠殿は衆道ばかりの御合點、女道は曾てしろしめさるまじといふかと思へば、いやな夢覺めて橋立の松の風、吹けば塵の世ぢやものとなほ〳〵やむ事のなかりし。

五　雪の夜の情宿

沸斷のならぬ世の中に、殊更見せまじき物は、道中の肌付金、酒の醉に脇差、娘のきはに捨切主、と御寺を立歸りて、其後はきびしく改めて戀をさきける、され共下女が情にして、文は數通はせて心の程は互にしらせける、ある夕、板橋ちかき里の子と見えて松露土筆を手籠に入れて、世をわたる業とて賣り來れり、お七親のかたに買とめける、其暮は春ながら雪ふりやまずして、里まで歸る事をなげきぬ、亭主あはれみて、何ごゝろもなく、つい庭の片隅にありて、夜明けなばかへれ、といはれしをうれしく、牛蒡大根の筵かたよせ、竹の小笠に面をかくし、腰蓑身にまとひ、一夜をしのぎける、嵐枕にかよひ、土間冷えあがりけるにぞ、大かたは命もあやふかりき、次第に息もきれ眼もくらみし時、お七聲して、先程の里の子あはれや、せめて湯成共飲ませよ、と有しに、飯焚の梅が下の茶碗に汲みて久七にさし出しけれは、男請取りて是をあたへける、忝き御心入、といへば、暗まぎれに前髪をなぶりで、汝も江戸に置いたらば急者の有る時分ぢやが痛はしや、といふ、いかにも淺ましく育ちまして、田を鋤く馬の口を取り、眞柴苅るより外の事を存じませぬ、といへば、足をいらひて、奇特に戦を切さぬよ、是なら口をすこし、と口をよせけるに、此悲しさ切なさ、齒を喰しめて泪こぼしけるに、久七分別して、いや〳〵根深にんにく喰ひし口人もしれず、とやめける事のうれし、其後寢時になりて、下々はうちつけ階子を登り、二階にともし火影うすく、あるじは戸棚の錠前に心を付くれば、内儀は火の用心能々云付て、なほ娘に氣遣をせられ、中戸さしかためられしは、繼路の綱きれてうたてし、八つの鐘の鳴る時、表の戸叩いて、女と男の聲して、申姨様只今御よろこびあそばしましたが、しかも若子様にて旦那さまの御機嫌と頻

によばはり、家内起きさわぎて、それはうれしや、と寢所より直に夫婦連れ立ち、出さまに掠毒漢甘草を取り持ちて、かたし〳〵の草履をはき、お七に門の戸をしめさせ、急ぐ心ばかりにゆかれし、お七戸をしめて歸りさまに、暮方里の子思ひやりて、下女に其手燭もてとて面影をみしに、豐に臥して、いとゞ哀の增りける、心よくありしを、其まゝおかせ給へ、と下女のいへるを聞かぬ顏して近くよれば、肌につけし兵部卿のかをり何とやらゆかしくて、笠を取除け見れば、やごとなき脇顏のしめやかに、鬢もそゝけざりしを、しばし見とれて、その人の年頃に思ひいだして袖に手をさし入れて見るに、淺黃はぶたへの下着、是はと心をとめしに吉三郎殿なり、人の聞くをもかまはず、こりや何としてかゝる御すがたぞとしがみ付いてなげきぬ、吉三郎もおもてみあはせ、物得いはざる事しばらくありて、我かくすがたを變へてせめては君をかりそめに見る事願ひ、宵の憂き思ひ、おぼしめしやられよ、とはじめよりの事共をつど〳〵に語りければ、兎角は是へ御入ありて其御うらみも聞きまゐらせん、と手を引まゐらすれども、宵よりの身のいたみ、是非もなく哀なり、やう〳〵下女と手をくみて車にかきのせて、常の寢間に入れまゐらせて手のつゞくほどはさすりて幾藥をあたへ、すこし笑ひ顏うれしく杯事して、今宵は心にある程をかたりつくしなんとよろこぶ處へ親父歸らせ給ふにぞ、かさねて憂目にあひぬ、衣桁のかげに隱してさらぬ有さまにていよ〳〵おはつ樣は親子とも御まめか、といへば、親父よろこびて、ひとりの姪なればとやかく氣遣せしに、重荷おろした、と機嫌よく、產着の模樣詮索、萬祝ひて鶴龜松竹の摺箔は、と申されけるに、おそからぬ御事、明日御心靜かに、と下女も口々に申せば、いや〳〵かやうの事はやきこそよけれ、と木枕鼻紙を疊みかけて雛形を切らるゝこそうたてけれ、やう〳〵其程過ぎて色々たらしてねせまして、語りたき事ながら、ふすま障子ひとへなれば、洩れ行く事おそろしく、灯の影に硯紙置きて、心の程を互に書いて見せたり見たり、是を思へば鴛鴦のふすまとやいふべし、夜もすがらかきくどきて明がたの別れ、又もなき戀があまりて、さりとては物憂き世や。

六　世に見をさめの櫻

それとはいはずに、明暮女ごゝろの墓なや、逢ふべきたよりもなければ、ある日風のはげし

き夕暮に、日外寺へ逃げ行世間のさわぎを思ひ出して、又さもあらば吉三郎殿にあひ見る事の種ともなりなんと、よしなき出來ごゝろにして惡事を思ひ立つぞ因果なれ、すこしの煙立さわぎて、人々不思議と心懸け見しに、お七が面影をあらはしける、これを尋ねしに、つゝまず有りし通を語りけるに、世の哀とぞなりにける、けふは神田のくづれ橋に恥をさらし、又は四谷、芝、淺草、日本橋に人こぞりて、見るに惜まぬはなし、是を思ふにかりにも人は惡事をせまじき物なり、天是をゆるし給はぬなり、此女思ひこみし事なれば身のやつるゝ事なくて、毎日ありし昔のごとく黑髪を結はせて、うるはしき風情、惜や十七の春の花も散々は、ほとゝぎすまでも惣鳴に、卯月のはじめつかた、最期ぞとすゝめけるに、心中更にたがはず、夢幻の中ぞと一念に佛國を願ひける心ざし、去迎は痛はしく、手向花たゝして咲おくれし櫻を一本持たせけるに、打詠めて、世の哀春ふく風に名を殘しおくれ櫻のけふ散りし身は、と吟じけるを聞く人一しほにいたはしく、其姿を見おくりけるに、限ある命のうち、入相の鐘つく比、品かはりたる道芝の邊にして、其身はうき煙となりぬ、人皆いづれの道にも煙はのがれず、殊に不便は是にぞありける、それはきのふ、今朝みれば塵も灰もなくて、鈴の森松風ばかり殘りて旅人も聞き傳へて只は通らず、回向して其跡を弔ひける、されば其日の小袖郡内縞のきれぎれ迄も、世の人拾ひもとめてするゝ〳〵の物語の種とぞ思ひける、近付ならぬ人さへ忌日忌日に樒折立て此女をとひけるに、其契を込めし若衆は、いかにして最期を尋ねに問はざる事の不思議と、諸人沙汰し侍る、折節吉三郎は、此女にこゝちなやみて前後を辨へず、憂世の限と見えて便すくなく、現のごとくなれば、人々の心得にて、此事をしらせなばよもや命も有るべきか、つねゝ〳〵申せし言葉のすゑ、身の取置まぐして最期の程を待居しに、おもへば人の命や、と首尾よしなに申なして、けふ明日の内には其人爰にましまして思ふまゝなる御見などいひけるにぞ、一しほ心を取直し、あたへる藥を外になして、君よ戀し、其人まだかと、そゞろ事いふほどこそあれ、しらずやけふは早三十五日と、吉三郎には隱して其女弔ひける、それより四十九日の餅盛など、お七親類御寺に參りて、せめて其戀人を見せ給へ、と歎きぬ、樣子を語りて又も哀を見給ふなれば、よし〳〵其通にと道理を責めければ、流石人たる人なれば此事聞ながらよもやながらへ給ふまじ、深くつゝみて、病氣もつゝがなき身、折節お七が申殘せし事共をも語りなぐさめて、我子の形見にそれよりとも思ひは

らしにと、卒塔婆書たてゝ、手向の水も泪にかわかぬ石こそなき人の姿かと跡に殘りし親の身、無常の習とて是逆の世や。

七　もろきは命の鳥さし

里は冬がまへして萩柴折添へて、ふらぬさきより雪垣など、北窓をふさぎ、衣うつ音のやかましく、野はづれに行けば、紅林にねぐらあらそふ小鳥を見掛、其年のほど十五六か、七まではゆかじ、水色の袷帷子に、むらさきの中幅帶、金鍔の一ツ脇差、髪は茶筌に取亂し、そのゆたけさ女のごとし。さし竿の中ほどを取まはして、色鳥をねらひ給ひし事百たびなれ共、一羽もとまらざりしを、ほいなき有樣、しばし見とれて、さても世にかゝる美童も有ものぞ、其年の比は過ぎにし八十郎に同じ、うるはしき所はそれに優りけるよ、と後世を取りはづし、暮がたまで詠めつくして其かたちかく立寄りて、それがしは法師ながら鳥さして捕る事を得たり、其竿こなたへ、と片肌ぬぎかけて、諸の鳥共、此兒人のお手にかゝりて命を捨つるが何とて惜きぞ、さても〳〵衆道の譯しらずめ、と時の間に數かぎりもなく取りまねらせければ、此若衆他なく嬉しく、いかなる御出家ぞと問はせけるほどに、我を忘れてはじめを語りければ、此人もだ〳〵と泪ぐみて、それゆゑの御修行一しほ殊勝さ思ひやられけり、是非に今宵は我笹葺に一夜と留められしに、なれ〳〵しくも伴ひ行くに、一かまへの森のうちに、きれいなる殿作りありて、馬のいなゝく音、武具かざらせし廣間をすぎて、緣より梯のはるかに熊笹むら〳〵として、其奥に庭籠ありて、白鵬唐鳩金鶏、さま〴〵の聲なして、すこし左のかたに中二階四方を見晴し、書物棚しをらく、爰は不斷の學問所とて是に座をなせば、召使のそれぞれをめされ、此各僧は我物讀のお師匠なり、よく〳〵もてなせ、とてかず〳〵の御事ありて、夜に入ればしめやかに語り慰み、いつとなく契りて千夜とも心をつくしぬ、明くれば別ををしみあひ、高野のおぼしめし立、かならず下向の折節はまたも、と約束深くして、互に泪くらべて人しれず其屋形を立のき、里人にたづねけるに、あれは此所の御代官、としか〳〵の事をかたりぬ、さてはとお情うれしく都にのぼるもはかどらず、過にし八十郎を思ひ出し、又彼若衆の御事のみ、佛の道は外になしてやう〳〵弘法の御山にまゐりて、南谷の宿房に一日ありて、奥の院にも參詣せず、又國許にかへり、約束せし人の御方に行けば、

日外見し御姿かはらず出むかひ給ひ、一間なる所に入りて、此程のつもり事を語り、旅草臥の夢むすびけるに、夜も明けて、彼御人の父、此法師をあやしくとがめ給ひ、起されておどろき、源五兵衛落髪のはじめ、又このたびの事、有のまゝ語れば、あるじ横手うつて、さても〳〵不思議や、我子ながら姿自慢せしに、浮世とてはかなく、此廿日あまりに成し後に脆くも相果てしが、其きは迄彼御法師と〳〵と申せしを、おかされての事とおもひしに、偖はそなたの御事か、とくれ〳〵なげき給ひける、なほ命惜からず、此座をさらず身を捨つべきとおもひしが、さりては死なれぬもの、人の命にぞ有ける、間もなく若衆ふたり迄のうきめを見て、いまだ世にある事の心ながら口惜、さるほどに此二人が、我にかゝるうき事しらせける、大かたならぬ因果とや是を申べし、悲し。

本朝二十不孝

序

雪中の笋八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生船にあり、世に天性の外祈らずとも先々の家業をなし、祿を以て萬物を調へ、教を盡せる人常なり、此の常の人稀にして惡人多し、生きとし生ける輩、孝なる道を知らずんば天の咎を遁るべからず、其の例は諸國見聞するに、不孝の輩眼前に其の罪を顯す、是を梓にちりばめ、孝にすゝむる一助ならんかし。

貞享三稔孟陬日

本朝二十不孝

鶴永松壽

卷一

一　今の都も世は借物

京に惡所銀の借次屋

世に身過は樣々なり、今の都を清水の西門より詠廻せば、立ちつゞきたる軒ばの內藏の氣色、朝日にうつりて夏ながら雪の曙かと思はれ、豊なる御代の例、偖に音無く、千年鳥は雲に遊びし、かぎりもなく打闘き九萬八千軒といへる家數は、信長時代の事なり、今は土手の竹藪も洛中になりぬ、それ〴〵の家職して朝夕の煙立てける、千軒あれば友過といへるに、爰にて何をしたればとて渡り兼ぬべきか、五條の橋辨慶が七つ道具の紙幟を年中書ける人も有り、又子を思ふ夜の道、手を打振つて當所なしに疳の虫を指先から鑿出しますと云ふも有り、鉋を持ちて眞那板しらげに廻る、大小に限らず三文宛なり、念佛講の借盛物三具に敲鉦を添へて一夜を十二文、產屋の倚懸臺大枕まで揃へ七夜の內を七分、餅搗比の井樓畫は三分、夜は二分、藥鍋一七日十文、大溝の掃除熊手竹箒塵籠まで持來り一間を一文づつ、才鋏かたげて立木によらず作るを五分、繼木一枝を一分づつ、一時大工六分、行水の湯沸して一荷を六文、夏中の借簾、世智かしこき人の心見えすきて始末を所帶の大事といへり、徒居なく手足動せば人並に世は渡るべし、爰に新町通四條下る所に、格子作の奇麗なる門口に、丸に三つ蔦の簾暖かけて、五人口を親にかゝりのやうに緩りと暮しぬ、知らぬ人は醫者かと思ふべし、長崎屋傳九郎とて京中の惡所金を借出す男なり、かたり半分とも云ふに、是は元日から人のよる年を、若うならしやりましたと嘘をつき初めて、大晦日までひとつも眞言はなかりき、されどもさし詰りたる時人の爲にもなる者なり、又室町三條の邊に、かくれもなき歷々の子に替名は篠六と云ふ人、いかに若ければとて七年此のかたに、請取りし金銀を若女ふたつにつひやし、隱居の貯有るに極りし分限なれどもまゝならず、俄に浮世もやめがたく、手筋聞出

し長崎屋傳九郎を頼み、死一倍のかり金千兩才覺させけるに、都は廣し、是に借す人も有りて、かり手の年の程を見に遣しける、笹六美男を俄に逆鬘にして、身を見ぐるしうなし、今年二十六なるを三十一になりますと、知れて有る年をまざ〳〵と五つ隱されし、世上のならひにて年若に云ふを悦びしに、さりとては不思議晴れざりし、銀かす人の手代熟見定め、御歳はいくつにもせよこなたの御親父なれば、いまだ五十の前後なるべしといへば、わたくしは年よられましての子なり、もはや親仁は七十に程近しと云ふ、手代合點せず、此の中も見ますれば、見世に御腰をかけられ、根芋をねぎり給ふ言葉つき、大風の朝ちり行く屋根板を拾はせらるゝ心づかひ、あれならば御養生する所有るまじ、まだ十年や十五年に灰よせはなるまじ、死一倍はかされまじきと云ふ、それは大きに思召の違うた事、持病に目舞殊に次第肥は中風下地、長う取つて五年か三年、外にしまうてやる思案も有り、是非に借りて給はれと云ふ時、もろ〳〵の末社口を揃へ、我我が思入にて長うは有るまじ、是に相詰めし者共は、あの親仁様の葬禮を頼みに、此の大臣に御奉公申せば、時節を待たず埒の明けさしましやう御座ると云ふ、さもあらば手形の下書と言捨てゝ歸る、抑死一倍金子千兩かりて、其の親相果つると、三日がうちにてもに千兩にてかへすなり、手形は二千兩の預にして、小判一兩月一匁の算用に、一年の利金計首に取るなり、千兩の二百兩引きて八百兩に渡しける、此の内借次の長崎屋世並にて百兩取つてしめ、手代への禮とて二十兩とられ、相判に家屋敷の有る人頼みしに、此の二代に判代とて利なしに二百兩借られ、此の程此の事に入用銀とて取られ、此の座に居賃と云ふ人も有り、大分事首尾して御祝ともらはれ、はらりと切きほどきて、千兩の物を手取は四百六十五兩殘りしを、餘多の太鼓持いさめて、是は目出たし大臣御立と、すぐに御供申し、四條の色宿にて硯紙取出し、拂方の覺書、久しく埋れたる揚屋のとどけ、彌郎の花代、茶屋の捌、大臣の御意にて二階の天井仕りました萬事の拂十兩迄は入らずと、遣日記を御目にかくる、二三年以前に旅芝居の時損したこと申すやら、覺もなき奉加帳に取出し、無縁法界六親眷屬までに、書立てられかなしや此の金物の見事に皆になし、一兩三歩殘りしを、さもしや、旁々大臣に金子など持しますはと、取つてからりと錢箱に拋入れられ、うか〳〵と酒になる時、あの夢の覺めぬうちにと一人々々立退き、殘るものとて内よりつきし六尺一人、お宿の戸をしめ時と連れまして歸りける、いよ〳〵親仁の無事を歎

き、江州多賀大明神に參り、親の命を短く祈れど、何をか聞きし、此の神は壽命神なれば、なほ長生を恨み、諸神諸佛をたゝきまはし、七日がうちにと調伏すれば、願に任せ親仁眩瞑心にて各々走けつけしに、笹六うれしき片手に年比拵へ置きし毒藥取出し、是氣付ありと素湯取りよせ、嚙碎き覺えず毒の試して、忽空しくなりぬ、さまざま口をあかす甲斐なく酬立所をさらず、見出す眼に血筋引き、髪縮みあがり、骸體常見し五つ嵩ほどになりて、人々奇異の思をなしける、そののち親仁は諸息かよひ出で、子は先立ちけるを知らで是を歎き給へり、欲に目の見えぬ金の借手は今思ひあたるべし。

二　大節宴にない袖の雨

伏見に內證掃きちぎる竹箒屋

桃はかならず貧家に植ゑて花の盛、山城の伏見の里墨染といふ所に、むかしは櫻咲きて都の人をも爰に招ぎて入日を惜ませ、上戸は殊更下戸の目にさへ、行春の名殘酒、毎日見る人こそかはれ、此の一木の陰にて呑懸け、間もなき滴瀝露より輕きことなれど積れば、眞砂の下行き川と成り、此の根ざしに流込み、可愛櫻は枯れて名のみ殘りて、墨染の水と云ふは、其の庭にありて秀吉公の御茶の水ともなれり、今は其の時にかはりて京海道の辻井士となり、町作も次第に淋しくなりぬ、此のあたり荒れたる宿に住みなして、火桶の文助といへる男世をわたる業とて、竹箒の細工さわがしく、風の朝夕も身を凌ぐ衣もなく、霜夜を埋火に命をつなげば、かれが有る名は呼ばず、火桶〳〵と呼びぬ、悲しや年の暮も餅搗かず松立てず、箒で掃きたるやうに薪棚絶えて、米櫃にいかな事なんにもなく、世にある人の絹配、丹後鰤の肴掛をうらやみ、夫婦こそは老の波かゝるうき事も是非なし、せめて子供が正月に太箸とらぬも情なし、身過の常に定なきこそうたてけれ、數年此の里に早桃と云ふを作りなし、梢の春より初秋を待兼ね、色もつかぬを枝に見て、京なる日暮の八百屋に遣し、賣錢大分に德を得て、此の幾年か大晦日心やすく越しゝに、八月二十三日の大風諸木根をうちかへし、殊に年切して世間並とは云ひながら、勝れて我ばかり悲しく、板庇も博止のみ殘りて、其の後の時雨には、不思議に賣殘せし長持の蓋あけて、親子五人是に蹲りて、片角に木枕をかひづめにして、息出しの不自由さ浮世の闇にまよひ、可笑からぬ命と悔むにかひぞなき、我が家

ながら賣るに買手なく、さながら四間口人に無値もやられず、樽代に五十目か三十目おこせばやるに、此の家も京橋の舟の乘場なれば、捨てゝも六貫目が物は有るに、十八町の違各別と、所を悔み身を恨み過ぎにして行上を思ひめぐらし、御上洛の有る事もがな、松は永代此の家退くまじきと我を出しける、此の者三人の子を拂つ、總領は文太左衞門とて、今年二十七になりぬ、然も徒股切れあがりて大男、生付きの頬髭、眼ひかりて不斷笑へる貌つき、餘の人の喧嘩時より怖し、然も猛しければ、肩の上の働しても二親過しかぬべきにあらず、形に人おそれければ、博奕の場に躙込みて讃をいうても口過なるまじき骸體にあらず、此の男大惡人、十六の夏の夜妹にあふがせしに、いまだ七歳なれば手先に力なくて、團の風もまだるきとて首筋逆手に取つて拋げしに、庭なる碓のうへにあらけなくあたりて息絶え、脈に賴なく、當座に露と消えしを母親なげくにかぎりなく、其の死骸に取りつき、身も果てんと思ひ極めしに、其妹五つになりしが、童心にも袖にすがり泣出すに不便まさり、前後を見合すうちに、近所の人いかにととひ寄るにぞ氣を取りなほし、時竹の怪我なれば是非なしと野邊の送を急ぎ、其の跡を隱しすましぬ、又二十七の年、主ある人を横に、車道竹田の里に毎夜通ひしを母聞付けて、命の程もと意見するに、ある曉がたに歸りて蹴立てけるに母はそれより腰拔け、立居も心に任せずむなしく年ふりしに、妹娘おとなしくなり、湯茶をも汲みて孝をつくしぬ、父親に世をかせがせ、おのれは樂寢して朝貌の花つひに見た事なく、親仁世は露の命とねめまはして、天命しらずと人みな指をさせど、ふかく惡めどまゝならず、因果は親子の中、是にも同じ家に置きて、ない物食はふと言ひたいまゝに月日をかさね、今といふ今さしつまりて一日くらし兼ね、水を湯になす生柴もなかりき、同じ枕に最後を極めぬ、かゝる時にも母親娘をかなしみ、人置のかゝを招ぎ内證をかたり、是が命をたすけ問屋町のよろしきかたへ奉公に賴みければ、人置も袖を絞り、十分一は取らずに濟し申すべきとつれ行くに、足立たずして、やう〳〵負うて行くにぞ涙なる、智惠はあれどもちひさくして、銀借す旦那なければ、我ばかり身をたすかりて詮なしと、又親もとへ歸り彼のかゝに私語きしは、みづから賤しき形ながら、それ〴〵の勤もあれば、傾城屋に身を賣る事はといふにぞ、心ざし艶しくいづれの道にも親達のためなればとて、島原の二文字屋とかへつれ行きしに、子細を聞きて情をかけ、女はさもなけれど其の心ね末々のたのもしく、金子二十兩定の年期にし

て借しける、伏見に歸り此の金親にわたせば、世にたぐひあれども、子に身を賣らせ、其の金にて年をとる事はと歎くを、人置色々諫めて戻し、跡にて子ながら思入を嬉しく、明くれば十二月の二十九日萬の買物心當しけるに、此の事を聞付け商人のならひなれば、米屋より は一俵庭に運ぶ、味噌鹽酒屋より持ちかけ、久敷音信不通の肴屋も御用なきかと尋ね來り、すこしのうちに銀程自由なる物はなしとよろこびし其の夜、總領の文次左衛門二十兩の金子を盗出し、行方知れずなりにき、程なく明けて大年なれど、此の仕合なれば買懸濟すべきやうもなく、皆々取りかへされて又夢の間の昔になりぬ、今は是非なく夫婦宿を忍びいで、又の世の道しるべ六地藏のほとりに行きて、高泉和尚の寺ちかき野原に座を卜めて、遠くは過去慳貪の果なる事を思ひ、近くは求不得苦を觀じ、當來を祈らんにはと佛名繰りかへし、舌喰切りて骸は山犬の物とぞなりける、諸人文太左衛門を惡み、此の行方東の方なるべし、相坂の關を赦すなと、追つかけしに粟津の松原より空敷歸りぬ、しらぬ事とて是非もなし、文太左衛門は手近なる鐘木町に忍び入りて正月買と浮れ出し、あまた女郎を聚め、七草の日迄一歩殘らず蒔散して、不首尾あらはれ渡り宇治の里に立退きしが、彼の二人の親の最後所になりて足すくみ、樣々身もだえしに、眼暗みて倒れしに、二親のなき骸を喰ひし狼出でて、終夜嬲喰大かたならぬうきめを見せて、其の骨の節々迄を餘多の狼くはへて、狼谷の海道ばたに又人形を並置きて、文太左衛門が恥を曝させける、世にかゝる不孝の者ためしなき物がたり、懼しや忽に天是を罰し給ふ、慎むべし〳〵。

三　跡の剝げたる嫁入長持

加賀に美人絹屋

聟入娌取に礫を打つこと狼藉なり、いかなる故にぞと思ふに、是恪氣の始なり、人がよき事あればとて脇から腹立ちけるは、無理の世の中の人心、我が子さへ親のまゝならず不孝となり、女子緣付の年の程ありて、人の家に行き其の夫にしたしみ、親里をわすれぬ、此の風儀何國もかはる事なし、加賀の城下本町筋に絹問屋左近右衛門といふ、所久しき商人身體不足なく、其の身堅固に暮し子二人有りしが、屋繼は龜丸とて十一歳、姉は小鶴と名付け、十四歳なるが形すぐれて一國是沙汰の娘なり、不斷も加賀染の模樣よく色を作り品をやれば、誰

がいふとなく美人絹屋と門に人立絶えず、折ふし縁付頃なればあなたこなたの所望、此の返事母親も迷惑して申しのべし、手前よろしければ兼て手道具は、高蒔繪に美をつゝし、衣裝は御法度は表向は守り、内證は鹿子類さま〳〵調へ、京より仕付方の女を呼寄せ、萬事おとなしく身をもたせ、今は誰殿の娌子にもおそらくはと、母親鼻の高きこと、白山の天狗殿も貌を振つて逃げ給ふべし、實にや娘の親のならひにて、化物盡の咄の本の中程に、赤子を頭から嚙喰ふ貌つきなる娘も、花見紅葉見の先に立てゝ、搗臼の歩行樣なる後から黑骨の扇にてあふぎ行くは、懷きばかりにはあらず、母の目からはむかしの伊勢小町、紫の長帶、前から見ても横から見ても、釆體よしと思ふをかし、是さへかくあれば、左近右衞門娘に衣類敷銀を付けしは、よい事ばかり揃へて人のほしがるも尤なり、此の娘の物好みに、男よく姑なく同じ宗の法華にて、奇麗なる商賣の家に行く事をと云へり、千軒も聞きくらべ見定め、願のごとく呉服屋に遣しけるに、兩方牛角の分限馬はうまづれ、絹屋呉服屋さも有るべしと沙汰しけるに、此の娘半年も立たざるに此の男を嫌ひ初め、たび〳〵里に歸れば眤も薄く成りて、暇の狀を遣しける、間もなく其の跡へ呼べば、娘もまた、菊酒屋とて家名高き所へ娶らせけるに、爰も秋口より物かしましとて、いやがれば、縁なきものよと呼返しぬ、其の後貸銀して仕舞屋へ遣しけるに、爰も人ずくなにして算用する内を嫌ひ、名殘をしがる男を見すて、恥をも構はず歸るを親の因果にて捨てがたく、三所四所さられ、長持の禿げたるを昔のごとく塗直して木藥屋へ送りけるに、男に子細もなく身上に云分なければ、際狀取るべき事もならねば、作病に癲癇病出し、目を見出し口に泡を吹き手足ふるはせければ、是見て堪忍成りがたく、竊に戻すを悅び、親には先の男に嫌ふ難病ありと、跡形もなき告口此の報有るべし、程なく振袖似合はず、脇塞ぎてからも二三度も縁組み、十四より娌入しそめ、二十五迄十八所去られける、女にかゝる惡人あるものぞと、後に聞及びすて所なく年をふりける、娌入の先々にして子を四人産みしが、皆女の子なれば暇に添へられ、是も親に養介を懸けて撫育しに、夕に泣出し朝に煩ひ、憂目を見せて此のうるさきこと、藥代にて世を渡る醫者も後には見舞はず、死次第に不便をかさねける、弟龜丸女房呼時なれども、姉が不義ゆゑ其の相手もなく過ぎぬ、龜丸ぜひもなき思と成り二十三歳にて果てぬ、ふたりの親も世間を恥ぢて宿に取籠り、悔死さぞ口惜しかるべし、其の後は獨家に殘れど夫になるべき人もなく、

五十餘歳迄有る程を皆になし、親の代につかはれし下男を夫として、所を立ちさり片里に引込み、一日暮に男は犬釣をすれば、おのれは髪の油を賣れど、聞傳へて是をかはず、けふをおくりかねて朝の露も咽を通りかね目前の限となりぬ、花に見し形は昔に替り、野澤の岩根に寄添ひ、身伊羅のごとくになりて死にける、總じて女の一生に男といふ者一人の事なるに、其の身持惡しくさられて、後夫を求むるなど末々の女の事なり、人たる人の息女はたしなむべき第一なり、緣結びて二たび歸るは女の不孝是より外なし、もし又夫緣なくして死後には比丘尼になるべき本意なるに、今時の世上勝手づくなれほとで心のさもしき事よと、僞を商賣の仲人屋も、是は眞言かたりぬ。

四　慰改へて咄の點取

大坂に後生願屋

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、何も入らぬ浮世とは思へども、一日も食はねば飢爲し、人は盜人火は燒亡と、舞まひの又太夫が言葉のすゑ、去程に今時の出家方氣程をかしきはなし、智惠才覺にはかまはず、武士の家にては弓馬の藝に疎く、又病者にして勤の成り難きを進めて衣を著せ、町人は算用おろそかに秤目覺えず日記付さへならざるを、とても商人には思ひもよらず、世を樂に墨染になれと、親類了簡の上にて、髪をおろさせ、生玉の邊高津の宮の片陰、鹽町の裏に合力庵を結び、はじめの程は法師珍しく、朝水手向け夏花摘むなど殊勝に世間の取遣の物前にも、根付にする瓢箪の口を細工にして居るなど、山椒は辛し毘布出は甘し、萬の精進物を覺え、むかしの鰒汁も忘果てゝおもしろや此の境界と、思ふた計にして又の世の佛の道をも心の駒の匕ね次第に知らず、衆生をすゝめる基もなく、布袋肥に齋米を費し、娑婆塞に今の世に多きものは供一人連れし醫師と道心者、扨も坊主がちにぞ成りにける、殊更近年女の墨染も佛の身ならば彼等が心底を聞きたし、後の世願ふは稀なるべし、只夢なれや難波津の大湊、横堀あたりの問丸に鹽屋の何某年久しく子のなき事を歎きしに、適々男子を設け花にも月にも詠め、大事に育てしかひありて、十五歳にして脇を塞ぎ六の年角を入れて、然も美男なれば世の讃草も靡き、ふたりの親も我が子自慢して、此の上の富貴に何にても望なし、此の子が娌なるべき容儀もがなと、やう〳〵尋ね、堺の大道よし有る人の息女を

縁極して、表家作の大普請萬事に清羅を盡し、はなれて隱居拵此の霜月の吉日を待ちしに、其の頃は咄作りて點取の勝負はやりしに、をりふしの兼題に、還咲の花の蔭に哀に可笑物、初霜の朝に四人泣くは悲しき物、世の中にあればいやな物なければほしき物、はじめ懼しく中程はこはく後は好かぬもの、時雨の夜は跡先の知れぬ物、此の五つの題を取りてあけ暮案じ入り、咄程の事ながら、心をそれになして安達が原の鬼ども胸を燃し、人の物を遣らぬ分別も出で、今も知れずと無常を觀じ、けふの首尾太夫はいかに暮しけるぞと思ひ、様々に移氣魂我ながら定めかね、現に枕引きよせ寢入りもやらぬ耳ぢかく、十月十五日の曉がたに浮世念佛のつれ聲、艶しく殊勝に思ひ入り、明くるを待兼ね、出家の書置して難波の寺に入るを、各ことぼを世に有る程盡し意見を聞きわけず、國遠して面影もなかりき、二人の親又もなく泣憔れ、五年あまりも待つにおとづれなきを、猶悔みて思死の時誰に殘してと、可惜財寶をなくなし、其の家名絶えて後は云出す人もなし、難波を出でて筑紫潟にくだり、善導寺に勤めしが、又心とり亂して、跡を顧ず還俗して、登の舟路にて精進をあげ、むかしに歸る家もなく、心當も大きに違ひ、責めては已前の家來に、すこしの合力を請けて、堀づめの新道に宿をもとめ、南京獅子笛の細工、土佛の水あそびおのづから身けづりし、無用の道心何の見付所もなく、尊き事をも辨へず、無我無分別の發心、親に思はざる外の氣を惱せ、是競なき不孝坊といへり。

卷二

一　我と身をこがす釜が淵

近江に惡い者の寄會屋

金の釜の穿出今の世にはなかりき、富貴にしても苦あり貧賤にしても樂あり、一切の人間應ぜぬ分限をねがひ、身を滅法す古例其の數を知らず、小波や大津の浦より矢橋に渡す舟翁の身は、比叡の山風の燈と危く、入相の鐘を聽けば命の内外の氣遣、俄に雲と成り雨と成る鏡山も人貌見えず、暮蒐り、旅人心のいそげば爰は一勢出し艪を蚤めてなど聲々に賴めば、我老の波六十に餘れ共今時の若者拙者が祖、思ひもよらずと諸肌脱ぎしに、肩さきより手首ま

で切疵明所もなく、枝を深山木の漆のごとし、なほ背中にうきめを見せける、あれでも死なぬものかなと、おの〳〵横手を打つて、是はいかなる故にかくまた身をあやしめけるぞ、親仁問はれて泪に袖裏を浸し、されば人間先生の因果を知らず、それがし抑は石川五夫太とて志賀の片里に住みなして、あまたの人馬をかゝへ、物つくりをして世の中の秋にあひ春をおくり、然も一子に五右衛門とて、勝れたる大力殊に諸藝に達し、老のすゑ〳〵頼しかりしに、已が農作を外に無用の武藝をたしなみ、軟、取手を稽古に閣の夜の衢に出で、往來の人をなやましけるが、後は欲心おこりて、勢田の橋に出でて水を呑み、盗跖長範にまさり、國に盗人の司となり、類に集る悪人關寺の番内坂本の小虎、音羽の石千代膳所の十六此の四人をはじめ、其の外鍵放の長丸手鞴の風之助、穴堀の團八縄すべりの猿松、窓くゞりの輕太夫格子毀の鐵傳、猫のまねの闇右衛門、隱炬の千吉白刃取の早若、これらをそれ〳〵の役分して近在所々に入りて、夜毎に寢耳をおどろかし、萬人の煩となりぬ、此の事次第につのれば天の咎世の穿鑿、いかなるうきめにあひつらんと頻に意見するに、却つて怨をなし珍在の親に縄をかけ、それにて思ひ知れと捨て置き、おのれが寶をおのれと盗み、眷屬めしつれ都の方に行きける、其の跡にて日頃五右衛門に恩ふかき狼藉者亂れ入り、子のかはりに此の親を死なぬ程切れ〳〵と、此のごとく身を苛責れ、是にもをしきは命、世の業かへて生死の海のわたし舟、さりとは〳〵かなしき物語の内に舳先岸に著けば、おの〳〵あがりかゝる悪人も有る物ぞ天竺阿闍世唐土の悪王にもおとらじと、みな〳〵涙になりて別れし、彼の五右衛門は都にて晝中に鎗を三人ならびの手振を先に立て、其の身は乘馬跡より挾箱持沓籠歴々の侍と見せて見分にまはり、大盗の手便をして、仲間に子細あれば、大佛の鐘を撞きならし、是相圖に集り、おのれ六波羅の高藪のうちに隱れ居て、夜盗の學校とさだめ、命冥加の有る盗人に此の一通指南をさせ、前髪立の野等には巾着切を教へ、大膽者には追剝の働をならはせ、人體らしき者には詐の大事を傳へ、里そだちの者には木綿を盗ませ、色々四十八手の傳受を印可迄此の道執行するこそうたてけれ、後は三百餘人の組下石川が掟を背き、晝夜わかちもなく京都をさわがせ、程なく搦捕られ、世の見せしめに七條河原に引出され、大釜に油を燒立て是に親子を入れて煎られにける、其の身の熱を七歳になる子に拂ひ、とても遁れぬ今の間なるに、一子を我が下に敷きけるを、見し人笑へば不便さに最後を急ぐといへり、已その

辨あらば斯くは成るまじ、親に繩かけし酬目前の火宅、なほ又の世は火の車、鬼の引肴になるべしと、是を悪まざるはなし。

二　旅行の暮の僧にて候

熊野に娘やさしき草の屋

雪こん〳〵や丸雪こん〳〵と小妻に溜めて、里の小娘嵐の松陰に集り、脇明の寒けき事は厭はず夕暮を惜む所へ、熊野參詣の旅僧山々の難所を越えやう〳〵麓にさがり、此の童子の方に立ちより、息も絶々の聲して、人の住家は遠いかと、足腰爰を立ちかねしを見て、皆々宿にはしりぬ、其の中に岩根村の勘太夫が娘小吟といへるは、いまだ九歳なりしにおとなしく、今少し行けば我がかたなり湯をも進すべしと、御出家に力を付け道しるべして宿にかへれば、夫婦立出で小吟が心ざしを思ひやり、又旅人あはれと萩柴折燒きさま〴〵饗應しける、法師草臥をたすけられよろこび限なく、心靜に油單包をあらため肩にかけて、某國里は越前福井の者なるが、過ぎし年二人の親に別れ、それより世を捨てかく墨染の袖に、涙はしばし干し兼ねて、せめては死跡の供養に諸國を順りける身なれば、重ねて又もやと手を合せて拜み、夜を籠めて立行く跡にて娘申しけるは、今の坊樣は風呂敷包の中に小判のかさたかく革袋に入れさせ給ふを見付けたり、おひとりなれば人の知る事にもあらず、殺して金を取り給へと私語きけるに、思はざる欲心おこり、山刀をさして枕鐵提げ、跡を慕うて追ひかけ行く、いまだ此のむすめ九歳の分として、かゝる事を親にすゝめけるは悪人なり、殊更熊野の山家なれば、干鯛も木になる物やら、傘も何の爲になるものをも知らざる所に、小判といふ物見しりけるも不思議なり、かの出家廣野に枯れし草分衣の裾高に取りて、霜月十八日の夜の道宵は月もなく、推量に縹行くに脇道より人の足音怪しく立ちとまりけるに、大男鐵の鞘はづして飛蒐るを、これは悲しく逃さまに顧れば、最前情にあづかりし亭主なり、言葉をかけて、我出家の身なれば命惜しきにあらず、然れども何の意趣ありてかく害し給ふぞ、路銀を取るべき望あらば命にかへてをしまじと、小判百兩ありのまゝに拋出せば、是を請取り銀が敵となる浮世と思へど、脇腹をさし通せば、困しき聲をあげ、おのれ此の一念幾程かあるべし、口をしや〳〵と云ふ息の次第に弱り、野澤の汀に倒れしをおさへて、止を刺し、死骸を浮藻

の下に沈め、竊に宿に歸れど世間にしる人もなく、其の後は家榮えて牛も獨して持ち、田畠も求め綿の花ざかり米の秋思ふまゝなる月日をかさね、小吟も十四の春になりて櫻色なる貌を作れば、山里には殊更に目立ち是を戀忍ぶ人限なし、姿の自慢より男撰して終に夫を定めず、身を存在に持ちて浮名の立つ事うたてし、樣々異見するにかつて親のまゝにもならず、此の富貴は自が智惠付けて斯樣に成りけると、折々大事をいひ出し、子ながらもて餘しける、ある時我と男を見立て、あれならばと云ひけるほどに、とかくは心まかせにと人賴して橋をかけ、世をわたる持に愚ならぬ聟なりと、一しほよろこび契約の酒事まで濟みて後、この男の耳の根に見ゆるほどにもなき出來物の跡を嫌ひ、和歌山の姥の方へ逃行きしを、所に置きかね屋敷方の腰元づかひに遣しける、其の身いたつらなれば奥樣の手前を憚らず、旦那に戲を仕かけて、いつとなく我が物になしける、流石武士の息女なれば、世に有るならひと知らぬ振したまひて過ぎぬ、小吟募つて此戀止めず家も亂るゝ程になれば、世上の取沙汰思召して、此の事へだてぬ夫婦の中に語り給へば、旦那今迄の謬至極の心になりて、それより此の道かたく止めさせ給ふを、小吟奥樣を深く恨み、ある夜御番の留守を見合せ、御寢姿の夢の枕もとに立寄り御守刀にして心臓を刺通しければおどろき給ひ、おのれ遁さじと長刀の鞘はづして、廣庭まで追ひかけ給へ共、かねて拔道こしらへ置き、行方しらずなりにき、色々御身を揉み給へども深手なれば弱らせ給ひ、小吟めを打ちとめよと二聲三聲めより幽に、はや命はなかりき、御次に臥したる女ども事過ぎて起きあはせ、是はと歎くにかひなく、小吟が逃延びし道筋に、追手をかけしに、女には健に立退きし、小吟が出づるまでは其の親ども籠舍とありて憂きめを見せける、いよ〳〵出でぬにきはまり、霜月十八日に成敗と仰出されしに、此の者あづかりし役人不便に思ひ、子ゆゑにかくは成りゆくなり、臨終を覺悟して又の世を願へと、夜もすがら酒をすゝめけるに、此の親仁め機嫌よく更に歎く氣色なし、外にも科ありて命を取らるゝ者我が惡はいはで歎きしに、汝は子のかはりにかゝるうき事にといへば、此の者出家を殺せし因果の程を語りて、七年目にめぐり月も日も明日に當れり、此の筈と思ひ定め觀念したる有樣、惡は惡にして今此の心ざしを皆々あはれに感じける、とても逃れぬ道を急がせ、首打つての明の日、親の樣子を聞きて隱れし身をあらはし出でけるを、其のまゝ是も討たれける、何處までか一度はさがさるゝ身をかくしぬ、おのれ出づれば仔細

なくたすかる親を、是ためしもなき女なりと憎まざるはなかりき。

三　人はしれぬ國の土佛

伊勢に浮浪の釣針屋

御經にも命は水上の泡のごとしと有り、浪は風の立たせ人は友の噪しぬ、伊勢の國鳥羽といふ大湊に、山崎の藤内とて貧家に煙を立て、蜑の手業の釣針の鍛冶住みしが、藤助と名付けて一人の子を持つ、老の立居の手祐鑛の槌をうたせ、かゝる浮世習にて親は憐み子は孝を竭すを道なり、此の浦邊に近年の出來分限神部屋といへる人、仕合丸とて大船を作りて大廻しの江戸商、此の舟の上乘に若き者の抱へられしに、藤助家職を捨てゝ是を望みしを、二人の親深く歎き、身過は樣々なり、萬里の海上を行く事ひとつの命を二つ物がけ、是非に思ひとゞまれと、大かたならず旅の名殘を惜み、死別るゝが如く涙は目の前の海ともなりぬ、此の有樣をかまはず、東路見るためなれば此のたび計と出でて行く、其の跡は風の夕暮雨の朝を物案じして、諸神に大願諸佛に歩を運び、後世を忘れて現世を祈り、我が子の無事願ひしに明くの年の春の風舟は異なく湊に着きて、二度貌を見し事悦の酒の上に、樣々の誓言にて親たる人の心を背くなれば、重ねては思ひもよらぬ舟の上と言葉にて安堵させしが、心底には中々思ひとゞまる事にあらず、欲は人の常なり戀は人の外なり、最前下りし時伊豆の下田に舟がゝりせしに、其の苦の屋の女に假初の誓して、古郷の住ひを捨ておの〳〵に暇乞なしに、出船有るを幸に乘行く、折節は中の秋空おそろしく雲の村立ちけるが、日和見も定なく、此の舟沖に出づると、寅の刻より大風吹暮れ、九日流され、月の光に晝夜の差をやう〳〵に覺え、夢心になつて行く程に、淺瀬に舟底さはると思ふ時、皆々魂を取直し目を開きて見しに、國里の草の彌は有りて蘆の枯葉の芭蕉の如くなる中に、二角後へ生へる獸是ぞ水牛なめ、其の外人形有りて猫の有る物、聲はさながら犬にして一丈餘耳の長き物、ひとつも目なれず物冷くちかづくに身をちゞめける、山も里も見る事絶えて、船中三十二人男泣にして暮れぬ、米はあれ共水をきらし、咽かわけば伊丹鴻之池の四斗入を汲みかはし、此の中にても醉にうきを忘れ、鹿の卷筆の小歌唄へば觀音經讀むも有り、六字南無右衞門節の淨瑠璃を語るも有り、下戸は荷物明けて旅硯に露をそゝぎ願狀を書きぬ、又は一歩小判を取出し四五年

に折角延しけるかひなしと算用して居るも有り、今果つべきも知らぬ命のうちに、足がさはつたと口論をする機嫌も有り、來年の正月の事を云ふもあり、人の心はさまざまにかはれど、此の舟爰を去らぬ難義思ひ出せば總泣に哀はとふ人もなく伏ししづみぬ、なほ立つ波荒く、生臭き風吹きてまた此の舟を散し、遙なる磯邊に着きて岩組にあがれば、清き流の幾筋かありて是を掬びあげ、舟にもたくばへをして命を繋ぎぬ、心靜に詠めければ、諸木五色の枝を垂れ、玉敷光に驚き我も〳〵と拾ひしに、不思議や老いたる社人顯れ、ひとつも取る事おろかなれ、やれ舟に乘れと有難き教に任せけるに、藤助ばかり聞入れず玉拾ふうちに、どつと吹きくるは是神風ならん、波路心に任せ子細なく伊勢の大淀の濱に戻りて、藤助が身の上語りければ、夫婦の人こがれ泣き、五歳あまり待佗び、二人共にはかなくなりぬ、彼の藤助は島に殘され有りしを、見なれぬ唐人あまた來り、取圍みて連歸り、鐵門の緊しき人家に入れて銅の柱に貫とほせし中程に、逆倒に釣揚げ手足の筋をとりて、人油を絞られしは生をかへずに地獄の責にあひぬ、よわれば藥を與へて生けつ殺しつ日數ふる内に、日本より渡唐の僧四百餘州を順りて此の所にきたり暫佇立、此の有樣を見給ふに、藤助むかしの形は眼ばかり動きて、右の小指をくひきり左の袂に心のほどを書きて見せける、自は生國勢州鳥羽の湊藤助と云ふものなり、おもはざる難風に逢ひて爰に流され、かゝるうき事に身を責めらるゝは悲し、此の所は纐纈城とて恐しき國なれば、命を取られ給ふなと書付けて見せしにおどろき、爰を立ちのき、執行の後歸朝し給ひ、此の里に來りて、此の物がたりあそばしける、聞く人涙にくれて、此の藤助が身の難儀は、皆親の言葉を背きし罰ならんとおもひやりぬ。

四　親子五人仍書置如件

駿河に分限風ふかす虎屋

人はみな煙の種富士の山はげしき風病はやりて、難儀を駿河の町に醫師隙なく、旦那寺の門を敲き無常はいつをさだめがたし、折ふしの寒空には經帷子ひとへを浮世の旅衣、爰に呉服町二丁目に虎屋善左衞門とて分限國中に沙汰し棟高き家有り、年榮えん時より法體しての十德、名を善入と善ばれて何の役なし坊となりぬ、總領を善右衞門是に家督を渡し、二男善助には殿方の商、三男善吉に町屋善八に寺方と、それぞれに商賣の道筋をつけ、いづれも若盛

にして器用に勝れ、笛鼓太鼓をならべて、朝暮座敷能を善入太夫をし給へば、四人の子ども囃方を勤め、手代あまたあればワキツレ地謠まで家内にて仕舞ひ、歡樂ならびなく、いつ年のよるべきものとも知らぬ身の、夕暮より風心と、少しの事の覺めがたく、色々醫術を盡す、驗氣もなく、次第よわりの枕に四人の子、御機嫌の程を親ひけるは又もなく美々しく、人は病家を他人に見せけるは悲しきものなり、かゝる時節には妻子ならでは頼なし、善入浮世の限と思ひ定め書置狀を殘さんと、四人の子供ちかく寄せ通口の戸をしめて、我此の度絶命なれば申置く事外になし、兄善右衛門を親にして我に隨ひしごとく何によらず少しも背く事なかれ、扨世間を思ひまはす見分よりないものは金銀なり、此の家久しく榮えて外よりの思はくには、五萬兩も有るべきやうに見ゆべし、汝等先として頼しく思ふべけれど、人には聞せぬ事さりとは各別の内證なり、内藏の鑰渡すなれば、諸道具改むべし、我が名跡をつがせぬれば此の屋敷萬事を此のまゝ、善右衛門に取らすなり、有銀は甲乙なしに、四つに分けて讓るなり、爰に秘密の内談有り、手前よろしき人には大分の金銀をもあづけ、緣組の爲にもなり、彼是勝手の好き多し、それによつて我分別して世の聞計に、ない金子を書置する事ぞ、

必ず心にて濟すべし、漸々小判二千兩ならでは淺間を誓文にて外になし、是を八千兩にして、一人に二千兩づつと書置くなり、無用の借上なれども人間は外聞と申されなければ、いづれも御心ざしに泪を流し、たとへ御讓なきとても願び申すにあらず、自然御死去あそばすとも、兄親の事なれば隨分御心に隨ひ、世わたりを精に入れ、するゝ〳〵繁昌になし申すべしと言葉を揃へて申しげれば、善入うれしく、今は思ひ殘す事もなしとて此の通に遺言狀を認め、それより四五日過ぎて極る往生を各々悲み野邊の送、花をふらし、死光とや提燈道をかゞやかし、葬禮迄を人うらやみける、地獄極樂の道も錢ぞかし、四十九日迄　弔諸僧の經の聲絶えず、人皆是を殊勝に思ひしに、二男善助七日もたゝぬうちより惡心起り、香花をもとらず、十露盤枕にして思案をめぐらし、善吉善八をまねき、此の程つく〳〵思ふに、いかにしても此の家に二千兩ばかりの有金世上にも誠にせぬ事なり、是は善右衛門親仁を詐し、かくは書置させける、八千兩金子あるに極りし事なり、其の上大分の道具を取るなれば、是非書置の通り金子請けとれと申出せば、欲に目の見えぬ若者すゝみて、段々親仁しかた惡し、兄貌をして善右衛門にくし、書置を證據に此の金子請けとれと後先かまはず談合しめ、此の通申せ

ば善右衛門駭き、其方皆々相對して、親仁世にまします時よく〳〵合點して今更加様に申すはいかなる事ぞ、人に聞すな心もとなしといへば、三人顏色かへて、何か隱す事には非ず、親の遺言の通に金子渡し給へと、詮議におよばずせめ付けられ、善右衛門身にしては扨も悲しく親の辱を顯し、又斷り申せば家の滅法、色々意見させてなか〳〵聞入るゝ氣色もなし、證文の立つ世上なれば是非もなき仕合なり、よしなき外聞をおぼしめしての跡識忽難儀となり、我一人の迷惑、おのれらも了簡の上にて此の首尾に濟し、いつはりなき某を疑ふこと天命遁るべきか、是を思ゑに大方ならぬ因果なり、世にながらへて嬉しからずと思ひ究め、親の名を下すこと後の世迄の不孝なり、命惜しからじと夜更けて宿忍び出で、親達の墓に參り、此の段々を歎き卵塔の水艇に腰をかけ、四十二の十一月五日の明がたに腹搔割いて夢とはなりぬ、野寺の坊主訃音來りて、又もや愁に沈みぬ、中にも善右衛門妻の歎理せめて哀にこそ、三人の弟共　他の人の顏して、死にたはけと申しなし亂氣の沙汰になりて濟みぬ、其の後三人の者藏の鍵請取りて吟味をするに、小判二千兩の外になし、此の行方の詮議止む事なく、其の夜は三人ながら藏なる金戸棚の前に臥しける、夜半に善右衛門俤を顯し、我が女房に心を殘さずまざ〳〵と語りければ夢のうちにも腕を定め、目覺めてなほ一念やめず、枕にかけし長刀取りの　、藏にかけ入り善助善吉善八を漏さず切りすゑ、二歳になりし男子を姥が添乳をせし懷より取出し、自害せられし善右衛門脇ざしを持添へさせ、目前に親の敵打ぞと三人共にとゞさし、此の事姥にかたり置き其の身も心さしとほし消えける、露の世の朝の霜これ程はなかき事はなし、仔細聞きつたへて弟三人の大惡をにくみ、兄の心底おしはかりて、見ぬ人迄も袖を滴しける、其の後は二つ子の善太郎にしらせけるとなり、家榮え家滅ぶるも皆これ人の孝と不孝とにありける。

三卷

一　娘盛の散櫻

吉野に恥をさらせし葛屋

大和國吉野の里に內裏雛を立てゝ、娘友達あつまり彌生の節句遊、菱の餅桃の酒をおくれば、

かへす袂の色はえて人は育にて形の見よげなるぞかし、爰に住みなれて曝葛屋の彦六といへる人有り、家榮えて何事に不足もなし、雜書の通り娘の子計五人、いづれも生付きてうつくしみ女は仕合の種なり、總領お春といへるを其の里のよろしき方へもらはれ、緣組の間もなく懷胎の身となれば、日を算へ月を繰り產れぬ先乳嫗を定め聲鶴龜のつきし小袖を拵へ、夜更けて松吹く風の戸に音信るゝをも其の事かと、母の親目もあはず氣遣せしに、悲しや腹痛みて身を惱み、五七日も憂目を見せし、常々子安の地藏に祈り腹帶の明神に宿願かけしかひもなく、惜しや命十六の卯月ひとへの明けがたに、無常鳥の鳴出し、親兄弟に深く歎かせ、猶袖の雨降りつゞき五月の頃迄思に沈みしを、世にはひとりの子をうしなふも有るに、いまだ數ある事なれば愁をはらせと、道理をよし考へし人にいさめられて、思ひ流する吉野川、泡沫の消ゆるならひとそれが事を忘れ、其の次の娘お夏程なく十六になりて、然も風俗姉に見まさりて彼是こがるゝ中に此の所の庄屋を捌き、聟にしてもくるしからぬ方へ契約して諸道具拵へしが、當年は十六、姉が事思へば吉凶あしきとて、其の年を延べて十七の正月に祝言取りいそぎけるに、是も懷姙して月をかさね姉がごとく持籠にして果てける、いかなる因果ぞと二親是を悔む事かぎりなく、野べのおくりせし時、さる人のさし出でていへり、かくある死人は左鎌をうたせ其の身二つになさでは浮む事なく、後の世覺束なしといふにぞ、猶かなしく沐浴其の通に念佛講中を賴みける、女の身程はかなきはなかりき、されども世上に住むならひとて次第に後を忘れて、又三ばんめの娘お秋といひしも早十五歲になりぬ、とりわき奇麗なる形心ざしもやさがたに情ふかし、近所の人々取持ちてよしある人の子どもに美男なるを入緣にとらせ、思ひはらしにといはれけるに、何事をもうち任せて、其の男子を養ひ程なく家督を讓り、夫婦一度に法體して世の樂と云ふ事今ぞと嬉しく、尊き寺へ參り下向の道に暮しける、明くれば入聟孝を盡し、遠き海魚をかゝる山家に調へ、せはしき事は餘所の吹く風に聞きなし、雪にも燒火して冬なき國の守をも恐れず、此の上に願もなかりしに、いつの頃よりかお秋　梅を好けるにぞ、度々懲りてうたてく、諸神に祈誓をがけ、平產は身の養生是を大事と、事になれたる祖母を雇ひ腹帶のしめ加減、庭はたらきに身をこなし、腰をすこしもひやさず目通より高く手をあげさせず、寢姿も足を伸さず、かしらは關枕にてとゞめ、身をかたむるに殘る所なく、喰物をあらため產月を待ちけるに、是も五體をもだゑ十

日計もうき事にあひて、眠るごとくに息絶え、さりとては外聞もよろしからず、不便は外になりて、骸にかなさなり夫婦自害と見えしを、おの〳〵取付き色々言葉を盡し至極の意見を聞せ、思ひとゞまりて後、三十五日も立つを待兼ね四ばんめの娘お冬をすぐに娶し給へといへば、ふたりの親萬事は人々の御了簡はもれじと、何とぞ我々にはきかせ給はずとも此の首尾頼むと、先立ちし三人の娘のため佛をたつとみ僧を供養し、着なれし小袖の皆々脇さへふさがざりしを、幡天蓋に縫はせかゝる歎の又も有るべきかと、泪は袖行く水に經木を書いて流れ灌頂を立て、親の身の子を弔ふは逆川に沈みて死なれぬ命のつらく、お冬に縁組の事おの〳〵いひも果てぬに、聲をあげて泣出し、泪片手に挾箱の蓋を明けて、麻の衣の墨染浄土珠數を取出し、自が縁は佛様にむすぶ心ざしなり、此のたびの愁のなきうちから夢幻と思ひさだめし世の中、姉さまたちの跡をも弔ふべしと願ひしに、此の宿を出兼て、又もや憂きめを見じ、亂れ心の黒髪有る故と、手づから切るをやう〳〵にとゞめ、さもあれば親の不孝の第一なりと、親類あつまり殊には下市の里に住まれし姨たる人を呼びよせ、さま〴〵に云ひなだめ、せめては三日なりとも男と云ふものにあひ馴れ、其の後は出家になりとも心まかせと泪にくれて、魂の入りかはる迄教訓して、おし付け合點させ祝義の事濟みて、いつとなく契ふかく、四年あまりも過行けば子細なくよろこびしに、又月とまりて産月にたらず、是も空しくなりぬ、四人まで同じ最後なりしは世に例なき事、先生にいかなる悪縁を結び親となり子となり、今の難義にあふ、扨もうるさしと彌々菩提心を起し、常精進の身と成り稱名の暇なく、香花を摘みて、四人が跡を弔ひ片陰に取籠りければ、表屋は昔と荒れて野犬のふしどと成りぬ、發心の身と成りても心にかゝる山の端は、乙女と云ひて五人めの娘今は十五になりぬ、是も縁付頃をうてたく乙女に出家を勸め、最前お冬が心から願の道をとゞめて、よしなき男をもたせ歸らぬ事を悔みぬ、思へば〳〵現の間なり、そなたは髪をおろし姉共が命日を問ひなば、未來をあしからじとすゝめしに以ての外の心入、たま〳〵人間に生を受けて、男と云ふ物持たでは口をしかりき、親達の養介にならじと忍びて庵を立退き行方知らず成りぬ、是をも親子の中なればふかく歎かれしに、音信不通になりておのれと夫を定めける、しかも此の男山だちをして渡世とす、ある夜風あらく雨降りて人音まれなる時を見合せ、乙女が案内をして男をつれて我が親の方に立入り、夫婦の寢られし上に疊を置きかけ、此のく

るしみの内に少の貯物を盗み、岨づたひに逃げ行きしに、此の大悪いづく迄か遁るべし、踏馴れて道筋の岩も人影と見えて心のやるせなく、知れたる淵に飛入り、男も女も眼前に恥をさらして葛屋の名をくだしぬ。

二　先斗に置いて來た男

堺にすつきりと仕舞た屋

人の心程かはり易きはなし、靜なる浦に家の風を吹し、浪のさわがしきも身ををさめぬが故と世間より指さゝれけるは口惜し、殊に泉州の堺はよろづに古風殘りて物事うちばにかまへ、律義を本として、人みな花車に世智かしこく炙ばしにて目をつく如く、其の狹しさ息も鼻もさせぬ所なり、爰に大道筋の南向二十七八間、檜木作の臺格子に二重座の砲釘を打ちかゞやき、奥深に豊なる住居見るさへ浦山し、何を世渡とも知れがたし、むかし唐へ拋銀して仕合次第分限となつて、今此の金銀まうけにくい世の中にしまふた屋殿の八五郎といはれぬ、されども二親に不孝と取りさたする程の事惡人なり、不斷の仕業鹽肴も目にかけて値段をし、計芋も百を何程と數讀みて買ひ、夢にも十露盤を忘れず、錢溜める分別ばかりして袋町乳森の遊女を知らず、夷島の萱芝居見た事もなくて、世帶もちかたむる鑑にもなりぬべき人なり、ある時小家にあつまり歌留多の勝負をはじめける、加様の人の小判を二十兩づつ先斗にはられしを見て、近所の人是を驚き、こなたには氣が違ふてや、かゝる博奕業をあそばしける事思ひもよらずといへば、彼の狹氣人打笑ひ、其方の不思議尤なり、今時何商をしても一倍になる事是より外になし、長崎へ銀を下すは長々の氣遣なり、これは一思ひの早業、千兩がたちまち二千兩になるものを、此の年まで知らぬことの殘多し、舟荷を積みて住吉大明神に祈誓を懸けんより、金銀置きかけて歌留多大明神を祈るが近道と心實からの顔つき、さりとは知れぬものは人ぞかし、是みな欲心よりの思立止むまじきと推量しけるに、案の如く親にうとまれ、此の事意見を聞かず、是に身を染めおのづから人がらも賤しくなりて世上の附合もかき、妻子を見捨て人の物を只取る事おもしろく、此の道のすつぱのかはに出合ひ徐々取りあげられ、いつとなき内藏虚大名と云立てられ、互にかしかりもならず、久しき家に傳りし諸道具を夜市に出すは惜しき事ではないか〳〵と賣立てられ、銀めになる程の物は年々の茶

湯振舞に出で、親代に人も見知りて眼前の恥をさらしぬ、後には一門も見かぎり合力をせず、縁者ににくまれ女房を取歸され、下々も隙もらひ捨てゝ季時を待たず出でて行けば、伽藍のごとく成る家居に燈ひとつ立て、正月に餅を搗かず、盆に鯖喰はず。親子三人暮し兼ね、屋敷を賣りて又其の銀を其の日より打出し、十日も立たぬに負けて其の後は安立町の中程に借家住ひ、むかしのなごり紫縮緬を着ながら、母親の手馴れぬ朝夕の食を燒かせ、父親に水仙の早咲を作らせ、又は山刀豆胡瓜の種賣らせ、おのれは勝間邊の海道端に出で、澁紙を敷きて曲物に一から十五までの木札を入れ、右の手に錐を持ちて、天狗賴母子と名付け道行く人を詐し、馬奴古着買味噌漉賣をまねぎ、是も博奕業にて相取を拵へ、おろかなる人の錢を取りて仕合なれば、直に出茶屋の女に戯れ、酒に其の日を暮し宿には歸らず、年よられし親には濱ちかき鹽さへあたへず、折節の寒空丸雪松原の荒神の前も淋しき、割木の絶えて悲しきこと思ひ詰めてや、夫婦同じ枕に心元を突刺し、遠里小野の霜とは消えぬ、隣に近き櫛屋針屋筆屋のかけ付け見しに、早こと切れて是非もなく各不便に思ひぬ、かゝる時一子の八五郎歸り、此の分野を見ても更に歎かず、人々是をにくみ、死がいの取置にも構はず、野べに送る人もなし、八五郎一人して明葛籠二つに二人死骸を入れて、一荷にかづき鳥田の墓に急ぎしに岸の姫松の邊にて、夜も明がたなるに此の所放埒組後より八五郎を切りて、葛籠を手毎に持ちてあべ野に隱れぬ、此の盜人の仕合明けて悔しかるべし。

三　心をのまるゝ蛇の形

宇都の宮に慾のはなれぬ漆屋

極月十三日の明がたより疊を叩きたて、春待つ宿の煤拂小笹の當座箒も塵に埋れ、人はなほ埃を被きぬれば、水風呂を燒いて入加減よしといふ女のいへば、男聞きて新湯は人の身に毒なり、先隱居の親仁を入れよと心にある事を口に出次第にいひける、不孝は是にて萬を知れたる人、陸奥宇都宮と云ふ所に住みし、漆屋武太夫と云ふ商人なるが、始は纔に硫黄灯心を肩に置いて、山家に通ひて世を渡りけるが、未四五年に出來分限人も不思議立てける、されども此の男常々仔細なきものなれば、さのみ人も疑はず、大黒殿の袋を拾ふか、狐福ならんと沙汰し侍る、人の仕合は知れぬものぞかし、然れども分限に品々あり、世間にかはらず其

の身相應の衣類を著て、朝夕も折ふしの魚鳥を味ひ、貧なる親類を取立て下々を憐み、神を祭り佛の道を願ひ親に樂をあたへ、他人の義理をかかず、萬事直にして富貴なるは天の惠ふかく人の本意なり、世の有樣をみるに、まこと有りて世上に住む人稀なり、それは當分家榮えて滅亡するに程なし、只正直にしてなりはひに一生を送らんは心の取置ひとつなり、此の武太夫俄にたのしければ昔を忘れ、時得て我まゝを振舞へば所に憎み立てられ、人の付會絶えて、我が內の竈將軍寒いも暑いも知らず暮しぬ、そも〳〵有德に成りけるは山里に通ふ時、阿武隈川の水上に細き枝河の續、其の流の元は谷ふかく岩組するどにして落ちかゝる瀧の音に耳を轟しぬ、木立茂みて陰闇く葉末に白玉碎き、不斷時雨の如し、水底夏さへ氷を研りぬ、此の川に江鮭の魚住みけるに、武太夫水練を得て是に入り手捕にして、たび〳〵をもてなしける、或時淵と思ふ所を搜しけるに黑き物山の如く見えけるを、一抓取りてあがれば、峯より年々流れ込みてかたまりし、漆なれば忍びて器を拵へ我が寶にして取りて歸り是を商賣するにぞ、只取る金銀後には置所もなかりし、人みな氣を付けければ、猶欲心深きたくみして細工の上手に龍をつくらせ、水中に沈め置きしにさながら生きて動く如く、日數ふりて是を見るに、口を動し尾を延べ劒を縮め、それとは知りながら恐し、此の事宿に歸り親に語れば、されば人間は欲に限なし、此の上の願何か有るべし、平に止めよと樣々異見せしに、却つて親に仇をなし、已が一子に武助といひし十四になるを引連れて、彼の淵に行きて次第を語り聞せ、我が如く取りならへと親子共に入りしに、最前の龍に精有りて、武助を喰へて振ると見えしをかなしく、藻屑の下に身を沈め二人共に息絶えて、二十四時を過ぎて骸の上りけるにぞ、見る人親の罰なりと憎み、哀と云ふ者なし、此の事顯れ數年か樣の事を押領せし科とて、此の家闕所せられて親は所を立退き、やう〳〵命を助かり悲しき浮世に住みぬ、女は親類とてもなき者なれば、其のまゝの乞食と成りて恥を顧ず、人の門に立ちぬれども姑につらく當りしものとて、すたり行く水をも遣らず、程なく飢死にあひぬ。

四　當社の案內申す程をかし

鎌倉にかれ〴〵の藤澤屋

緣付にあらためて同じ宗門を願ふこそ理なれ、淨土は二十八日を祝ふに門徒は精進日といへ

り、今の世は後生の書にさがり、西は極樂寺ぞ有難し、相州鎌倉山雪の下と云ふ所に、藤澤屋の木工右衞門旅人の留宿をして世を渡りしが、娘一人有りて後、木工右衞門夫婦世をはやうなりぬ、此の娘二十六七まで緣遠き事形おもはしからぬ故なり、いつとなく軒荒れて影もる星月夜も獨寂しく、浮世も協はぬから捨心になつて、朝夕親の香花を取りて涙に暮しぬ、人皆不便をかけ、似合の事もがなと、思ふに幸なくて年ふるうちに今日を送り兼ねし、其比若宮八幡の前に才覺らしき男鬢付あとあがりにして、上髭仔細らしく置きて木綿島の袴に馬乘あけし長羽織に、割鞘の大脇指さして、神主にもあらず地下人とも見えず、海の者とも山家の者とも知れぬ男、金太夫と名を付き、此の所はじめて參詣の人に先立ち、當社へ御案內申しますと早口に腰をかゞめ、是なる銀杏の木の葉は賴朝のお內義の丸鏡の下へ入れられし殘じやと申傳へました、あれなる切石が朽原樣の碓部屋の跡、鶴ケ岡と申しまするは、昔佛の蠟燭立を爰で鑄ました所と申す、是が靜御前の綿帽子掛の松、小袋坂と申すは大黑殿の墓所なり、切通と申しますは、土佐坊が讀かるたをうつた所、扇ケ谷と云ふは淺利の與市が出見世、此の岩に疵の御ざるは、朝比奈が下駄の跡、それに杉の大木の見えますが、和田の酒屋の跡と醉うた顏付して僞八百錢を取らぬと云ふ事なし、此の者生國は丹波の笹山の町人なりしが、親の心を大に背き舊里を切られてさまよひ、爰に來りて口かしこく近付を求め、幽なる片庇をかりて一日暮も氣散なる世なり、此男小判を溜めて人の思はくの外なる內證なれば、木工右衞門が娘のかたへ入聟取持ち首尾殘る所なし、枕をならべ親しくなりて後、此の娘毎日持佛堂を明けて御燈を揚ぐるを見て、彼の男是は何の爲ぞと散々佛前をあらしぬ、女心に悲しく、いかに宗旨違へばとて後世に隔の有るべきや、自に添ひ給へば我が親もそなたの親同前、其の位牌をうち碎き給ふはつらし、子のない中ならば身を拋げはつべきものを儘ならぬ浮世と、日數ふりて此の子三歲に成りぬ、或夜の寢覺に枕もと近き灯の油土器を引傾け、酒のごとく一滴も殘さず呑みける、其の後ためしけるに每夜呑まざる事なし、是かくれなくあなたこなたにて呑せ、前代珍敷事ぞと沙汰せざる所なし、人猶不思議に思ひ、泣く時汕といへば其のまゝにきげんをなほしける、程なく五歲になりて常の人に勝れて賢し、殊更物いふ事おとなのごとし、夫婦悅び花の春を時得て、袴の着初させて近所ひけらかしけるに、此の子大勢の中に畏り、申出すこそ恐しけれ、私の親はともし油賣が肌に金子八十兩付

けしを、此の五年あとに切つてそれより手前よくなられし。しかも其の夕暮は雨風のして、二月九日虫出し神鳴ひびき渡りしと、正々と語ればおの〳〵肩風として、此の悴が顔をながめしに、いかにも〳〵其の比鼈が井の谷にて、油賣を闇打色々御穿鑿今に知れずと有つて、過ぎたる事を思ひ合せて駭きける、物に因果あり、其の中に其の油賣が從弟有りて此の事を聞きとがめ、此のまゝはおかじと俄に親類を集め、内談するを聞きて金太夫たまりかね、科もなき女をさし殺し、己も同じ枕の見ぐるしく、最後を取亂しぬ、其の分に濟みて悴子はたたずむかたもなく、其の日は我家に有りしが、暮天に行方見えずなりにき、今に不思議の晴れざる事。

卷四

一　善惡の二つ車

廣島に色狂の棒組屋

能き友はすくなく、惡敷つれは有るものぞかし、同じ心の海ふかく、安藝國の宮島に通ひ、遊女狂に身を焦し切火繩一寸のうちに、五里の所を早船にて毎夜の噪ぎ仲間二人、心から姿から是程似たる人世間廣島にも又有るまじ、一人は備中屋の甚七、ひとりは金田屋の源七といへり、此のふたり親にかゝりなれば、浮世の拵を知らず、數年貯へおかれし金銀我が物と盗みつかひ、所の長者といはれしも家次第にさびて、十年餘に淺ましく成りぬ、親仁若盛にいろ〳〵の堪難を碎き、今老の入前かゝる身なし、朝夕も烟絶々になりぬ、緣付比の妹ありて、母親自然拵の衣類手道具まで盗出して賣拂ひ其の銀も揚屋の物となりぬ、嫁も裸では呼人なく、哀や腰本つかひの奉公に出され、世上の兄親のやさしき仕形を見て、一しほ恨みぬ、なほ日南に氷のごとく水ばかり殘りて、後は火嘘く力もなく、其の年の波胸に噪しく、節分の夜闇きをかまはず、甚七源七、紙子頭巾を被り棒組の口を揃へお厄拂に出でける、誠に乞食に仕ならひなく、死なれぬ命の恥ながく、東方朔が九千歳と聲をかしげに喚けども、是にさへ仕合なく、夜明がた迄かけ廻りて、漸々二人の中に錢十八文煎豆二百粒ばかり、是では埒もあかぬ世やと親達をさらりと西の國に捨て置き、源七甚七古里を去つて備前岡山より路